
恋姫十無双 外史『無銘伝』

ate81

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫十無双 外史『無銘伝』

【Nコード】

N7569R

【作者名】

ate81

【あらすじ】

この外史は、北郷一刀が全力でとある少女を救う物語。

一振りの刀に導かれ、一刀は三国志世界へ足を踏み入れる

PC版の無印恋姫、真・恋姫を元にした二次創作です。

ルートはオリジナルルート、主人公は北郷一刀。

キャラクターはオリジナルも出てきますが、多くは本家のほうの三国志に出てくる人物がサブキャラとしてでる程度です。

またキャラクターの設定は、性格などはそのまま、来歴（どのよ

うな経緯で、どんな立場にいるか）は少し原作と異なっている場合があります。

例・曹操が登場時点でまだ根拠地が無い、呂布が登場時点ではあまり武将として知られていない、など

第1話 無銘伝々終わりから始まりへ々(前書き)

PC版の無印恋姫、真・恋姫を元にした二次創作です。

ルートはオリジナルルート、主人公は北郷一刀。

キャラクターはオリジナルが少しですが、本家のほうの三国志に出てくる人物がサブキャラとしてでてくるぐらいです。

またキャラクターの設定は、性格などはそのまま、来歴(どのよ
うな経緯で、どんな立場にいるか)は少し原作と異なっている場合
があります。

例・曹操が登場時点でまだ根拠地が無い、呂布が登場時点ではあ
まり武将として知られていない、など

第1話 無銘伝〜終わりから始まりへ〜

第1話 無銘伝〜終わりから始まりへ〜

断ち切れない記憶。

燃えるように熱いからだ、誰かの悲鳴、雁の群れのように空を飛ぶ矢の嵐、血と炎と黄昏の境界が消えて、たぶん、そこは、地獄だつた。

動かない体をどうにかひきずって、手をのばす。

手をのばす。

届かない。

もう一度、渾身の力で前へ進み、手をのばす。

つかまえた。

抱きしめた体、その温もりは消えつつあった。

涙が流れる。

あふれる涙で視界がぼやけ、あたりの地獄絵図はただただ真っ赤な塊にかわる。

「君は、君は……誰なんだ？」

手にした剣で、体を貫く。

そこで記憶は途切れる。

これは夢だ。

でなければ、俺は……

「なんなんだよ、毎日毎日っ！」

ため息をついて、俺は布団をはね除けた。

傍らの時計を見ると、まだ午前二時で、眠りについてから三時間

も経っていなかった。

「はあ……」

「ここ最近、同じ夢ばかり見る。」

「やれやれ……この部屋の下に昔墓場があったとかじゃないよな？」

「冷たい汗を拭うためにシャツを脱いで放る。」

タオルで汗を拭い、失った水分を補給するために冷蔵庫を開けてミネラルウォーターをがぶ飲みする。

「ぶはーっ……あああ」

一息ついたところで、改めて夢の内容について考える。

いままで見てきた夢の中でも、リアルで、ひどい夢だった。フランチエスカに入学してすぐ、ちよっと自信のあった剣道で不動先輩にボコボコにされた後の夜でも、これよりマシな夢が見られた。

「しかも連続だもんな、まったく、呪われてるとしか思えないな」

汗を拭き終えたタオルと、シャツをまとめて洗濯カゴに入れ、少し考えて、運動着に着替えることにした。

「どうせしばらく寝られないだろうし、体動かすかあ……」

木刀を取り上げ、外に出る。

寝苦しいほど暑い夜だけど、部屋を出れば風があり、なにより今日は星月夜、もやもやしていた頭の中が晴れていくようだ。

「よっし！」

あの夢を思い出すといつも心が痛み、焦燥感でじっとしていられなかった。だからここ最近、体育の時間や部活の練習の時間が一番心が落ち着いた。

「頑張つて不動先輩に勝つぞーっ！」

数日後、聖フランチエスカ学園の教室で、及川が話しかけてきた。

「かずピー、不動先輩に勝つたんやって？」

「藪から棒なんだよ……、別に勝つてねえよ」

「えー？ でも剣道部の子に聞いたで？」

「三本中一本取ったところで、先輩が先生に呼ばれて中断したんだ」

よ……勝ったわけじゃない」

「はーん、なるほどなあ。しかし、えらい進歩やん！」

前は一本とることもできなかった。

「まあな。不動先輩も強くなったって言うてくれたし、嬉しいのは確かだよ」

試合ではなく部活の練習中の事だから、手放して喜べるわけじゃない。けれど不動先輩に認めてもらえた事、中断してしまつてちよつと悔しそうに、しかし、俺をほめるように微笑んだ彼女の顔を思い浮かべると……

「鼻の下伸びてるで、自分」

及川のからかう声に、俺は自分の顔を軽く撫でた。

不動先輩から一本とつて以降、気分の良い日が続いた。

体は健康、頭も冴え冴え、得意な歴史どころか苦手教科さえ、すつと頭に入ってくるほど上り調子だった。近年まれに見る絶好調と云つていいだろう。

夜に見る、あの夢を除いては。

「なんなんだろうなあ……」

フロイト先生に聞いてみたいもんだ。いや、現代なら夢判断できる人はたくさんいるか。

夢は毎日、薄れることなく、それどころかより濃くなって俺に迫ってくる。何かを俺に求めるように。

「なんであんな地獄みたいなの所にいたのか……何より、俺が……、……したあれは誰なのか」

顔は見えなかった。体はずっしりとした手応えがあつて、確かにそれは人間だった。しかし、それ以外男かも女かも分からなかった。「顔、どうにかわかればいいんだけど……いや、わかつたからつてどうなる」

たとえば、その人の妄念が俺に取り憑き悪夢を見せている……なんて。んなバカな。

「服の感じからして女のようにも見えたけど、確定できるほどじゃないし。あー」

頭を掻いた。どうにもならない数学の問題を解いている気分だ。

「気分転換に何か本でも読むか。歴史関係……っ」と

俺は今、学校の図書室にいた。テスト前と言っことで一応自習していたのだが、勉強が煮詰まった辺りで息抜きがてらつらつらと夢の内容を思い返していたのだ。幸いうちの図書室は広いため、少々の独り言は誰の気にもとまらない。

「えーっと、これは三国志関係の書棚か」

歴史好きの男の御多分に洩れず、俺も三国志は嫌いじゃない。といても昔マンガを読んだことがあるぐらいでそんなに詳しくはないが。

「ちょっと読んでみるかな」

二、三冊抜き出し、イスに座り、本を開いてパラパラめくる。

「……ふうん、曹操って詩とか残してたのか。なんか冷徹な悪役のイメージがあるから、意外だな」

三国志演義における主人公劉備、あるいは孔明のライバル、曹操。三国の中でも最大の国力を誇る魏の王。その影響は軍略のみならず文芸にまで及ぶ。自身もいくつかの詩を残し、代表的な詩に

「ええっと、なになに、『歩出夏門行』」

『歩出夏門行』

東臨碣石 登れやこの山

以觀滄海 見ようぜ海を

水何澹澹 水面ひろびろ

山島竦峙 によつきり島だ

樹木叢生 木々はびっしり

百草豊茂 草々繁る

秋風蕭瑟 秋風つめたく

洪波湧起 大波おこる

日月之行 月も太陽も
若出其中 ここから昇る
星漢粲爛 きらきら銀河も
若出其裏 ここから出るぞ
辛甚至哉 素敵じゃないかよ
歌以詠志 歌おうぜ、さあ

(高島俊男訳)

「……ぷ、ぷははははっ!!」
思わず吹き出した。

さすがに周囲に奇異な目で見られたので、なんとか抑える。

「くっく、華琳のやつ、まじめな顔してこんな詩書いてたんだな、
くっ、くっく……っ」

笑いの発作が治まって、一呼吸おいたところで

「華琳って誰だよっ!?!」

自分自身にツッコミをいれた。

「流れからして曹操の事だけど……曹操の字は孟徳だし、華琳？
まるで女の名前じゃないか……」

自分が言ったことなのに、わけがわからない。
でも。

しっくりくる。

曹操、いや、華琳という名前が、どこか心に残っている。

そして同時に、一つの面影が脳裏をよぎる。

小さな、しかし偉大なる英雄としての彼女。
偉大な、しかし可愛らしい一面もある彼女。

そっだ。曹操は華琳で、小さな女の子だった。

「気でも狂ったのか俺は……」

心臓の鼓動が速くなったことを感じながら、何かの答えを探して
本にもう一度視線を落とした。

「志在千里……志は千里にあり、か……」

中国まで千里もあるだろうか。いや、中国と日本で距離の単位は違うかも知れない。

けれど、千里、遙か遠く、俺は日本にあつて、この地上のどこにもないどこかの、誰かの事を思っていた。

それから十数日、俺は、例の夢のこと、そして三国志の本についてのことを、極力考えないようにした。

考えても仕方がないということもあるし、なにより、テスト期間だったからだ。

「ふう……はあ！」

俺は大きく呼吸しながら両手を伸ばし、数日分の凝りをほぐした。

「よっ！ お疲れ、かずピー」

「おう、お疲れ」

及川と挨拶をかわし、並んで歩く。

「しかし、テスト、めちゃくちゃ良い点数やったな自分」

「ああ、俺も驚いたよ」

返ってきたテストの点数は、全て自己ベスト更新だった。

「勉強も部活も絶好調！……で、この休みに彼女とまでいかなく

ても、女友達と一緒に遊びに行ければ最高だったんだけどなあ」

「そうそう。同じクラスの女子連中の誘い、断ったんやって？」

「ああ。ちよつと爺ちゃんから呼ばれてな。鹿児島までいかないと」

「えー？ そんなん自分、なんとか断れんかったんかい？ なんか、

女子連中の中で、自分のこと気になつてるのがいるらしいで？」

「え、マジか！？」

「お前が誘いを断つた後、俺の所に、北郷君つてもしかして彼女いるの？ とか聞いてきてな。そこで俺があれこれ探つて、誰かは分からんけど、そういうやつがいるらしいってことはわかつたんや」

「うわあああ、ちよ、どうしよう」

頭がフットーしそつだよおっつ！

「あれかな、不動先輩から一本とつたからかな？」

「んー、なんかそれよりも前かららしいで。密かにあこがれてたとかんとか」

「くう……！ 何でこのタイミングでっ……！」

「キャンセル無理なんか？」

「爺ちゃんがどうしても話したいことがあるとか…… 距離離れてて頻繁に会えないから、こういう休みじゃないとなあ……」

「そうかあ……ま、残念やったな、かずピー！ 青春は落第点で！」
「くっそー！」

その夜、俺はいつもどおり悪夢を見た。

そして……目をさましてからしばらくして、重大なチャンスをした事を思い出し……泣いた。

「こんにちはー！」

長い休みに入って俺は、九州は鹿児島、北郷の祖父の家を訪ねていた。

「おう、一刀か！ よう来た。まあ、あがれ」

爺ちゃんは相変わらず壮健で、歳を感じさせない拳措で俺を招き入れた。

通された和室で俺は正座し、子供の頃から変わっていない、懐かしい風景を眺めた。開け放たれた襖、その向こうは客間や居間があり、縁側を隔てて外につながっている。縁側の窓も開けてあり、風が通って、夏の匂いや畳の匂いを届けてくる。

中の光景に視線を移せば、一番に目につくのは、大きな十文字の旗。北郷の家紋だ。

この旗印の下、仲間達は……

「ん……」

またデジャヴユか。今変なことを口走ったら爺ちゃんにどう思われるかわからん。自重だ自重。

「一刀、お前の父さんから連絡があつてな。部活の先輩から一本とつたそうだな？」

「ああ。一年と半年でようやく感じてくれたけど」

「ははっ、女とはいえ、不動の名はよう聞いとる。ようやった」と、爺ちゃんは呵々と笑い膝を叩いた。

「後で久々にわしが稽古をつけよう。なあに、軽くだ。どれだけお前の腕があがったか見てみたいからな」

腕を組み、俺をじつと見る。

「まあ、目を見ただけでも成長の具合は見て取れる。励んでおるよ
うじゃの」

「うん……自分じゃよく分からないけど」

実際、なぜここまでではつきりと成長したのは自分でもよくわからない。素振りや基礎トレーニングの時間は増えたが、一朝一夕の修練で強くなれるほど甘いものではないし……。

強くなったのも、勉強の調子がよくなったのも、あの夢を見始めてからだけど……

と、俺は自問する。

さすがに関係ないよな。あの夢自体は。ただ、夢を見始めて以来、剣道の時はどう動くべきか、相手が何を考えてどう動くかがより深くわかるようになったし、勉強の時は、色々な問題のつながりとか解き方の足がかりがすぐつかめるようになったし……。

首をひねり、自答する。

あの悪夢を思い起こすたびに、なにか焦りみたいなものを感じて、じつとしていられなかった。

前へ進みたくて。誰かの手を、掴みたくて。

そうだ。俺は、あの悪夢を打ち消したかったんだ。自分自身の力で救いたかったんだ。

あの、自分の手で、殺めた、あの娘を。不意に、目の前の霧が晴れた気がした。

「で、だ。お前を呼んだのは、ちよつと確認したいことがあってだな。蔵の方に来てくれるか……一刀？」

「ん？ ああ。わかった」

自問自答の檻から抜け出て、俺は爺ちゃんの背中についていった。蔵は家のすぐ隣にある古いものだった。子供の頃、悪いことをするとここに閉じ込められ、一夜恐ろしい思いをしてすごした記憶がある。

「足下、気をつけるよ」

明かりがついているとはいえ、床に沢山の物品が置いてある。価値の高い物は厳重に保管してあるだろうが、安いものでも蹴飛ばすわけにはいかない。

「そろそろここも一回掃除しなきゃあなあ」と爺ちゃんは笑う。

掃除、というのは埃を払ったりすることじゃなく、捨てるべきものを捨て売るべきものを売り残すべきものを残す、その選択のことを言っているのだろう。

「と、ここだ。ほれ、隣に並べ」

「うん」

貨物を脇にどかしてスペースを作り、体を滑り込ませる。

爺ちゃんの目線の先を追うと、そこには日本刀が一振り、掛台に載って鎮座していた。

「これ、本物の刀？」

何度か蔵に入ったことがあるが見覚えのないものだった。

「……お前は、見えるのか」

「へ？」

「この日本刀、わし以外には見えんらしい。弟子に見せようとしたら、掛台しか無いとぬかしおる」

「え、えええ！？ そんなバカな」

「うむ。てつきりわしがボケたのかと思ったんじゃが」

「縁起でもないこと言わないでくれよっ」

と、爺ちゃんはおもむろに刀を取り、

「家に戻るか。ここで抜いては色々傷つけそうだ」

先ほどいた和室に戻り、テーブルを寄せて、正座する。

「よつと」

爺ちゃんは事も無げに刀を鞘から抜き、外気にさらす。

「おおーっ」

俺はお目見えした刀身の姿に、思わず声を上げた。軽く反った刀身は細くありながらも力強く伸び、鋭い切っ先は室内灯を受けて輝きながらも、ともすればその光さえ切断してしまいそうな気を発していた。

唾を飲み込み、爺ちゃんが手首を返して刃先がこちらを向くたび身じろぎする。

「別に斬りやせんよ」

「そりゃそうだけどさ」

銃口を向けられているようなものだ。銃と違い、例え殺意が無くても、重力に従って下ろすだけでその範囲にいる人間をざっくり……想像するだけで背筋が寒くなる。

「でも、爺ちゃんしか見えないって、じゃあ、どこから持ってきたんだ、それ。昔はなかったよな」

「ああ。実はわしもよくわからん。最近の事じゃ。雷が蔵に落ちての。様子を見に行ったら、これが増えとった」

「……ええ？」

なんだその不思議話。

「わしだつてわけがわからん。刀はわしとお前にしか見えんから、これがいつの物かもわからんしな」

「銘も無いのか？」

「無いな。不気味だから、お前にも見えんかったら処分するつもりだったんだが……うん、これはお前にやろっ」

「へー！？」

「手入れの仕方を教えてやる」

と、爺ちゃんは紙やら油やらなんか見たことある刀をポンポンたたくやつとかを持ち出して、俺に一通りの事を学ばせた。

「うーん」

手入れを終えて改めて刀を眺める。

「由来はともかくつくりはいい。財産にならなくても、持っているだけで十分だろう」

確かに売り払ったり見せたりできないから金にも箔にもならないが、手にしているだけで、こう、なんというか、背筋が伸びる気がした。

「ありがとう、爺ちゃん」

俺が頭を下げると、爺ちゃんは頷いて満足げに笑った。

「あいててて、やっぱ、爺ちゃんつえええつ、いてて」

容赦なく打ち据えられた体をさすり、ほぐし、俺は寝間着に着替えた。

あのあと、食事をし、墓参りをし、道場に移って稽古、家に戻って食事の後風呂に入って、客間に案内された。学校の宿題もあるのだが、今日は早めに寝ることにした。

「はーあつ、と」

ごろんと布団に寝そべり、大の字になる。

「久しぶりに、ボロボロにやられた気がするな。不動先輩とは何度も戦えないし……あー、そうだ、愛紗に剣の稽古をつけてもらった時以来か……愛紗？」

愛紗。

脳裏に浮かぶのは凛々しい女の子の姿。青龍偃月刀を手に、戦場を疾駆する黒髪の少女の姿。

その美しさと、2人きりの時に見せる、あどけない微笑み。

それを思い出すと、心臓が跳ねる。

「うん、だから、誰だよ!？」

じたばた身悶えする。

「彼女欲しすぎて、脳内彼女ができちゃった、とかじゃねえよなあ……」

だとしたら恥ずかしすぎる。

「華琳は曹操だろう？　じゃあ、愛紗は……青龍偃月刀を持つてたつて事は、多分、関羽か？」

張遼という可能性もあるが、しっくりくるのは関羽だった。

「でも、関羽っていったら、ヒゲだよな。なのに」

普通はそういうイメージだ。

「何で俺は関羽に萌えてんだ……」

そのケはないぞ。本気で。

「あの夢と、三国志、何か関係があるのか？」

試しに、三国志の内容を少し思い返してみる。

「えっと、後漢末期の話で、乱世っていわれるほど滅茶苦茶な時代だったんだよな。黄巾党の乱とか董卓包圍網を経て、諸勢力が争い、結局三国にまとまって……うーん、最終的には魏を滅ぼして打ち立てられた晋が三国を統一するんだったかな」

大筋としてはそんな感じだ。

「有名な英雄としては、やっぱり曹操、劉備、孫権、ん」

やはり頭に違う名前、そして顔が浮かぶ。

「華琳、桃香、蓮華……おいおい」

まさか三国志の英雄全部、女つてわけじゃないだろうな？

「関羽は愛紗、張飛は鈴々、夏侯惇は春蘭、夏侯淵は秋蘭、周瑜は

冥琳、甘寧は思春……」

顔も名前もすらすらでてる。

しかし、出てこないのもあった。

「んー、劉禅とか曹仁とか孫堅とかは出てこないな」

わりと有名どころだが。

「なんか規則性でもあるのか……」

俺は目を閉じて、羅列した名前をもう一度思い浮かべる。そして、現実にはいない、少女達の姿を。

「君たちは、誰なんだ……？」

少女達の笑顔を想いながら、そのまま俺は眠りについた。

断ち切れない記憶。

地獄のような光景。

手に持った剣で肉を貫く感触。
感触。

俺が人を斬ったなんて信じられないまま、引き抜く。

呆然として、それを天に翳す。

黄昏の朱よりなお赤い紅のそれは、血をまとった日本刀だ。

「あ、ああ」

喉から声が漏れる。

「あああああああつ！！！！」

叫びが天を裂く。

俺は、俺は　！

「あああああああつ！！！！」

夢から覚めて俺は跳ね起きた。

「はーっ、はーっ！？」

肩で息をして、自分で自分を抱きしめる。

覚醒した今でも信じられない。

震える体をどうにか動かし、掛台に載ったそれを取る。

鞘を一気に払おうとして、躊躇する。

もし、もしそれが血にまみれていたら

「そんなわけ無いっ……そうだ。ただの、夢なんだから」

でも、それならなんでもの夢に出てきた日本刀が、今手にしている、これとそっくりそのままなのか。

「ただの、思い違いだっ！　そうだ、デジャヴュだよ……ただの
覚悟を決めて、鞘から刀を引き抜く。

あらわになつた刀身は、まっさらで、白く輝いていた。

「ほら、血なんかついてないじゃないか」

ほっと息を吐く。

「こんな、白く、輝いて　輝いて？」
ちよつと待て。

今、真夜中だぞ？

月明かりがあるとはいえ障子を隔てていて、そんなに光があるわけじゃない。

「刀が、光ってる？」

鏡のように磨かれた刀身が、自ら光り輝き、辺りを照らしていた。
「そんな、バカな事って　うおっ、まぶしっ!？」

光が目を直撃する。

目の前が真っ白になり、思わず目を閉じる。それでも強い光を感じる。

俺は、白い光の先に、血のような赤い染みを見た気がした。

けれど、それがなんなのかを考える暇もなく、強い衝撃が頭を揺らし、俺はあっさりと気絶した。

「……ん、んん、痛っ」

背中に痛みが走って、むっくりと俺は起き上がった。

変な体勢で寝ていたせいだろうか、体全体が軋む。

「ああ、そうか、昨日爺ちゃんに稽古つけて貰ったんだっけ。それじゃあ、仕方な……へ？」

寝惚け眼を擦って辺りを見渡すと、そこは、

「どこだ？　ここ」

少なくとも田舎の家ではない。

てか。

「日本じゃない可能性すらあるぞおい！」

俺は広大な大平原のど真ん中に寝転んでいたらしい。前後左右四

方八方なにもない大平原だ。平原の先には、中国の水墨画でみたような山が連なっている。

こんな光景をどうやって日本で再現する？

少なくとも、現代日本では不可能ではないか。

「……中国」

そうだ。ここは、中国だ。しかも。

「そうか、はは、ようやく思い出した。俺は、ここにいたんだ」

そう考えれば得心できる。

「愛紗、そうだ、愛紗にここで助けてもらって、沢山の人と知り合
ってそして……」

そして、なんだ？

もしも夢の通りなら、俺は、最後の最後で人を殺めている。しかも、大事な人を。

でも、あの夢の最後に続く過程はまったく覚えていない。

夢の最後から、どうなったかも。

「ともかく、みんなを探しに行こう。まずは、そこからだ」

服についた砂を払い、もう一度周囲を見渡す。

「ん？」

誰かが近づいてくる。

まだ大分遠くだが、5分もあれば顔のよく見える距離になるだろう。

「……………なーんか、見覚えがある気がするな」

愛紗たちほど頻繁ではないが、どこかで会ったような。そう、場所もまさにここで。

「……………賊か？」

確か、三人組の盗賊に襲われたところを愛紗に助けられたのだった。その例に寄れば、今回もまたそうだろう。

「何か、武器は あ」

あたりの風景の衝撃で気づかなかったが、すぐ近くに刀が突き刺さっていた。

「……やっぱり、あの刀だな」
手にもつとはつきりわかる。

鞘もそのすぐ近くに転がっていたので、拾い上げて、刀を鞘に収める。

「さて」

振り返ると、賊はすぐ近くまで来ていた。

「久しぶりだな、兄ちゃん」

「あのときはよくもやってくれたな！　だが、今回はあの怪力女はいないぜ！」

デブとノツポとチビの三人組。

リーダーらしいノツポの男と、威勢だけは良いチビがかなり立てる。「へ、この前着ていた服とは違うようだが、それも珍しいな。それにその持つてる武器も」

言われて気づいたが、今回は寝間着代わりに着ていたジャージだった。前回着ていたのはフランチェスカの制服で、それが天の御使いの象徴みたいに見られてたっけ。

「悪いことはいわねえ、その武器と服、全部おいてきな」

「おらあ！　とつととその武器捨てんかい！」

俺は無言で刀を抜き、青眼に構えた。

「へ、そんな細っこい刃物で勝てると思ってんのか？　おい、デブ、捕まえな」

「あ、ああ」

巨漢が身じろぎしてこちらに向かってくる。
遅い。

刀を振り下ろして相手の剣を弾き、手首を返して相手の喉元に切っ先を突きつける。

「あ、うあああ！」

デブはいきなり自分の首元に飛んできた刃先になんの反応もできず、尻餅をついた。

「死にたくなかったら、動くな」

デブに言い捨てて、残りの2人の内、与し易いチビの方へ向かう。
「お、おい！ デブ！ なにやってんだ……っつわ！」

尻餅をついたデブに怒鳴り声をあげている隙に、俺は一足一刀の距離にまで踏み込み、刀の峰で手首を打つ。

「ぐわっ！」

手に持った剣を落とし、やられた腕を押さえようと軽く前屈みになったところを、思いつき蹴り飛ばした。

「残りはあんただけだけど」

刀を構え直し、リーダー格のノツポと正対する。

「ちっ……！」

ノツポは悔しそうに歯がみし、

「今回は、勘弁してやるっ！ おい、お前ら、さっさと起きやがれ！」

リーダーは2人が起きたのを確認すると、一目散に逃げ始めた。

「ま、待ってくれよー！」

慌てて2人がそれを追いかける。

その背中を見送って、納刀し、ため息をつく。

「はは、ちよっと、危なかったかな」

もし、ノツポが斬りかかってきたら、そして俺が上手く仕留められずに、仲間の2人が起き上がってきたら……

「でも、まだ、斬ることはできそうにないな……」

刀を抜いたにもかかわらず、やったことは竹刀や木剣と同じだ。闘ってはいても、斬ってはいない。

「できるのか？ 俺に」

あの夢のように。

「……いま考える事じゃないか」

気を取り直して、俺は足を踏み出す。

「ともかく、どこかの村までいかなくちや。腹も減ったしな！」
みんなの待つ場所へ、歩を進める。

三国志の世界へ。

彼女たちの住む世界へ。

第1話 無銘伝々終わりから始まりへへ（後書き）

この外史は、ち こ太守、歩くち こ、全身 液男、エロエロ魔神
こと北郷一刀が全力だとある少女を救う物語。

萌える話を挟みつつ、シリアスに展開していければいいなーと思っ
ています。

*追記

『歩出夏門行』の訳詞部分を間違えていたようです。
おわびして訂正いたします。

と、書いた数日後また間違っていることに気付き訂正。
ちゃんと原典確認するんだった……。。

第2話 公孫贇伝々たったひとりの少女?? (前書き)

第2話です。

お待たせしました。

恋姫無双のヒロインの一人が登場します。

桃香? 華琳? 蓮華?

いいえ、白蓮です。

作者が白蓮好きなのです。

本来Hシーンがおまけとして最後に付くはずだったのですが、掲載
していいのかどうかよく分からないためカット。

第2話 公孫贛伝ったひとり少女？

「しっかし、広いなー」

陽光を浴びつつ、広大な大地を歩き、俺は感嘆の声を上げる。

歩いてみて分かるが、風景が全然変わらず、ただひたすら土と草と空気と、遙か向こうに山があるだけだ。

「馬がないと厳しいな……ともかく、人家を探さないと」

とりあえず人跡のある道を通っているから、人のいる土地へはいけそうだった。

「んー……おおっ!？」

空きつ腹を抱えながら足を進めていると、細くたなびく煙が見えた。

「もしかして、炊事の煙かな？ ちよつと食料分けてもらえるかも……ま、それが無理でも、ここがどこか教えてもらえれば、誰か知り合いのいる場所へいけるだろうし」

駆けだして、煙のあがつている方へ向かう。腰に結んだ刀は重いが、足取りは軽い。ちなみにジャージなのでちよつと刀を支えづらく、片手で押さえながら走っている。端から見ると、間抜けな感じだろう。

「そこらへんも、考えておかなきゃな」

一歩ごとに感じる、日本刀の圧倒的な存在感に、俺は頼もしさと、重さをおぼえるのだった。

煙のたもとまで来て、出所は、一軒の民家だとわかった。

周りを見渡してみても他に家はなく、この民家が管理しているのであるう、田畑が広がっているだけだった。

「すいませーん、誰かいますかー」

玄關の扉を叩き、家人に呼び掛ける。

「はいはい」

応答は早かった。

俺は事情 異世界から来たのではなく、道に迷って来たという仮初の事情を話して、助けを求めた。

幸い、その家の主人が話を聞き、応諾してくれた。もちろん条件はあるが。

「ここは公孫贄殿の領地でな……、そろそろ税を納めにいかにならん。ついでに、余りの作物もいくらか売って、あれやこれやの品を買いに行くんじゃ」

人の良さそうな、家の主人である老人は、自分で言うのも何だが風体の怪しい俺に、食事を饗しながら説明した。

「荷を運ぶには馬や牛を使うんじゃが、荷が崩れ落ちんように見張りながら道を進むのに、いくらか人が必要になる。今年は豊作でな量も多いし、ほら、例の黄巾のあれで人手不足じゃ。お前さんがやってくれるっちゅうなら、助かるわい」

「そういう事情なら喜んでやるよ。すぐに行くの？」

「おお。飯が終わったら出発する予定じゃった。少ししたら、出ろぞ」

豪勢とはいえないが力のでる食事を済ませ、俺と老人は出発した。

「公孫贄……白蓮の領地かあ」

のどかな旅路をいきながら、ひとりの少女を思い浮かべる。

赤い髪を後ろで括ったポニーテールの少女。群雄の一人で、袁紹に敗れた

「……つてことは、まだ、袁紹と決戦する前なのか」

まだ、いわゆる三国志の前半のようだ。

「公孫贄殿は、黄巾の連中や北の異民族をよく抑えてこの地を治めていてのう、よその土地と比べれば、平和なもんじゃよ。南の袁紹殿と比べても、ようやっておるんじゃないかの」

道々、俺を相手に老人はこの土地について語ってくれた。

「名家のものでなくてもとりあげてくれるし、袁紹殿のところからこっちに来るものも多いんじゃよ……まあ、それが不満なのか、名

のあるお方はなかなか助力してくれないようじゃが」

「ふーん、難しいもんだなあ」

身分の差を問わないということは良いような気もするが。

「あ、そうだ。劉備とかは公孫贇のところにいるのか？」

「劉備殿か？ ああ、たしか黄巾との戦いで公孫贇と……今は、

また別の土地にいるんじゃないかのう、とんと名前を聞かんし」

「そっか……」

これ以上は白蓮に直接尋ねた方がいいようだ。

「ほれ、見えてきたぞ」

と、老翁が杖で地平線の向こうを指し示す。

「あれが公孫贇の城？」

「そうじゃ、易京城。まだ完成しとらんが、雄大な城であろう？」

「うーん」

まだかなり遠くだからよく分からない。

だが、近づけば近づくほど、城が姿を現し、視界の大半を埋めるくらいになった。何層にも張り巡らされた城壁と、数え切れないほどの望楼。もちろんその中には都市が整備されていて、どれぐらいの兵力・兵糧が蓄えられているか、見当もつかない。

「まだまだ黄巾の残りど、異民族とで物騒じゃからの、頼りになる城が必要だつてことだな、急いで作ったんじゃ。わしの息子や、孫も人夫としてとられたわい」

「へえ……確かに、すごい……」

大きいです。

たしか易京城とは、公孫贇が袁紹と戦い、戦死した城だ。これを築城した白蓮もすごいが、陥落させた袁紹もすごい……というか、本当に袁紹、麗羽がやったのか？

俺は、金色くるくる髪の麗羽の姿を思い出して首をかしげた。

やがて、城の入り口近くまで来て、城壁の高さに驚き、そして入城の許可を得て門を越えると、城内の広さにも驚いた。そしてそこに息づく、街の姿にも。

「凄いな、人も多くて……」

「ここら一帯のほとんどの者がここに住んどるからな。中原と比べれば、華やかさには欠けるが」

確かに、活気はあるが、彩りは乏しかった。

「さて、わしはまず税を納めに行くが、お前さんはどうする？」

「ああ、俺はちよつと、公孫贄に会いに行かなきゃいけないから」

「んん？ なんじゃ、お前さん、奇妙な格好しと思うたら、偉いさんかい？」

「いやいや、ちよつと知り合いなだけだよ」

俺はお爺さんに礼を言つて別れ、城の中心部へ向かった。中心部がどつちかは、警備が厳重になる方向がそうだろう、と睨んだ。

「おつと、待て待て、こつからは政庁だ、許可は得ているか？」
不意に門番に止められた。

「いや、えーつと、劉備の知り合いで北郷一刀つていうんだけど、公孫贄に用事で……」

「んー？ 劉備殿の知り合い？」

じろじろと、俺の格好を眺め、門番は胡散臭げな顔をした。

「殿は忙しいのだ、重要な用件でない限り、取り次げぬ！」
と、手を横に振つて拒否された。

「えー、頼むよ、そこをなんとか！」

俺は困つて、拜んで頼みこむ。

「ならんならん！ おまえのような怪しい格好をしたやつを簡単に通したら、私たちが怒られるわ」

まあ、たしかにこの格好は、門番には危険人物の証にしかならないだろう。かつては天の御遣いの象徴だった制服もないし。

余は天の御遣いであるぞ、と名のつてみるか？

ここからどころか、城から追い出されそつだ。

……どうしたものか。

「どうかしたのか？」

困り入ったところに、救いの声、救いの手がさしのべられた。

「白蓮！」

「え？」

門の向こうから、馬に乗って姿を表したのは、城の主、公孫贄だった。ポニーテールを揺らしながら、こちらを見て、目を見開く。

「おまえ……北？か？　なんでこんなところに？　桃香と一緒にじゃなかったのか？」

「いや、ちよつと事情があつて。白蓮に会いに来たんだよ」

「私に？」

白蓮は自分を指さし、きよとんとした顔で、俺を見つめた。そしてすぐに相好を崩し、なんだか嬉しそうな顔をして、馬を下りた。

「そ、そうか、よく分からないが、それじゃあ、入ってくれ。こつちだ」

俺はそれに従い、政庁の中に入った。門番は微妙な顔をしていた。

「黄巾党との戦い以来だな。元気そうで安心したよ」

白蓮は俺と肩を並べて、馬をひいて歩いた。白馬に白蓮の綺麗な赤い髪と甲冑が映えて美しい。

「俺もほつとしたよ。ようやく知った顔にあえてさ」

「桃香たちになにかあつたのか？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど……あのさ、俺が天の御遣いって呼ばれていたの、知ってるよな」

「ん？　ああ、なんかそんな噂があつたな。でも、自分で否定していなかったか？」

「そうなんだけどね……ある意味間違いじゃないって言うか」

俺は、かつて愛紗たちに説明したことを、白蓮にも説明した。自分が遙か未来の世界から来たこと、そしてこの世界が、俺たちの世界の三国志とはちよつと違っていることを。

「……………ん、んんん」

白蓮は複雑な表情をして、頬を掻いた。

「冗談、じゃ、なさそうだよな……その、なんだか天の御遣いっていうより信じがたいけど」

「うん、自分でもそう思う」

さらに、一度未来の世界に戻り、またこの世界に来たことを説明するあたりで、馬を厩につなぎ終えて、政庁の中心部、白蓮の執務室に入った。

「なんだか凄い事情があったんだな……のほほんとしてるのに」

白蓮は俺に椅子を勧めて、自分も座った。

「一度未来の世界に帰ったのに、何でこっちに戻ってきたんだ？」

「それが俺にもわからないんだよ。わけの分らないうちに行って帰って、って感じで」

「ふうん……ああ、だから、この前と格好が全然違うのか」

合点がいったように、白蓮は頷いた。

「だから、こっちが今どうなっているかわからなくてさ。どういう状況なんだ、今」

「んー、お前と最後にあつたときからそれほど情勢は変わっていないと思うぞ。黄巾党は首謀者が行方不明になって、勢いは衰えただと、まだ残党があちこちにいる。それを今、皆して討伐しているところさ……おっと、何か飲み物でもいれるか」

白蓮は立ち上がり、お茶を入れて戻ってきた。

互いに一口飲んで一息つく。

「中央は？ あのー、俺の知識だと、ここから董卓が政権を握るんだけど」

董卓。この世界では月。暴君の濡れ衣をきせられて、人目を避けるため、俺のメイドになった少女だ。今から考えるとすごい展開だが、実際そうだったんだから仕方ない。果たしてこの三国志世界でもそうなるのだろうか……。

「董卓が？ そ、そうなのか。いや、私は国境の抑えで、とても中央にまで兵をまわせなくて、よく知らないんだ……ただ、中央が混乱しているのは確かだから、董卓が兵を率いて洛陽に入れば……うーん」

白蓮はうつむいて何かを考えている様子で、やがて、お茶をこくり

と飲んで、顔を上げた。

「でも、そうなるに皆、黙ってはいないはずだ。袁紹とか、絶対。曹操や袁術、孫策、それに、それが本当なら、できれば私だって…」

白蓮の目は厳しく、瞳の奥で小さな火が燃えているようだった。

「うん……そのときは、俺も、微力ながらお手伝いするよ」

何かあれば、月たちを助け出さなければならぬ。そのためには、俺も参加しなければならぬだろう。月を助けるために、月の敵、董卓包囲網に。

「それで、と、あとは……桃香たちが今どうしているか知らないか？」

「あー、すまん、各地を放浪している事ぐらいしか知らないんだ」
白蓮は申し訳なさそうに言った。

俺は、そうかあ、と相槌をうち、気にしないでくれと、白蓮に感謝した。

お茶をすすり、少し、黙考する。

白蓮の話聞く限り、俺は、桃香たちと一緒に行動しているところから、元の世界へ戻されたのだろう。

ただそれは、あの夢と俺の記憶を考慮しない限りのことだ。

俺自身が、董卓包囲網以降の歴史の流れ……本来の三国志の流れではなく、この乙女だらけの三国志世界における歴史の流れや人の詳細を知っていることから考えて、何か異常事態がこの世界、そして俺自身に起きていると推測できる。

今の俺は、この世界に飛ばされて黄巾党の戦いを終えるまでの俺ではなく、その先の未来で、何か起きて、時間が巻き戻った世界にきてしまったのだ。その何かは、あの夢の、悲惨な事態ではなかったか……俺は、直感的に、そう思った。
整理してみよう。

「現実世界 三国志世界 黄巾党の乱 董卓包囲網…… あの夢の出来事 現実世界 三国志世界・黄巾党の乱以後…… 董卓包囲網」

こんな感じだ。

整理すると目的もはっきりする。

俺の目的。あの夢を繰り返さないこと。夢の中の少女を、救うこと。だから、俺は、あの少女が誰か、突き止めなきゃならない。

もしかしたら、あの少女は 目の前の、彼女かも知れない。

「な、なんだ？ 北??」

俺はつい、白蓮の顔を見つめていて、彼女は頬を赤く染めていた。戸惑ってぱちぱち瞬きした目とあいまって、なんだか可愛いな、と思う。

「突然黙り込んでじつと見られたら、びっくりするじゃないか」

「ご、ごめん、考えごととしてて」

「そ、そうか……」

なんだか気まずいというか、照れ臭いような空気が漂って、二人同時に、お茶をゴクリと飲み干した。

「北?……その、よかつたらだけど……」

まだ赤味のひかない顔で、遠慮がちに彼女は、一つの提案をした。

俺は、すぐにその提案をのんだ。

桃香たちの居場所がわかるまで、あるいは中央の動静が変化するまで、ここ、白蓮の城に居ること。それが、彼女の提案だった。

それから何日かたった、とある日。

状況はいっこうに変わらず、暇をもてあまして、白蓮にお願いして雑事をこなしている時のことだった。

白蓮に呼ばれて俺は執務室へ足を運んだ。

「さて……北郷を呼んだのは他でもない」

白蓮はそれだけで何かあったと分かるぐらいに厳しい顔つきで、こちらを見た。

ごくり、俺は唾を飲み込んだ。

「実は……城が黄巾党残党、数十万に半包围された」

「……………ええええええええええつ！！？」

俺は腰を抜かすほど驚いた。

「そ、それ、本当か？」

「ああ。隣の郡から移動しているって報告はあったが、ここにきて規模、速度が、大きく速くなっている。一気に、私の城を落とすつもりだろう……………」

「ど、どうする？ 今、城にいる兵は五万もないだろう？ 援軍の要請を……………」

「無理だ。北は異民族に相對してて動けない。西と南はもう黄巾に遮断されてる。東にはろくな勢力がない」

「じゃ、じゃあ……………籠城？」

「私は、それ以外無いと思う。ただ、今なら、北から大きく迂回して南へ抜けることもできるかも知れない」

「それって、えつと、逃げるって事か？ 城を捨てて？」

「違う。城を捨てて北に逃げてみる、これ幸いと異民族が襲いかかってくるぞ。私が言っているのは、お前のことだ。お前一人ならどうにでもなるからな」

「え……………」

白蓮の言っていることを反芻して、小さな怒りがわき上がるのを感じた。

「それじゃまるで、負けるみたいじゃないか！」

俺の激しい声に白蓮は驚いて、少し立ち上がった。

「ち、違う違う、負けるなんて思っていない！ ただ、お前は、この戦いに関係ないし、もしものことがあったら、桃香達に申し訳ないから……………」

「関係ないわけ無いだろうつ！！」

「え？」

ポカんと口を開けている白蓮に、俺は詰め寄った。

「そりゃ、まだ出会ってひと月もたつてない、でも、白蓮と俺は無関係じゃない！ 俺にも一緒に戦わせてくれ！」

「……………北？っ」

白蓮はなんだか泣きそうな、嬉しそうな顔をして、俺の手を取った。「ほ、本当は、部下はいるけど、仲間はいなくて、ちよっと心細かったんだ……………ありがとう、北？……………えと、そういえば、真名を教えなくてもらってなかったな、教えてくれるか？ よかったらだけど」

「ああ。真名ってやつはないんだ。北郷一刀が名前の全部だから、好きに呼んでくれていいよ」

「そうか……………うん、じゃ、じゃあ北郷のままでもいいかな……………」

白蓮は少し残念そうに視線を泳がせた。

真名には特別な意味があつて、よほど親密な人にしか教えないと聞いた。それを考えると、少し、真名がないのを残念に思った。

「……………」

手が熱い。

握った手に、白蓮の体温を感じた。

どちらからともなく手を離れたが、しばらく、その温かさは残っていた。

「……………黄巾党の残党は約三十万、将といえる将もいないし、兵も鍛えられものじゃない」

なんだか不思議な空気の中で、白蓮が詳細な状況を説明する。

「絶望的な差じゃないってことだ。だから、べ、別にお前抜きでもちゃんと勝つつもりだったんだからなっ！」

白蓮は顔を真っ赤にして俺を指さした。

「うん。ごめん、でも、もう決めたから」

「……………ん。じゃあ、頼む。うん」

こほん、と白蓮は咳払いして、城周辺の地図を机に広げた。

「敵は南側と西に展開している。籠城するにしても、城外に別働隊を組織するなら今の内だ」

「別働隊か……………敵にばれたら、各個撃破されるかもしれないな」

「……………うん。城内からの攻撃で敵軍を消耗させて、間隙を別働隊で

突くか、別働隊の奇襲で動揺させたあと城内から打って出るか……どっちにしても、気づかれないように、一撃を加えなきゃならない」「敵は三十万もいるんだろ、食糧とかもたなそうに思えるけど」「ああ、そうだな。普通、籠城側の方がその心配をしなけりゃならないんだろうけど、今回は逆だ。敵は、速攻で城を落とすことを狙ってる。だから、死にもぐるいだらう」「投降は促したのか？ できれば、戦わずに済ませたいし」「白蓮は、うーん、と唸った。」「どうだろ……聞き入れないと思うけど……まあ、一応軍使を派遣するか」

竹簡にささつと命令を記し、窓越しに部下に手渡した。

「こっちの不安は、食糧よりも武器かな」

と、白蓮は筆を手の上で遊び、首を捻った。

「武器が足りないのか？」

「ああ。剣とか槍はともかくとして、矢がな。いくらあっても足りない」「うーん……こついのはどうだ？ 藁人形を城壁の上に立てて、それに突き刺さった敵の矢を回収する」

漫画で知った戦法だ。

「ああ、なるほど、敵の武器を利用するのか」

白蓮は感心した表情で何度か頷いた。

なんだかそんな顔をされると、俺ももつと建策したくなる。

「あー、あと、石を使うといいかもな」

「石？」

「そんな大きな石じゃなくても、上から投げれば武器になるだろ？ 手に入りやすいし」

「ほー」

益々感心して、白蓮は俺を尊敬の目で見る。すまん、これも漫画知識だ。

「確かに、石なら矢を作るより手っ取り早いな。城内にも岩がある

し……うん、いけそうだ」

基本的な方針が決まり、軍議が開かれた。俺は公孫贄の傍で座っているだけだった。

会議は紛糾を見せながらも、すぐ近くに黄巾党が迫っているという一事で結束し、籠城して徹底抗戦する方針が固められた。そうなること、白蓮を中心に、誰が別働隊を指揮するか、城のどこを誰が守るかなど、次々と決定されていく。これは、公孫贄の軍が国境の守備で変事慣れているということが幸いしたのだろう。

やがて、部下の一人が、武器の不足について具申した。その場にした全員が頷いているところを見ると、共通した懸案事項だったのだろう。

白蓮は俺の策を皆に示すと同時に、副官として俺を取り立てることを発表した。突然のことなので一同はざわめいたが、俺が劉備の仲間であることを補足すると収まった。

「敵は数こそ多いが烏合の衆、北方の国境を守る我ら公孫贄軍の力を、存分に発揮しようじゃないか！」
白蓮が立ち上がり、鼓舞する。

それに連れて全員が、俺も含めて立ち上がり、鬨の声をあげる。
易京城防衛戦はこうしてはじまった。

「敵は全員が歩兵だ、騎兵の足には付いてこられない！ 敵の眼前を一撫でして、陥穽に誘導する！」

「壁にとりついた兵を分断するぞ、東壁の出城から兵を出せ！」

「西側の岩山からどんどん南へ石を運べ！」

矢継ぎ早に命令が飛び、その頭上を石と矢が飛び交う。

敵兵の勢いは最初こそ激しかったものの、それを何とか凌ぐと、公孫贄軍が逆襲し、優勢となった。

籠城といっても完全に籠もっているわけではなく、城門近辺の敵を打ち払ったあと、公孫贄自慢の騎馬隊が出撃し、何度も敵を蹂躪したりした。

とはいえ、数の上での優位は覆らず、自軍も疲弊してきている。

「そろそろ別働隊の出番かもな……」

戦場を見渡すための楼閣の上、白蓮がほつれた髪を結いなおしながらつぶやいた。喫緊の変化に対応するため、白蓮は八面六臂の活躍だった。地味ながらこれだけの城を築き上げて、防衛できているのは、このわりと万能な白蓮の素質によるものだろう。

しかし、いつまでもこの防衛戦を続けていけるというものではない。物はともかく人がもたないのだ。

「まだ敵の士気は高い、挟撃の機会はもう少し先じゃないか……」
俺は副官として雑事をこなしていた。各壁の状況を纏め、白蓮の意を伝え、白蓮の背中を支えた。とりあえず、剣にはなれなくても、杖ぐらいにはなれたみたいだ。

「決着までの道筋が見えないせいか、こっちの士気は厳しくなってるんだが……どうしたもんかな」

「白蓮が演説するとか」

「勘弁してくれえ……そういうのは桃香とかにやらせるべきだろ」

「そうか？ 桃香だと、みんな頑張ろう、とかで終わりそうじゃない？」

「あはは、そうかもな。でも、桃香はそれでいいんだよ。それでみんな力付けられるだからさ」

よつと、と白蓮は柱によりかかっていた体を起こし、腕をぐるりと回した。

「私は……そうだな、桃香よりちよつとは強い武を、示してこようかな」

と、剣をとり、腰に佩いた。

「ちよ、大将が前線に出るつもりか！？」

俺は慌てて立ち上がった。

白蓮は引き締まった顔で、装備をととのえた。

「うん。前で戦えば、兵達に少しでも勇気を与えられるかなって。それに私は強いんだぞ！ まあ、関羽とか張飛みたいにはいかない

けどなっ」

微笑する。

「北郷はここにいてくれ。異常があったら合図、無かったら今まで通りに動いてくればいい」

白蓮はそう言い残して出陣した。

精鋭の白馬部隊　白馬義従を率い、城外へ出て行く。

俺は止める言葉を持たなかった。危険だとか、そんなことはわかりきったことだ。

公孫贇は袁紹に敗れて死ぬ。だから今は大丈夫……なんて乾いた歴史の事実はどうでもいい。今、白蓮は生きていて、戦いに赴こうとしている。その白蓮になにも言えなかった。

手が震えていた。

ちよつと戦場を想像するだけで、あの光景が浮かぶのだ。あの夢の、地獄のような光景が。

恐怖が、俺の手を震わせていた。

情けないっ、と俺は自分で自分の手をおさえる。

俺は、あの悪夢を克服して、繰り返さないんじゃないのか。

彼女を殺さないために。

「っ！」

俺は楼閣の物見台に登り、城壁の向こうを睨んだ。

まだ白蓮は出てきていない。

黄巾党軍は城からの反撃をくらい、城壁から少し離れて、公孫贇軍の騎兵と相對している。

やがて、白蓮とそれに従う騎兵隊が姿を現した。

敵味方共に驚くなか、白馬義従が黄色の軍団につっこんでいく。白蓮は先頭で、剣を振り、白馬を血の赤で染めていた。

敵兵は混乱に陥り、味方は奮い立った。

白蓮がポニーテールを振り乱し、切り開いていく道を、味方の軍がなぞり、広げていく。 magari なりにも前を向いて矛を構えていた黄巾党軍が、後ろを向き、そこをさらに白蓮の軍が突き崩していく。

白蓮の怒号、敵兵の悲鳴がきこえるような戦いぶりだった。

黄巾党軍は押されているが、おされている陣の向こうで、隊列を整え、反撃のチャンスを探っている。

白蓮は、その反撃が始まる前に、攻め気に溢れている自軍をまとめ後退するか、迎撃の準備をしなければならぬ。

慎重な彼女ならその点を見誤る可能性は低い。

瞬きも出来ない視界の隅で、なにかがちらついた。

「あれは　！？」

遠くの山向こうから、何本かの煙がたなびいていた。山火事かと一瞬思ったが、かなり規則正しく、間隔を空けて煙が上がっている。

「狼煙……別働隊か？」

別働隊を動かす合図は決まっっていて、すべて、こちらから合図をだすことになっていた。あちらからの合図の決まりなんて

いや。

たしか、あつたはずだ。

この戦いが始まる前、いや、黄巾党残党が易京城を包囲するよりも前……白蓮が何かの拍子にそれを教えてくれて

「っ！？　まさか、北方異民族っ！」

匈奴や烏丸などの異民族は、たびたび中原に進入し、国を悩ませたという。公孫贄はその最前線の防衛を任せられ、戦ってきた。宿敵ともいえるだろう。

「こんな時にっ」

この易京は国境……万里の長城から距離があるため、すぐに異民族と接触するわけではない、とはいえ、この籠城戦の生命線といえる「時間」が、これで奪われた。

このまま黄巾残党との戦いに手間取っていると、異民族に北方をおさえられ、易京城は陸の孤島と化す。黄巾残党が撤退したとしても、もう、易京城からの逃げ道は南のみ。戦うにしても川　易水を背にした、背水の陣を敷かなければならない。

「白蓮っ！」

城外で戦う彼女の隊列が乱れた。

わずかではあるが敵陣に踏み込みすぎて、敵に付け入る隙を与えてしまったのだ。

おそらく、白蓮もあの狼煙を見て、事態を察知したのだ。

白蓮は二重の動揺にさらされていることだろう。

「このままじゃ白蓮が危ないっ！ 副官さん、ここを頼みますっ」

俺はもうひとりの副官にこの場を任せて、駆け出した。

刀を掴み、腰に結んだ帯に差す。念のため、と白蓮が用意してくれた甲冑を着ける暇はなかった。

白蓮たち白馬義従は包囲されつつある。

一刻も早く救援に向かわなければならぬ。

「……役に立つかは分からないけど……」

外に繋いである馬を何頭か借りて、数人の従兵と共に城外へ出る。

「敵とまともに戦わなくても、馬で道を開けばそれでいい。目印は

白馬だ！ 皆、ついてきてくれっ！」

俺を先頭に、騎兵小隊が動く。

慣れない馬上だが、手綱をしっかり握り、前へと突き進む。すぐに

敵兵が視界の大部分を埋めて、その奥に白い馬の一群と、赤い髪が見えた。

敵兵達は白蓮に気を取られて、こちらに背を向けている。

片手を手綱から放し、抜刀。

日本刀がその身をあらわにし、周囲の空気を一変させた。

ただの鉄塊を兵器として鍛え上げた果てに、美しささえ纏わせた逸

品だ。武を知る者はもちろん、それ以外の者も引き付ける気配を、

それはもっている。

「っ、片手じゃ無理があるけどなっ！」

右手を、敵兵をなぎ払うように、振るう。刀がその動きに従い、一

閃。小さな手応えがあり、敵兵が仰け反った。倒せてはいないが、

牽制にはなった。

「白蓮っ！」

無様なことに、切れ味に優れた日本刀を鈍器代わりにつかいながら、漸進する。俺に従ってきてくれた兵達も、敵を倒すのではなく、振り払いながら付いてきてくれていた。

敵兵の向こうに、白蓮の顔が見えた。血に濡れて、顔をしかめている。

一瞬、その姿に総毛立つ。

手を延ばすが、敵が邪魔で届かない。

両手で刀の柄を握る。両足で馬体を挟み、体幹を支える。

大上段に構えた大刀が煌めき、刹那の内に敵兵の体を甲冑ごと切り捨てた。血飛沫があたりにまき散らされる中、俺は体を投げ出すように馬を進め、白蓮の元へ滑り込む。

「白蓮、大丈夫か!!」

「ほ、北?っ! なんでここに!」

白蓮は驚きに目を見開いて、こちらに馬を寄せた。顔も体も血にまみれているが、重傷というわけではないらしく、動きはスムーズだった。

「困まっていたみたいだったからさ。余計だったかな?」

「……いや、助かったよ」

ふっ、と息を吐いて、緊張していた顔をほころばせた。

「別働隊にも指示を出して、ひとまず、ここから脱出しよう」

「そうだな……城の近くまで退いて、別働隊と挟み撃ちしたほうがよさそうだ」

白蓮が声を上げて白馬義従を率い、後退させる。追撃は馬と人の差で振り切れるが、問題は前の敵だ。戦わなければ進路が啓開できないし、手間取れば後ろに追いつかれる。

「鋒矢の陣で一氣に突っ切れ、後ろを振り向くんじゃないぞ! 殿は私がやる、全隊進めっ!!」

後退が始まった。俺は白蓮の横で、隊の後退を見守りながら、追いつめる敵をいなした。

「北郷、先に行け!」

「助けに来たんだ、置いていけるわけないだろ」

白蓮は呆れたように溜息とともに手を振った。

「ああ、もう、お前じゃ私の馬術についてこられないだろっ、お前が置いていかれるってことだ、いいから先にいけっつて」

「むむむ……」

「何がむむむ、だ。私ならすぐに追いつく。護衛も何人かいるからさ、ほら」

促されて、しぶしぶ、撤退を始める。しばらくして後ろを見ると、白蓮も退き始めていた。ただ、護衛も先に行かせて、自分は最後にまわしている。

速度は俺の倍はありそうで、敵の槍の穂先が届きそうな位置から、ぐんぐんと引き離して、俺たちとの距離を縮めていく。

なるほど、あれなら確かに、俺がいたら足手まといだろう。人馬一体となつて、大地を駆け抜ける様は、美しく、気持ちよさそうで、なんだか少し嫉妬を覚えるくらいだった。

易京城の城壁が見え始めた。撤退した仲間達も隊列を整えて出迎えてくれていた。

再度、反撃の機だ。

「全隊反転！ 城壁の上からの掩護射撃が終わったら、もう一度だけ敵を叩くぞ！ 別働隊の攻撃に合わせて突撃だ！」

白蓮が城壁の影の内に入ると、上から味方の弓矢が放たれ始めた。

追撃にきた敵兵を矢が貫く。敵兵の足を止め、時にその命をも止める矢の雨だ。

一進一退。城の外で戦えている分、今はこちらが優勢だ。だが、別働隊というカードを切ったあとどうなるか。

可能な限り打撃を与え、敵に敗勢を悟らせなければならぬ。

城壁に旗が揚がる。合図だ。別働隊が動く。別働隊の主力は戦車隊だ。騎兵が多いと、敵に勘付かれると考え、駄馬と補強した荷車を周辺の民家に分散して配置し、合図と共に集合して突撃する手筈である。

速度こそ騎兵に劣るが、打撃力では下手な騎兵より優れる戦車隊が、黄巾の大軍めがけて進撃していく。猛進を止める手は歩兵にはない。「行くぞっ！」

合力すべく、公孫贗軍本隊、白馬義従が何度目かの攻勢をかける。すでに、互いの血を浴びて、真っ赤になった白と黄色。黄巾は公孫贗軍を包囲殲滅しようとし、公孫贗軍は速度でかきまわして包囲を食い破ろうとする。別働隊とあわせて、黄巾党の陣には二つの穴が空いたが、まだ、別働隊と合流できるほど穴は大きくなかった。

「あと一撃っ、あと一撃あれば届くの！」
白蓮はもどかしそうに剣を握る。

城全体を包囲している黄巾軍は数十万。今、白蓮と戦っているのはそのうち数万だ。全力を傾注しても、陣を貫くにはまだ足りなかった。

「でも、ここで退いたら別働隊が危うい。少しでも、少しでも前へ！」

白蓮の脇を固めながら、じりじりと軍を進めていく。

大軍のなか、埋もれてしまっような気配に尻込みしそうになる気持ちを奮い立たせて、前へ。

それでも、たった一人のそんな気持ちなど無視する圧力が、前から横からかかってくる。

「危ないっ北郷ッ！！」

悲愴な声と共に白蓮がその体を馬上からおどらせた。俺の馬と白蓮の馬がぶつかる。

飛来する矢から、白蓮は俺を庇った。

幸い、矢は白蓮の剣で軌道がずれ、けがはなかった。だが、白蓮が落馬しかけて、俺が何とか支える形となり、進軍が止まった。

背筋に嫌な汗が流れる。

敵が来る　！

視界一杯に広がる敵が、雪崩れを起こして殺到した。

目標は、俺たち……ではなかった。

敵は左右に分かれ、何かから逃げようとしていた。

モーセを思わせる人の波の分断の中心に、人が立っていた。

空色の髪と雲の色の鮮衣、長く鋭い鎗を凜とした所作で操る少女

「星っ!？」

星、すなわち趙雲が、黄巾党の大軍を相手に一人で戦い、陣を切り裂いていた。舞うような槍の動きに、緩慢な動きの雑兵は身動きすら取れず、首を、命を刈り取られていった。

「ちょ、趙雲!？」

体勢をたてなおした白蓮も、その姿を見て驚く。

「おお、伯珪殿……おや？ 北郷殿まで、こんなところで戦っておられたのですか」

槍を肩にのせて、まるで何も無い道を行くがごとく、笑顔でこちらに歩み寄ってくる。

「趙雲、なんでこんな所にいるんだ？ 大陸をまわってくるんじゃないかったのか？」

白馬の上から、白蓮が尋ねる。

星は周囲に目を向けながら、口を開く。

「ええ。一通り回ってみたのですが、どこもかしこも混乱の真っ直中。長居はできずにそろそろ戻るかと思ってみたら、この有様、やはり異常ですな。この乱世は」

「そうか……ん、別働隊がこっちに来るな」

星が雷霆のように一掃した道を、別働隊が通過して、こちらと合流した。

俺たちがあれだけ前進するのに苦労した大軍を、あっさり散らした趙雲のすごさに、改めて、彼女は、華奢な少女の体つきでも、三國志の英雄なのだな、と思った。

自分も必死になって、刀を振り回してはいたけれど……。

ふと、刀にこびりついた血を見て、自分は、人を斬ったのだ、と実感した。

「趙雲……おかげで、予想以上の戦果をあげられた。その、感謝す

るよ」

白蓮はおいしいところだけでもってった星にちよつと悔しそうな表情で、礼を言った。

「はっはっはっ、なあに、数だけ多い賊の群れなど造作もないこと……とはいえ、これ以上ここで談笑するわけにもいきませう。こは、あそこの城まで退くといたしましょう」と、槍を城の方へ向ける。

白蓮も俺も異存はなく、別働隊含め、全軍全力で撤退した。

もはや敵軍に追う力も意志もなく、悠々と公孫贛軍は城へ凱旋した。城壁の上から歓声が降り注ぎ、俺たちは手を挙げてそれに応えた。

「黄巾の輩は、食糧を狙って周囲の村を荒そうとしておりました。

私はそれを偶然知り、白蓮殿の兵と示し合せ、民たちを荷車に乗せて、こちらに來たというわけです」

星は高樓の指揮所で経緯を説明した。

「見たところ、黄巾の者たちはかなり飢えている様子。この城を落とさねば、早晚瓦解しましょう」

「そうか……それなら、異民族の対処も間に合うか……」

「おや、黄巾のみならず、異民族もですか」

「ああ。呼応したみたい、同じタイミングで仕掛けてきた」

「たいみんぐ？」

「すまん、同じ時機、だ」

「ふむ……」

星は目を閉じて、何かを考えているように黙った。やがて目を開くと共に、口も開いた。

「この幽州のみならず、隣の并州や、涼州も異民族の動きに苦慮しており、また、南も同じく。さらに、この大陸の内側から黄巾党をはじめとする賊の暴動……。漢王朝が衰退したとはいえ、一度にこんな状況が現出するとは……」

たしかに、いくら乱世とはいえ、異常だ。

本来、男であるはずの英雄が女として存在するだけで異常、さらに

俺というイレギュラーが含まれるのだから、十分ありえることといえればそれまでだが。

「そういえば、中央はどうなっているんだ？ 黄巾征伐のあと何進が朝廷を牛耳って、それからあと情報が入ってこないんだが」

「ああ、何進は死にました」

「はい!？」

さらりといった星と対称的に、白蓮は混乱した。

「宦官連中……十常侍に殺されたとか。ただ、洛陽近くは軍が封鎖して、内情までは分かりませぬ」

「ううん……北？、どう思う？」

「その封鎖している軍は、どこの軍だった？」

「たしか、并州の董卓軍だったと思います」

「……董卓!？」

白蓮は驚いてこちらをみる。

この前、彼女に説明したとおりの展開になりつつある。三国志の流れ通り、董卓がこのまま政権を握れば、次は、董卓包囲網だ。乱世の階段を一つ昇り、群雄割拠まであと一息だ。

「どちらにせよ、乱世はさらに深まるでしょう。異民族、黄巾党、そして中央の動乱……白蓮殿」

星は、公孫贇を真名で呼び、真正面からその顔を見た。

「あなたは、この幽州をどのように治めるおつもりですか」

突然の問いに、白蓮が首を傾げる。

「どのように……?」

「いままで通りとはいきませぬ。同じ大陸の辺境、益州を統治していた劉璋殿が賊に殺されたとの噂もあります」

「劉璋が!？」

益州は大陸の南西……劉備が蜀漢をうちたてた地だ。その主が死んだとなれば、中華の外縁が混沌に沈んだと見てよい。

「みたところ、この城は堅牢で、統治も十全……しかし、このまま城に留まっていたら、いずれ益州と同じ事になります」

「うん……」

白蓮は眉を曇らせた。

「幽州から兵を出すのは難しいが、中央と群雄の動きを窺いに行くべきだろうな……袁紹や曹操、孫策……それに」

ちら、と白蓮がこちらを見る。

「劉備も」

「ん、そういえば、劉備殿や関羽殿たちはどこにおられるのです？

北郷殿と一緒に行動していたのではなかったですか？」

「それが、その……はぐれちゃって」

「なんと」

「できれば合流したいんだけど、居場所がつかめなくて。ただ、これから董卓が政柄を取ることになったら、皆動くと思うんだ。多分、桃香も。そうしたら、会いに行けると思う」

「ですな。なんにせよ、まずは黄巾党を平らげ、この地を安定させること。……でなければ、白蓮殿も北郷殿も幽州から動けませんまい。私一人ならいかようにでもなりますが」

俺と白蓮は頷いて、城壁の外を見た。黄色の群集は、疲弊しきって、もう陣形も何もなく、ただたむろしているだけのようだった。

「もう一度、降伏を促してみないか？ あの人達に」

俺は提案してみる。二人は、顔をしかめた。

「……受け入れるかな？」

「飢えているうえ力を持って余して四方八方で暴れ回っている餓狼に、単純な降伏勧告が通じるとは思えませぬな」

「なら、戦える場所と、衣食住を与えてやればいい。ちょうどいい場所があるじゃないか……長城のあたりに」

「ああ」

「なるほど」

そういうことになった。

黄巾党残党を平定してひと月、ついに、俺たちは董卓包囲網へ参戦すべく、一万の兵を率いて南下した。将は公孫賛、俺、趙雲の三人、残りは幽州で留守番ということになった。

黄巾党の兵は公孫賛軍に吸収され、北方防衛の任についた。数十万の兵すべてを戦闘要員とするわけにはいかなかったため、専門の戦闘員、農業従事者、半農の屯田兵の三つに分けた。

まだ一ヶ月しか経っていないので一万しか遠征にはだせなかったが、そのかわり、白馬義従をはじめとした精兵が編成されている。

「董卓が専横を極め、諸将が連合を組む。的確な読みでしたな、主」星が誉めそやす。いつのまにか、星は俺を主と呼ぶようになっていた。

「あはは、星が持ってきてくれた情報が正確だったからだよ」

「謙遜することはないぞ。お前の意見のおかげで、精鋭を選びすぐつて、動かせるようになったし。ほら、北？の旗もつくつてやったんだから、胸を張れ、一刀！」

背中を叩いて、白蓮が活を入れる。

白蓮は、真名の代わりに俺の名前を呼ぶことが多くなった。といっても、ふたりきりの時とか、砕けた場だけだが。

「お、おう。そろそろ、連合の集合地点だもん……！」

軍旅は、洛陽を包囲する連合軍の中心に到達した。

たくさん幕営が並ぶなか、各地の英雄達の旗が、蒼天にたなびいている。

曹、袁、孫、張、馬……劉。

それに公孫と北郷の二旗が加わり、董卓包囲網、反董卓連合はその全軍が集結した。

第2話 公孫贛伝々 たったひとりの少女？ (後書き)

本家三国志もそうですが、恋姫無双も登場人物が多くて、全員出るのが大変です。

一応、全員を出してあげたいとは思っています。

少なくとも、魏呉蜀どれかに偏るといのは避けたいです。

ラストは決まっているのですが、そこに至る道筋はまだまだわかりません。

気長におつきあいいただければ幸いです。

第3話 無銘伝二丁三英雄と一刀の剣（前書き）

反董卓連合に一刀が合流。

懐かしい仲間達と再会し、

そして、無銘刀がその力の一端を示す

第3話 無銘伝二丁三英雄と一刀の剣

「劉備軍は先行した？」

反董卓連合軍、その集結地点の大本営に入ると、俺たちは諸将居並ぶ中、状況の説明を受けた。

幕営の奥、一段高い位置から俺と公孫賛を見下ろす形で気だるげにしている女　この軍の総大将である金びか女　袁紹が口を開く
「ええ。董卓さんごときにわたくしが率いる軍が負けるわけありませんから、いらなといったのに、ええつと……なんだつたかしら、顔良さん？」

金髪くるくる髪の毛の傍らに立つ、黒髪の小女が疲れた顔で袁紹を見る。

「偵察です、麗羽さま……」

「そう、偵察に向かうとかなんとか」

「劉備達がそれを買って出たのか？」

袁紹に喋らせるより先に自分が説明した方がいいと思ったのか、顔良が答える。

「いえ、孫策さん達が偵察の提案をして、それで袁紹さまが、いらなと思うけど、劉備さんでいいでしょう、と……」

「適当に決めたな、と俺は思った。」

「劉備軍の数はどれぐらいなんだ？」

「さあ？」

袁紹が興味なさそうに首を傾げる。

「というか、北郷さんは劉備さんのところにいたんじゃないの？」

袁紹たちとは黄巾党の乱の時に、面識があったらしい。

「ちよつと事情があつてね。それで、数がわかる人は？」

「せいぜい五千といふところよ」

幕営の端っこの方で佇んでいた、小さな女の子……いや、強大な英雄の雰囲気纏った少女が言う。

何を命令するでもない、どちらかといえばつばやくような声量なのに、その言葉が重いのは、少女が、あの、曹操であるからに他ならない。

「5千……厳しいな」

偵察にしては多いようだが、少ない。なぜなら、連合軍がこれから向かうのは、？水関だからだ。董卓の居る洛陽に向かう第一の関門、？水関。董卓軍が待ち構えて居るであろうそんな場所を偵察するからには、半ば強行偵察のようなものになるだろう。

「偵察を提案した孫策軍が向かうべき所じゃないのか」
と、幕営の一角を見やる。

諸將集う陣のなかでも、一際目立つ……といっても、袁紹軍のような金ぴか悪目立ちではなく、他を圧倒するような炎の赤で統一された装備の軍団。その頂点にいる二人、孫策、周瑜の目がこちらを向く。

三国志の英雄達のなかでもトップクラスの力、器を誇る二人の視線が俺を射貫く。

こ、怖っ……！

ひるみそうになるが、ぐっと耐えて、返事を待つ。

「そうね」

孫策はあっさり認めた。

「でも、もう劉備軍は行っちゃたわ。これから追ってもいいけど、そうなると董卓軍も大きく動くでしょうね」

「……もし董卓軍がでてくれば劉備軍はひとたまりもないってことか」

劉備軍が偵察するとすれば、数を散らして、いつでも逃げられるように、抑えながら探りを入れるはずだ。そこに孫策軍が顔を出し、董卓軍が対応を迫られ、その結果？水関からうって出て孫策軍を迎え撃つ事になったとしたら、？水関の外でうるちよろしている劉備軍を放っておくとは思えない。

逃げるにしても劉備軍には損害が出るだろう。

劉備軍の偵察を中止するなら、大軍を動かさず少数で向かわなければならぬ。

しかし

「なんにしても偵察はこなして貰わないと困るわね」と曹操。

そう。どの軍がやるにしても、偵察は重要だ。勝敗に大きく関わってくる……が、地味な仕事だ。総大将である袁紹の思い付きではないのに、劉備が反対できずに押しつけられたのは、他の連中がやりたがらなかつたからだろう。

「……俺が劉備軍の様子を見に行ってくる」

「お、おい、北郷……！」

白蓮が止めようとするが、俺は言葉を継いだ。

「見張り役として、他の軍からいくらか將兵を出してくれないか。できれば、戦力になる人材で」

一同を見渡す。

袁紹軍は面倒臭そうにしている。

袁術軍はそもそも聞いてない。なんだあれ？ 八チミツ？

孫策軍はこちらを値踏みしているだけで、動く気配はない。

馬騰、というか馬超軍は、ポニーテールの少女……馬超が手を挙げようとしているのを周りが必死に止めている。無理強いは出来ないだろう。

そのほかの軍も似たり寄ったり。

そこに

「いいでしょう」

曹操が、とん、と卓に手を置き、

「兵八百に三人武將を付けるわ、見張りもさせるけど、ちょっとぐらいの競り合いなら許可してあげる」

「華琳さま!？」

曹操の後ろに立っていた夏侯惇が驚きの声を上げる。

それにかまわず、卓に竹簡を広げ、曹操自ら命令を書き記す。

「兵糧は太っ腹な袁紹が出してくれるでしょう」

「だれが太っているですって!？」

「麗羽さま、そういう意味じゃないですっ!！」

「ほら、この命令書を持って行きなさい。将の名前は、楽進、李典、于禁。帷幕の外に出たら私のところの陣にいる伝令にこれをわたせばいいわ」

「……ああ、感謝するよ」

「結果を出しなさい」

俺は曹操から竹簡を受け取り、外に出た。

「北郷つ、星とうちの兵も連れて行くか？」

白蓮が慌てて追いかけてきた。

「いや、念のため白蓮と星は一緒にいてくれ。偵察が終わった後、合流できるかどうかわからないからな」

なにせ董卓軍にはあれがいる。

この戦いではあれの出番はないはずだが、備えるに越したことはない。なにせあれは天下無双なのだから。偵察に出た劉備軍を心配しているのは、董卓の大軍にやられることへの危惧もあるが、それより万が一あれが大暴れしてきたことを思い浮かべたからだ。

「兵は……そうだな、少し分けてもらえるか」

「わかった。そんなに数が居ても困るだろうから……二百、用意させる。曹操の陣に行つたあと、私の陣に寄つてくれ」

俺は頷き、白蓮の肩を叩く。

「行つて来るよ」

「気をつけてなっ!」

白蓮の言葉を背に、俺は曹操の陣へと向かった。

短いやりとりだったが、群雄の考えが透けて見えた気がした。袁紹や袁術はこの戦いに絶対の自信があるがその根拠はない。

孫策はこの戦いが厳しい物だと分かっているため、勝つための布石は打っておくが、自身が前に出るのはまだだと思っている。

曹操は……。

華琳は、あの小さな大英雄は何を考えているのだろうか。

曹操の軍はこの戦いに私財を投じて参戦した。つまり、彼女の兵力は、自分の領地から徴兵して出てきたものではなく、貴重な財産そのものだ。

夏侯惇、夏侯淵などの強将が控えているとは言え、なぜ俺みたいな人間に兵をまわしたのか……。

結論が出ないまま、俺は曹操軍の陣に到着し、三羽鳥、楽進・李典・于禁と対面することになった。

曹操軍本営

「華琳さま、なぜ北郷に兵を送ったのです？」

夏侯淵、秋蘭が主に尋ねる。

「そうです！ 八百とはいえ大事な兵、しかも風たちまでつけて！ 夏侯惇、春蘭も声を揃える。

別に批難しているわけではないが、自分たちの兵でもあるのに何故という気持が強いのだろう。

「……ふたりとも、この戦いの勝利条件は、何だと思っ？」

華琳は椅子に座り、質問に答えずに問い掛ける。

「そりゃあ、敵を全部倒せば勝ちです！」

春蘭は勢いよく言い切り、

「董卓を打倒すること、ではないのですか？」

秋蘭は言っている途中で華琳の様子を見て取り、声の調子を変えた。「確かに敵を、董卓を倒せば終わるわ。できるかどうかはともかくね。でも、それは反董卓連合の勝利条件ではない」

「……なるほど」

「んん？ 秋蘭、どういうことだ？」

「つまり、私たちには私たちの勝利条件……目的があるということ
よ」

華琳は目を閉じて、周囲の空気を探った。

この場にいる三人以外の誰かが聞いている気配は無い。

「孫策軍には稟と風、他の軍には桂花を中心として様子を探らせているわ。残るは劉備軍と公孫贇軍だけど……ふたりは気になるのはどっち？」

「それは……劉備軍では？ 無名とはいえ、関羽や張飛、孔明や鳳統という猛将、軍師が集まっていると聞きますが」

「関羽など、わたしに比べればあんな奴っ！」

春蘭は憤る。

華琳は無視する。

「そうね。劉備自身がどれほどのものか知らないけれど、関羽は欲しいわね」

「華琳さまああ……」

春蘭は泣きそうになる。

「公孫贇軍は将といえる将、軍師といえる軍師がいなかった。趙雲という客将はいるみたいだけどね。ただ……少し前の戦いで、公孫贇軍は黄巾党数十万を破った、と聞いたわ」

「数十万……！？」

夏侯淵は眉を顰めるが、夏侯惇はどうということはない、という顔をしている。

まあ、夏侯惇なら数十万相手でも烏合の衆と考えるだろう。

「そして、今日みただけ、公孫贇軍は一万ほど。数としてはまあ揃えられそうなものだけど、主力とかいう白馬儀従をはじめとして、質は良さそうだったわ」

「白馬儀従、つぶ、くくっ」

夏侯惇はその言葉がツボに入ったのか、吹き出した。白馬儀従（笑）みたいなイメージなのだろう。

「数十万と戦ってなお、一万の精兵が出せる……それだけの能力がある者がいるわけですか」

「そうよ」

秋蘭と華琳の二人で話は進む。

「それは、公孫贄ではなく……」

「そうね。多分、違うでしょうね」

「趙雲という客将でしょうか？」

「将としては噂を聞くけど、政はどうかしらね？」

「華琳様はどうみておられるのです……？」

「もう秋蘭はわかってるんじゃない？」

「……まさか、北郷が？」

袁紹と同じく曹操達も黄巾党の乱の時、一刀と対面した。協力もした。その時は、天の遣いとかいう胡散臭い男　それぐらいの印象しかなかったが

「可能性としては一番高いでしょうね。名もない誰かが助力しているかもしれないけど、それはこれからわかるわ」

華琳は外を見る。中天に日が昇り、暑さが増した幕下、冷たい知謀が駆け巡っていた。

「北郷の様子を見るのにあの三人で大丈夫でしょうか」

「素直な人物評を三人分見れば、大体の器量はわかるわ。こういうのは軍師じゃないほうが逆にわかりやすいのよ」

「……さすが華琳様」

このように、曹操陣営は静かに立ち上がり、自分たちの戦いをはじめていた。

孫策軍本営

「さつとと、そろそろ軍を出さないかね」

チャイナドレスのような軍装束を纏い、明るい赤色の長髪を揺らして、美しい妙齡の女が立ち上がる。

孫策。

大陸の南部で勢力を築く、後の小霸王である。

「まさか先陣を任されるとはな」

本営にいるもう一人の美女、こちらは長い黒髪に眼鏡、知の力を感
じさせる風貌の女性が嘆息する。

周瑜。

孫策、孫権二代を支え続けた將軍。

「偵察押しつけたのバレちゃったからねえ。まあいいじゃない？
水関で功績を挙げて、次の虎牢関で一休み、機を見て洛陽一番乗り
……予定が前後しただけよ」

「ふ、そういわれれば、問題ない気もするな……しかし、まだ蓮華
さまや思春が到着していないぞ。どう功績を挙げる？」

「？水関の奪取か、守将の首、ってところかしら？ どちらも一筋
縄じゃいきそうにないけど……守将によるわね」

「ああ。どちらにしても十万もの大軍をまともに相手などしてい
られないからな」

「劉備ちゃんが敵将の情報をつかんでくれれば、方針が決まるわね。
うまくやってくれるといいけど」

「なあに、北郷が命をかけてやってくれるさ。曹操の見張りつきだ
からな。死にものぐるいになることだろう」

「ふふ、天の遣いがどうかという噂は聞いていたけど、あんな子だ
つたとはね。まだちょっとやわそうだけど、見込みはあるんじゃない
い？」

と、口の端にちよろつと舌を出す。

「お前の趣味はよくわからん……」

周瑜は、孫策と周瑜の視線を受けて、引き攣りそうな表情を浮かべ
た北郷の顔を思い浮かべて肩をすくめた。そして、そんな表情でも
眼はこちらを見据えたまま動かなかつたな、と少しだけ評価した。

孫策軍は、劉備軍の後背につき、偵察が済み次第攻撃を開始するた
め、進軍を開始した。

「君たちが、楽進、李典、于禁、でいいのかな」

本当は見知った顔だが、知らないふりをして、俺は尋ねた。

「はっ」

先頭に立っていた顔に傷のある銀髪三つ編みの少女、楽進が肯定した。

「曹操様の命令により、参上しました楽進と申します」

続いて眼鏡を掛けた娘がウインクして自己紹介する。

「わたしは于禁なのー」

そして最後、紫の髪を二つに束ねた女がニツと白い歯を見せて挨拶する。

「ウチは李典や。よろしゅう頼みます、隊長」

「……………隊長？」

俺は首を傾げた。

「曹操からどういふ命令を受けてきたんだ？」

「？水関の偵察が終わるまで北郷殿に従い、一部隊として行動せよ、と」

「……………そうか」

これじゃこの三人が俺の下についたみたいじゃないか。監視役のはずなのに、華琳は何を考えているのか

「何か問題が？」

「いや、よろしく頼むよ、三人とも」

「はっ」

「了解」

「よろしくなのー」

俺たちは騎乗して、連合軍幕営から離れて隊列を整えることにした。八百の曹操軍、二百の公孫贛軍をあわせて千人の部隊だ。輜重隊をあわせれば実数は倍近くにも膨れ上がる。

「とりあえず、俺と楽進が前衛に、李典と于禁が後衛に。劉備軍と一旦合流するから、それまで急いで行軍するよ」

「はっ」

「隊長が前で大丈夫なのー？」

「まだ戦いになるわけじゃないから。というか、本格的に董卓軍と当たりそうになったら逃げるように。本軍が到着するまで下手に戦っちゃだめだから」

「了解了解つ、と。まあ、さすがにこの数じゃ当たれんよなあ」

あらためて隊列を揃え、出陣。

俺は公孫贛軍二百の兵を率いて一路？水関を目差した。

「ふう……」

俺は道中、誰かに気付かれないうように小さく息を吐いた。こつちの世界に戻ってきてから一ヶ月、訓練をつんで馬にも乗れるようになったし、真剣の扱いにも慣れた。

とはいえ、俺は、ほとんどこれが初陣のようなものだ。黄巾党との戦いは無我夢中だったし、相手は軍というより群だった。乾いた唇を舌で湿らせる。

俺は、黄巾党との戦いで人を殺した。命令ではなく、自分の意志で、自分の剣で人を斬った。白蓮を守るために。

今度も、千人の部隊を剣として、それをやればいい。俺はもう一度息を吐いて、吸って、決意を飲み込んだ。

「伝令つ、前方五里に劉備軍の輜重隊と思しき一群と、数百の騎兵隊を発見つ！」

「劉備軍の本陣か……劉備軍に伝令を。こちらは公孫贛軍と曹操軍……というか北郷一刀だと伝えてくれ」

「了解つ！」

「意外と早かったな」

？水関はまだ見えてこない。見通しのいい、この地形で見えないのだから、かなり遠い。

「劉備軍は崖を登って？水関側面に回ったのか？それならすぐには敵に発見されないだろうけど、逃げにくくなりそうだな……」

俺は同時に凧達にも指示を飛ばし、輜重隊を切り離し、行軍速度を

速めた。

「劉備軍より伝令です」

「おおつ、来たか。で、なんだって？」

「はっ、北郷様の到着を心待ちにしている、とのこと」

俺は桃香たちの顔を思い浮かべ、思わず頬が緩んだ。

「了解つ、じゃあ、輜重隊をもう少し動かしたら本陣を構築、本陣には李典と于禁、楽進には念のため一緒に来て貰うように伝えて」

「はっ」

伝令が飛ぶと、すぐに楽進が駆けつけてきた。

「劉備軍の本陣に向かわれると聞きました」

「うん、劉備軍の偵察がうまくいつているかどうかを見るのが役目だからね」

「隊長はもともと劉備殿の旗下……私は邪魔では？」

「んん？ そんなことはないよ。一時とはいえ、仲間じゃないか。

桃香も……と、劉備も歓迎してくれるよ」

思わず真名で言ってしまった。よほど親しい者ではない限り真名を教えることはない。俺が勝手に劉備の真名を言い触らすわけにはいかないだろう。凧が真名をつっかかり呼ぶなんてことはなさそうだが。「そうですね……では、お供させていただきます」

「うん、本陣が落ち着いたら、あとの二人も呼ぼう」

馬上で話しているうちに、劉備軍本陣が見えてきた。

緑地に劉の旗。懐かしくなる旗印……その隣りに、北郷を示す十字の旗も見えて、思わずじんときてしまった。

さらに馬を進めると、陣の入口前に幾つかの馬影が見えた。

「あれは……！」

「……ご主人様……！」

馬の上でぶんぶんと手を振る、三人の少女。同じぐらいの背丈の肉中背二人と、小柄な一人。

俺も手を振りかえず。

顔が見えるぐらい近付くと、俺は馬を下りた。凧もそれをみて下馬

する。

少女達の表情は溢れんばかりの笑顔だった。目元にうつすら涙が見える気もするが、それを吹き飛ばすぐらいの微笑みがあった。

「ご主人様あー!!」

先頭を切って走り出した少女は、転びそうになりながら俺のもとへ飛び込んできた。このどこにでもいそうな少女が、あの劉備であるなんて、だれが思うだろう。

「桃香っ……!!」

懐かしい温もりと香りを抱いて、再会を喜ぶ。

「お久しぶりです、ご主人様!」

桃香の後ろを支えるように走っていたサイドポニーの麗人、関羽が俺の手を握って、大事そうに両手で包む。

「ご、ご主人、様ッ……!!」

頑張って走ったせいで肩で息をしている小柄な少女、子供と見紛わんばかりの風体の子が、腰のあたりに飛びついてくる。

体は子供だが頭脳は普通の大人以上、いや、この三国志界でも随一といってもいいその少女の名は、孔明。

「みんな久しぶりっ」

ひとしきり温もりで存在を確かめたあと、三人は体や手を離し、改めて対面した。

「ごめんな、心配かけたみたいで」

三人の笑顔の奥には、安堵が透けて見えた。

「そうですっ、突然いなくなるなんて……っ!」

「みんな、みんな必死になって探したんですからっ!」

愛紗と朱里は俺を非難する。

「ほんとごめん。みんなとはぐれてから、公孫贇のところまで世話になっただんだ」

「白蓮ちゃんの前?」

「ああ。一ヶ月半ぐらいかな。みんながどこにいるかわからなかったから……また会えて良かった」

その言葉に、三人は一樣に頷いた。

「それで、鈴々たちは？」

劉備軍一番の元氣印の姿が見あたらなかった。それから劉備軍も唯一人の軍師、鳳統も。

黄忠や嚴顔、魏延たちはまだ劉備軍に加入していないし面識もないだろう。俺は覚えているが、今の時間軸だと会ったことがないことにしておかなければ。

「鈴々ちゃんと雛里ちゃんは偵察にでてるよ」

桃香が答えた。

「ああ、そうか、そうだよな」

「北郷様」

そこで、公孫贇軍の伝令が声をかけてきた。

「李典様から、本陣が完成したとのこと」

「早いな。じゃあ、李典と于禁の二人もこっちに来てもらおう。そう伝えて」

「はっ」

伝令が駆ける。

「実は、劉備軍の様子をみるために俺と、公孫贇軍と曹操軍が来たんだ」

「様子を見に……ですか」

朱里が顎に手を添えて、呟いた。おそらく彼女は、様子見、という言葉に、監視という実態があることを見切っているだろう。様子見だけなら公孫贇軍だけかまわないのだから。

「この子は、曹操軍の楽進。楽進、彼女たちは劉備と、関羽、それから孔明」

「楽進です」

控えていた楽進が挨拶する。

桃香達もそれぞれ自己紹介し、とりあえず劉備軍の本営に向かうことにした。

李典達も合流し、孔明を説明役に、軍議が始まった。

「現在、劉備軍は大きく二つに分かれ、？水関の偵察を行っています。一つは私たちが率いている本隊、もう一つが張飛隊、これには離里ちゃんが補佐についています。本隊は？水関の正面から、張飛隊は側面を迂回して敵の様子を窺っています」

「今のところの成果は？」

「？水関の兵力、それから配置されている将についていくつか情報は掴めました」

「おおっ、それじゃあ、ほとんど終わったようなもんやないか？」
真桜がぽんと手を叩く。

「いえ……肝心の、守将がだれかということがまだわかっていません。見えている旗のうち大きい旗は華、張、徐、李、郭、呂が並んでいるのですが……」

華雄、張遼、徐榮……呂布、どれも大将級だ。

「洛陽との距離から考えると、それだけの将がそろえられるとは思えません」

と、楽進。

「はい。おそらく、旗だけあげているだけの将がいるでしょう」

「んん？　いくらウチらの進軍が速くても、将一人ぐらい間に合っ
んちゃうの？」

「私もそう思うのー」

「将が居たら率いる兵が必要だろ？　船頭多くして船山に上るって言葉があるし、将だけ多くても混乱するだけだ」

「なるほどー」

「それで、敵の兵の数はどれくらいなんだ？」

「運び込まれている兵糧を見る限り、五万は超えないと思われ
ます」
「五万か……」

「二万に一人の大将と考えても、三人が最大というところか。」

「実際に動いているのは三人ぐらいかな？」

「はい。私もそう思います」

「何度か挑発して軍の動きを観察していますが、徐、李、郭の三つ

は動きが鈍かったことが確認できました」
事も無げに関羽が言う。

十倍近くの敵を挑発って……。

「ということは華雄と……えっと、残りの二旗はなんや？」

「張と呂、無名ではありませんが、おそらく、張遼と呂布ではないかと思われます」

「あんまり聞いたこと無いのー」

「ウチもないなあ」

「……呂布という名前は聞いた気がします……確か、元の主を裏切り、董卓についたとか。個人の武名は聞きますが、将としてはよく知りません」

凧が記憶の奥をさらうように思いだし、発言する。

「新参の将ということか」

愛紗はふむ、と眼を朱里に向ける。

「新参が総大将、というのは考えにくいように思うが」

「ええ。しかし、即断はできません」

「桃香はどう思う？」

「うーん、そうすると、残るのは華雄さんと張遼さん……、張遼さんは呂布さんと同じ新参の人なのかな？」

「その可能性が高いと思われます。名前がでたのがごく最近のことですから」

「じゃあ、華雄さんが総大将って可能性が一番高いね」

「はい」

「とすると、あとは裏付けだけか……まあ、偵察で全てがわかる訳じゃないから、可能性が高いつてことだけでもよさそうだけだな」

「連合軍の本隊が到着するまで、もう少し突いてみるという事になっっているの……」

「うん。俺たちもつきあうよ」

と、楽進達を見ると、三人は首肯した。

「……ご主人様？」

「ん？」

呼ばれて桃香の方を向くと、彼女はなんだか悲しそうな顔をしていった。

「もしかして、偵察が終わったら、別の所にいっちゃうの？」

「え……？ いや」

誤解させてしまったらしい。

愛紗や朱里も不安そうな顔をしてこちらを見ていた。

「偵察が終わったら彼女たちを曹操軍に送り届けて、あと白蓮にも挨拶しにいくつもりだけど、そのあと皆の所に戻ってくるよ」

「そ、そうだよ、良かったあ……」

と桃香は胸をなで下ろした。でかい。いや、注目する状況じゃないが。

「あー、隊長、劉備さんのおっぱい見てるのー」

「ぶほっ！！」

吹き出した。

「うわー、隊長やらしいなー」

「ちょ、ま、待て！ 誤解だ！」

誤解じゃないけど。

「隊長……」

「ご主人様……」

みんなから白い目で見られた。

桃香はちよつと顔を赤らめさせたが、俺の困った顔を見て、ぷつ、と笑い出した。

それにからかっていた沙和や真桜も続いて、みんながあははと声を上げて笑った。

北郷隊と劉備軍が少し仲良くなった。

同日、？水関正面。

関の前方に建設されていた防護柵を蹴散らし、劉備軍が名乗りを上

げた。

董卓軍は一瞬の動揺ののち、後方で部隊を纏めて、劉備軍を蹴散らさんと前進を開始。

「関羽隊停止、弓隊一斉射の後、全速で後退せよ！」

愛紗が馬上から指示を送る。

「関羽隊に近づく敵を分断します！ 崖上からの落石予定位置まで誘導を！」

朱里が関羽隊の後ろから騎兵隊に命令を下す。

「楽進隊、旗の動きに注意して関羽隊に合図！ 華、張、呂の旗に気をつける！」

楽進隊は崖上から敵の動きを見張る。

「于禁隊、下の合図をよく見て動くのー！ 遅れたら味方が大変なのー！」

于禁隊は落石を監督している。

関羽の挑発的な動きに釣られて、董卓軍の一部が動く。

最初に動いたのは張、次に動いたのは呂……。

「……………ん？」

「……………？」

最初に気付いたのは挑発を何度も繰り返していた関羽。続いて崖上から見ていた楽進隊が気付いた。

「華雄の動きが鈍い……………？」

同時刻、？水関側面。

張飛隊は崖上から迂回して？水関の偵察を行っていた。

「うー、せまいのだー」

「鈴々ちゃん我慢して。…………あ、帽子が引っ掛かったっ…………」

同じぐらいの背丈のふたりの少女、張飛と鳳統が肩を並べて、木々の隙間から外を見ている。

「この前仕掛けた罫は外れていないみたいなのだ」

「じゃあやつぱりこつちには気付いていないのかな」

劉備軍の作戦は、関羽による強行偵察と張飛による隱密偵察の二つに分かれて行われていた。正面から事を行う関羽隊も危険度は高いが、張飛隊は隱密行動が露見した場合ただではすまないし、張飛はともかく、鳳統や部下の兵士は命の危機である。

そのため、行動予定位置周辺に何重にも罾を張り巡らせ、敵の動きを牽制しながら、偵察を行っていた。

「まわりも大丈夫みたいなのだ」

劉備軍のなかでも精銳の兵達が安全を伝える。

「それじゃ鈴々ちゃん、今日もお願ひします」

「了解なのだっ」

草むらから飛び出し、ぴよんぴよんと、張飛が？水関の見える位置に向かう。

鳳統は息を潜め、万が一の撤退径路を頭の片隅に置いて、わずかな変化も見逃さぬよう神経を研ぎ澄ます。

何分、何十分そうしていただろう。

ガサ、つと葉擦れの音。

びく、つと鳳統は息をのみ、しかし冷静に、

「あわわ……北に備え」

と問い掛けた。

「えつと、劉に十なのだ」

と聞き覚えのある声の答え。

「鈴々ちゃん」

ほっ、と鳳統は緊張を解く。

「様子が変なのだ」

「え？」

「兵の数が減っているみたいなのだ」

「？水関の？」

こく、と鈴々は頷く。

「少し中を探ってみたら、早朝に兵が？水関から後退したとか話し

ていたのだ」

「？水関から……後退……」

鳳統は頭を抱え、小さな情報から広く可能性を模索した。鳳統の背に、つう、と冷たい汗が流れる。

「鈴々ちゃん、他に何か変化はあった？」

「んー、いつも通り、愛紗と敵が追いかけてっこしていたのだ。今日は呂と張の旗が愛紗を追ってたみたいなのだ」

「華は？」

「今日はお休みみたい」

雛里は目を閉じ、刹那の間に決断を下した。

「……鈴々ちゃん、本陣に戻ろう」

「ん？ 何で戻るのだ？」

ここ数日は敵の動きが鈍くなる夕方に本陣に戻っていた。

「華雄が動いたのかもしれない」

鳳統の言葉が風を起こしたかのように、木々がざわめいた。

ほぼ同時刻、劉備軍本陣。

劉備、俺、李典は留守番組として本陣を守っていた。

正確には、劉備が劉備軍本陣、李典が公孫賛・曹操軍本陣、俺がそのふたつの本陣の調整役をやっていた。

留守番組は偵察組の情報を取り纏めると共に、敵がこつちまで雪崩れ込んできたときのための足止めの罠、李典がつくった防御用からくりの設置を行っていた。

とはいえ、偵察組に比べて時間は余りがちであり、つつい雑談に興じてしまう。

「ご主人様の剣すつごく綺麗だねー」

戦いに備えて、念のため刀を確かめっていると、桃香が感心したように声を上げた。

「私の剣も皆に誉められるけど、ご主人様のはなんだか装飾品みた

い

「まあ、細身だからな」

青龍偃月刀や靖王伝家、また兵達が使った長剣に比べると、一刀の無銘刀はかなり細い部類だろう。

だが、切れ味でいえば、おそらく、この時代の刀剣を遙かに凌駕する。

そのかわり、代えがなく、きちんと手入れをして壊れないようにしなければならぬが……。

しかし

「……」

鞘から刀を完全に抜き放ち、その刀身を外気にさらす。

根元から切っ先まで、目映いばかりに光り輝き、どこからみても刃こぼれ一つ無い。

この刀を貰ったときからまったくかわっていない、美術品のような姿のままだった。そう、あの一月前の戦いの時、血を吸った刀とは思えないほどの……

「手入れもなにもしていないんだけどな」

あの戦いが終わって、一段落し、あらためてみると、刃こぼれどころか血のあとすら消えていた。人を斬り、こびりついた血や脂が自然に取れるわけがないのに。

だが、俺はどこか納得していた。

この刀によって俺はこの世界へと再び導かれた。

だからこの刀は、この世界での役目を終えるまで、壊れも汚れもせず、このままでいるのではないか

そんな気がしていた。

刀を鞘に収め、腰帯にさす。

「そういえばご主人様、前のきらきら光ってた服はどうしたの？」

「ああ、ええつと……無くした」

今は、前にこの世界に来たとき着ていたフランチェスカの制服ではなく、公孫賛に貰った鎧を着ている。ジャージは寝巻用だ。

「ええええっ！！ もつたいない……欲しかったのに」

「ん？ ああ、珍しいもんな」

未来の日本ならありふれているポリエステルも、三国志世界なら不思議な未来素材である。

「そうじゃなくて……ご主人様が、着ていた物だから」

「ごによごによ、と消え入るような言葉で桃香は独りごちた。

「……………」

「……な、なんでもないっ！」

俺が桃香の顔をのぞき見ているのに気付いて、慌てて桃香は首と手を横にぶんぶんと振った。

「そう？ 悪用されるようなところには置いてきてないから、大丈夫だと思うよ」

そもそも置いてきたのは天の国……ここから未来の日本だし。

「そろそろ愛紗達が敵軍を挑発している頃かな」

「うん……あ、伝令さんが来たのかな？」

外から馬蹄が地面を蹴る音が聞こえた。

「き、急報、急報です！」

焦りの声に、俺と劉備は立ち上がった。

「崖上に董卓軍と思しき兵を発見、現在李典殿が応戦しておりますっ！」

「が、崖の上？ 側面から来られないように雛里ちゃんが罾を仕掛けていたはずじゃ……」

「突破されたのか……！？ 関羽達に伝令を！ このままじゃ、？」

水関の敵と崖上の敵に挟まれる！」

「ははっ！」

「本陣の兵、全員騎乗っ！」

桃香はもってきてもらった自分の馬にぴよんと乗り、部隊を集める。

「桃香、俺は白蓮の兵と一緒に李典のところに行ってくる！」

「うん！ 気をつけて！」

俺は劉備軍本陣に置いておいた公孫賛軍二百を率い、李典の所へ急

行した。

空気が張り詰めている。そしてその緊張を破裂させるような金属を打ち鳴らす音が響いている。

飛鳥のごとき矢が、飛び交っているのが見える。

崖上を取られているというのは、かなりこちらに不利だ。一方的に矢を射られてジリ貧となる。

おそらく李典は本陣の撤去を始めているはずだ。事前の軍議で、敵に攻められているときどうするかは決めてある。

案の定、李典は敵の動きを見ながら兵達を本陣から外へと誘導していた。

「食糧は放つとき！ 盾構え！ 弓隊、右側の敵から狙って落とすんや！」

「李典っ！」

「隊長、敵が上に！」

「ああ、わかつてる。劉備軍と合流するから、そっちの本陣へ向かおう。崖の側から離れるんだ！」

「了解や。みんな聞いたなっ！ 全速前進！」

曹操軍の本陣居残り組三百人、俺の公孫贛軍とあわせて五百が動く。

「隊長っ！ 敵が降りてくるで！」

「なにっ！」

高所の利点を放棄？

こっちの追撃を優先？

「偵察部隊の本営だつてバレてるわけかつっ！ 鼓を打ち鳴らせ！」

もうこっちの位置は筒抜けだ！」

声を張り上げて、先程来た道を逆走する。

振り返ると、李典と曹操軍が見事な隊列を組んで、敵との距離を離そうとしていた。

「さすが、曹操軍つてところか……これで相手が呂布とか張遼じゃなければいけそうだが……」

呂布ほどではないだろうが、張遼もまた超一流の武将だ。兵を率い

たときの総合力なら呂布を凌ぐかも知れない。

「李典っ、敵の旗印は判るか!？」

「わからんっ! というか旗なんかあげてないで!」

「それもそうか……奇襲だもんな」

俺が肩をすくめていると、

「その先陣の将っ!」

前方から声をかけられた。

逆光で黒いかたまりのようにみえる隻影、一人の将がこちらを睨んでいる。長柄の戦斧を抱え、甲冑を着た女だ。

先回りしたのか? いや、複数箇所に分れて崖を降りたのか。

だとしたら劉備軍本陣も危ない!

「我が名は華雄っ! お前は!」

「……北郷一刀」

「知らん名だ」

「ははっ、俺はそっちの名前を知ってるよ」

董卓軍の華雄。俺の知識が確かなら、史実においては孫策の父、孫堅に討ち取られた武將だ。

「ふっ、そうか、我が名は下々にまで知れ渡っているか。名も無き將を討ち取っても手柄にはならんが、まあいい。我が名を噛み締め、戦斧の血鎊となれっ!」

「お断りだっ!」

刀を抜く。

「はっ! そんな子供が使うような細い剣で我が一撃、受け止められると思っただかっ!」

「隊長っ!?!?」

李典が呼び止めるが、俺は止まらなかった。

(一撃を刀で受けてでも脇に回る。一刻も早く桃香と合流しなきゃ危険だ!)

「うおおおおおっ!」

華雄の戦斧が振りかぶられる。

「ぐっおおお!!」

手綱を放し、両手で刀を構えて横に一閃する。

十字に剣尖が交差し、金属音が響いた。

腕の筋肉が軋みをあげる。英雄の一撃、その膂力を受けて悲鳴をあげる。

だが、俺は一合を無事に切り抜け、怪我もなく華雄の脇を抜けることが出来た。

「来い、李典っ!!」

「了解や!!」

渾身の一撃を受けきられてたたらを踏んでいる華雄に軍勢が襲いかかる。

「くっ、このおおお!!」

体勢が整わず、さすがの華雄も後退している。

「無理はするな! 俺たちに構わず、劉備軍の元へ!」

「ここは公孫贇軍とウチらに任し!」

曹操軍は公孫贇軍と交代し、殿軍となった俺と李典、公孫贇軍が華雄軍と相対する形になった。

「……ちっ」

華雄は自制して一騎打ちを避け、自軍の集結を待っている。

「ここで討ち取れたらいいんだけどな」

「無理せんというや隊長。隊長倒れたらウチらどうすればいいかわからん」

「その時は俺たちに構わず逃げてくれといたいたいところだけど、真桜や凧が前に出ちゃってるからな……ここは慎重にしよう」

華雄軍は崖上から次々と兵を送り込んでいる。

総数はまだわからないが、俺たちより少ないというのはあり得ないだろう。

じりじりとさがりながら、にらみ合いが続く。

「伝令ですっ、曹操軍は劉備軍と合流、現在本陣防戦中!」

「本陣近くの敵の数は?」

「一千ほど！ その半数が崖の上です！」

「くっ！ 厄介だな」

「でも数はそれほどやない。ウチのからくりもあるし、関羽さん達が戻ってくれば、蹴散らせられる！」

「ああ。張飛達の安否が気になるが、今は出来ることをしよう。全軍、劉備軍本陣で防御陣形をとれ！」

華雄を振り切って劉備軍本陣に入り、桃香の傍に馬を寄せる。

「敵は崖上から降りてきてる。位置的に不利だけど、相手は馬がない。こっちの騎馬を使って掻き回そう」

「うん。でも、ここは守っておかないと、鈴々ちゃんと雛里ちゃんが帰って来たとき危ないよ」

「関羽さんや凧達が帰ってくれば、守りやすくなるんやけど……」

「それまでが勝負って事だ」

恐らく華雄は、雛里が仕掛けた罫や索敵網にひっかからぬよう、？水関から大きく迂回してこっちの側面に回ったのだろう。

いや、だとすると、なんでこっちの本陣を正確に補足できたのかわからないが……。

「……………」

ふう、と息を吐く。考えがまとまらない。敵の動きの根拠が読めない。

だが、敵は確かに目の前にいて、戦うしかないときている。こんなことで、守れるんだろうか……。

華雄の豪撃をうけた腕をさする。まだ、痺れが残っていた。武器がこの時代のものよりも優れているといっても、扱っ自分が弱ければ何の意味もない。

…… 殺すために戦ってるんじゃないけども、強くなきゃいけないんだ
…… 震えた腕を押さえて、刀を握り直す。

「隊長、右から敵が！」

「李典は弓兵を連れて後方と左を支えてくれ！ 騎兵隊！ 敵の側

面を突くぞ！」

劉・曹・公孫の三軍が号令に従って動く。

臨時の三軍騎馬隊が集結し、こちらを包囲しにかかっている敵を抑えにかかる。

「北郷様っ！」

戦闘に入った隊の中央で、突然、のしかかれた。

「副官さん！？」

「ぐうっ！」

俺の方に飛んできた弓矢を、自分の盾でかばい、公孫贄軍の副官さんがぐらついた。

「大丈夫か！？」

「かすっただけです、敵は押し出されている模様、このままいきましよう！」

「ああっ！」

寄せ集めのような三軍だが、華雄軍という敵を前に、連携してあたり、なんとか敵を後退させていった。

伝令によると、左側と後方も、李典のからくりと李典自身の活躍により、敵を混乱させているようだ。

「華雄は中央にいるのか？ こっちの別働隊にはいないみたいだが……」

劉備軍本陣の方を振り返ると、

ドオオオン！！

と、何かが吹き飛ぶような音がした。

「なんだ！」

「き、騎馬の一部が敵将に！」

「敵将……華雄か！」

「はははっ、その通り！」

ぐるん、と戦斧を振り回し、騎兵隊を二つに分けて、華雄が姿を現す。

「おまえのところの馬を頂いたぞ。やはり、将は馬に乗らなければ

な」

華雄と十数名の敵が騎馬に乗って、こちらにゆっくりと歩み寄ってくる。

こっちの騎馬隊は動けなかった。

並の兵では華雄に太刀打ちなど出来ない。

「今度は知っている顔と名だ。北郷一刀」

「俺は忘れておきたかったよ」

「ふっ！」

斧を肩に乗せて、華雄が笑う。

「首が飛べば嫌でも忘れられるぞ、北郷」

「物騒な子だなあ……」

他の英雄達が女性であるように、華雄も女だ。華奢な体に不似合いな大きな斧を抱えて、さらっと恐ろしいことをいつている。

「斧捨てて、甲冑脱げば十分女らしい気がするんだけどなあ」

「な、何を言ってるんだお前は」

華雄がひるんだ。

じーっと、俺は華雄を上から下までなめ回すように見る。

「いやいや、もったいないなと思ってさ」

「変な目で見おって……」

華雄の甲冑は首、胸、腰、腕と部分部分しか被っていない。これが甲冑ではなくドレスなら、色っぽい淑女にしか見えないだろう。

華雄だけではない、他の子達もそうだ。全員が全員女で、妙齡で、美しいとなれば、もう、こっちとしてはたまらない。戦いづらくてしかたがない。

「……戯言は終わりだ。構えろ、北郷！ 我が一撃を受けきったその力、もう一度たしかめてやる」

「しょうがないな。じゃあ、もう一回受けたら諦めてくれる？」

「ふ……」

華雄は鼻で笑い、

「ふざけるなあああああああ！……」

どんっ、と大地を蹴り、人馬一体となつて襲いかかってくる。

「うおっ」

気圧されて、俺は馬から離れて、ぴょんと横に飛んでそれを避ける。
「なんだ、今度はお前が馬無しでやる気か？」

さっきの状況とちょうど逆だ。

しかし、俺はこっちの方が落ち着いた。馬に乗れるようになってもやはり手足のごとくとはならないもので、地に足がついてないと、とてもまともに戦えるような気がしないのだ。

（剣道みたいに……とはいかないか、馬の高さと武器の違い、これは大きい）

華雄は切っ先を下ろし、脇構えでこちらの出方を窺っている。

（敵の射程距離がつかめない。迂闊にいったら薙ぎ払われるだけか？ いや、スピードならこっちが上だ！）

じり、じり、と距離が詰まる。

足は緊張して、今にも爆発しそうだ。右か、左か、前か、後ろか、華雄が動けば、腕ではなくまず足が動くだろう。

ドクン、ドクンと心臓の音が大きくなる。

ふ、と華雄の斧の先端が小さく浮いた瞬間、

「っ！！」

俺は大地を蹴った。

中段から振りかぶり、斬り下ろす。

「ちいっ！！」

先手を取られた華雄が戦斧の柄でその一撃を受ける。

キン、と鳴って弾ける。

「このっ」

二撃、斬り返し。

「ふっ！！」

華雄は今度は受けながら体をずらし、溜めを作る。

来る！！

即座に後ろにとび、疾風のような円月の軌道进行を避ける。

「ちょこまかと！」

「隙あり！！」

打ち終りを狙って一点集中の突きを繰り出す。

狙いは良かったが、華雄の甲冑の飾りを斬り飛ばしただけで終わった。

「……っ！！ その剣、細い割に、強靱だな……」

「自慢の武器だね」

「……ふん。あとで墓標代わりにしてやる」

「墓を作ってくれるなんて、優しいんだな」

「くっ、なんなんだお前は……」

打ち倒せなくても、時間が稼げれば、騒ぎを聞きつけて応援が駆けつけるだろう。ひよっとしたら、愛紗達が間に合うかも知れない。

ただ それは、相手も分かっている。だから、ここで一息に決めたいだろう。

華雄が改めて戦斧を構える。

重い緊張が体内を揺さぶる。

一撃の対応を間違えれば、臓腑をぶちまけることになる。

「だあああああああっ！！」

「おおおおおおおっ！！」

一合、二合、三合、武器を合わせ、斬り結ぶ。

腕全体に痺れが走り、切っ先が掠めて怖気が走る。噛み締めた歯が痛い。冷たい汗で体が不快だ。

「はぁ、はぁ」

そんなに時間が経ってはいないのに、息が切れる。

「懦弱だな、次で決める！！」

まだまだ元気そうな華雄が勢いよく振りかぶる。

受けられないっ、避け

間に合わず、右腕の皮一枚が削られた。熱が腕を焼く。

「くっっ」

思わず取り落としそうになる刀を慌てて支え、握りを確かめる。大

丈夫。肉も骨も断たれていない。あとは、気力さえ断たなければ、持ち直せる。

いけるのか？

歯の根がかみ合わない。

怖い。

殺される？

当たり前だ。無事で済むわけがない。

俺だって、人を斬ったことがあるし、命令したことがある。

斬ったことがある奴が、なんで斬られないなんていえる？

斬られたくない。

それは俺だけじゃない。

目の前の華雄も。

誰も彼も。

あの悪夢の中の、彼女も

華雄の斧が俺の頭上へと振り下ろされる。

「ぐっ、うっ」

かろうじて鎬で受ける。

だが膂力を受けて、腕の筋肉と足腰に重圧がかかる。

「っっおおおおっ！！」

なんとか圧力を払いのけるが、外見以上に満身創痕になった。

「北郷様っっ！！」

副官さんの悲鳴のような声が聞こえる。

俺の不利が、一騎打ちを見守っている誰の目にも明らかになったその時

の時

ジャーン、ジャーン！！

と遠くで銅鑼の音が聞こえた。続いて、

「か、関羽だああああ！！」

「げえっ！ 関羽っっ！！」

という声上がる。

「ちっ、援軍が来たか！ とっ」とこいつを蹴散らして

脳裏に愛紗の凜々しい姿と俺を呼ぶ声が浮かんだ。

自分の正義を信じ、そして俺や仲間を信じ、青龍偃月刀を振るって戦場を駆ける姿だ。

俺も、彼女のように

「これで、終わりだあああああああ！！」

華雄渾身の一撃が斜め上からくる。

俺は倒れ込むように体を地面に投げ、足で大地をつかみ、下げていた切っ先を一気に空へと斬り上げた。

「……………っ！！！！？」

俺の一閃は華雄をとらえなかった。しかし、華雄の戦斧を真つ二つに斬り飛ばし、戦斧の刃を地に落とした。

「……………え？」

華雄は安心して、先の無くなった柄を見つめた。

俺は華雄の腕をつかみ、馬上から引き摺り下ろす。

そして、首筋に刀の刃を突きつけて

「俺の勝ちだ……………降参してもらえるか？」

顔を寄せる。

華雄は驚愕した顔を歪め、悔しそうに唇を噛み、少しして、

「は、放せ」

「やだよ。放したら逃げるだろ？」

「逃げん……………顔が、顔が近いぞっっ」

「降参してくれる？」

「……………兵を助命してくれるなら、降ろっ」

「よし」

と、顔を上げると、

「うおおおおおおおっ！！　北郷様が、華雄を倒したぞおおおおお

おおおっ！！」

「うおおおおおっ、信じられねええええええええええ！！」

「俺たちの勝利だあああああっ！！」

天地を揺るがすような歓声が上がった。

「な、なんや！ 隊長が華雄を討ち取ったって？」

「え、ええええつご主人様が！？」

戦場の各所で、報が届き、歓声が伝播する。

「なんと！！ さ、さすがご主人様だ……え、本当に、ご主人様本人がやったのか？」

愛紗はちよつと困惑した。

「はわわ、ご主人様すごいです！！」

朱里は信じた。

「凧ちゃん！！ 隊長が敵の大將、倒したらしいのー！！」

「本当か！？ すごいな……私の隊長は」

「凧ちゃん、なんだかそれいやらしいの」

「べ、別に他意は無いつ！！」

凧と沙和は喜び合った。

「あちゃー、鈴々の出番が無くなったのだ……」

「あわわ、私たち挽回できなかつた……」

鈴々と雛里は落ち込んだ。

そこから十数里離れた孫策軍にも、報は伝わった。

「へえ……わずか五千と一千で、華雄を討ち取ったかあ」

孫策は面白そうに唇の端をつり上げた。

「しかも関羽でも張飛でもなく、北郷がやったそうだ。あの男、なにかを隠しているのか」

「そうね。資質はあってもそんな簡単に開花するなんて思えない。でも、事実は事実……ちよつと探りを入れてみないとね」

「ああ……」

「そうねー、よさそうだったら、蓮華とめあわせてみたりしてもいいかもねえ」

「……本気か！？」

「小蓮じゃ小さすぎるし」

「むむむ……」

周瑜は形容しがたい複雑な表情をして黙り込んだ。

さらに離れて、反董卓連合軍集結地点、曹操軍本営

「北郷が、華雄を討ち取ったですって!？」

「はい。信じがたいことですが……」

曹操の幕下、夏侯惇、夏侯淵、許緒、典韋ら武官が勢揃いして、その報を聞いた。

「…… 凧達の報告を聞くまでもなく、公孫賛軍の中枢がなにか判明したというわけね」

「し、しかし、あの男が一人でなんて考えられません! おおかた凧達に助けられて」

「だとしたら、統率力や知力に優れていたということになりそうね」
「ぐ、ぐむ」

春蘭は言葉を飲み込んだ。

「まあ、凧達が帰ってきてから詳しく聞きましょう…… 偵察の成功どころか、? 水関突破の功績まで、別の軍にもってかれるなんて、曹操軍の恥ね」

びくっ、とその場の全員が震えた。

「次は、私たちの出番よね、春蘭?」

夏侯惇は急いで何度も頷いた。

視点を移して反対側、? 水関、董卓軍本営

「まさか、華雄が討たれるなんてなあー、本格的な戦いの前やのに

……」

かくん、と肩を落として張遼が言った。

「……………ここも危険」

呂布が言葉少なに警告を発する。

「呂布どのとねねがいれば連合軍など敵ではないのです!!」

陳宮はぐつと拳を握り頭上にあげる。

「ウチは入ってないんかい……………てか、無茶言っな。軍師やる!」

「うつつ、華雄殿が李? (李力ク) 殿の巫女なんか信じなければ…

…

「てかあいつどこいったんや」

「消えた」

「くううつう、わけのわからないうちに負けるなんて……………」

「いいから虎牢関まで撤退しようや。孫策軍も来てるし、そろそろ連合軍の本隊も来るやる。食糧わたさんように動いたほうが次の戦いに有利や」

「仕方ありません……………では、虎牢関に撤退なのです。ああ、月殿はともかく、メガネになんとはいえはいいやら……………」

「そやなあ……………怒り顔が目には浮かぶわ……………」

董卓軍はとぼとぼと、撤退準備にかかった。

こうして、連合軍対董卓軍の第一戦、?水関の戦いは序盤の序盤で勝負がつき、第二戦、虎牢関の戦いへと舞台を移すことになった

第3話 無銘伝二丁三英雄と一刀の剣（後書き）

この第3話までが書き溜め分になります。

ここからは今から書き始めるため（第4話途中まではもう書いていますが）時間がかかりますので、しばらくお待ち下さい。

恋姫はキャラが多い作品な分、キャラの口調とか設定のチェックが大変ですね。もし、なにかおかしい所があったらご指摘下さい。

第4話 無銘伝三丁虎牢関の同盟（前書き）

連合軍、次なる戦場、虎牢関へ。

行く先に暗雲立ちこめるなか、一刀はどんな行動をとるのか。

そして董卓軍は ？

第4話 無銘伝三丁虎牢関の同盟

華雄を捕縛したあと、俺たち、劉備・公孫賛・曹操軍の偵察部隊連合は、孫策軍と合流し、董卓軍が撤退したらしい？水関へと乗り込んだ。

「……だめね」

？水関の中をあらかた見て回った後、孫策が小さな溜息をついた。

「食料庫も武器庫もからっぽ。あっさり引き上げたぶん、ゼーんぶもってつたみたい」

「あー」

張飛ががっくり肩を落とした。

「じゃあ、ここで補給を待つしかないのか……」

「こんなにはやく陥ちるとは思わなかったからな。仕方あるまい。袁紹や袁術達本軍の補給がなければ、行軍だけで兵が脱落する」

周瑜が二人を宥める。

戦闘だけなら一、二を争う劉備軍と孫策軍も、兵糧にはまったく余裕がない。劉備軍は弱小だし、孫策軍は本拠地からここまでかなり長く遠征している。

虎牢関へと撤退している董卓軍をこのまま追撃するのは無謀ということだ。

「わたしだけでいってみようか？ 逃げる董卓軍の補給部隊ぐらいなら捕まえられるかも」

と、孫策。

「やめろ」

ぴしやりと周瑜が止めて、孫策も強行しようとはしなかった。

「じゃあ、今日一日、ここで泊まることになるな……疲労している兵から休ませていいか？」

俺は孫策と周瑜を見る。

「ええ。うちの兵は見張りでもさせておくわ」

「捕虜の尋問はどうする？」

俺は少し考え、

「んー……そっち主導でやる？ 助命するって約束したから、念のため、そうだな、関羽と鳳統をつける。手荒にはしないであげてね」

「ふむ………約束しよう。では捕虜を選別してくる」

周瑜は頷き、孫策と共に一旦席を離れた。

「……やはり鈍いのか？ 肝心な情報をこちらに握られるかもしれないというのに」

「さあねえ……？ なーんか隠してる気配がするんだけど」

二人は疑りつつ、捕虜を監視している黄蓋の所へ向かう。

孫策の勘はあたっていた。

俺は、董卓軍の将、華雄を生け捕っていたが、それを伝えず、「討ち取った」ことにしていた。

ゆえに、尋問する相手は華雄一人でいい。

捕虜の中に華雄以上に情報を握っている人間などいないのだから。

俺は、愛紗達に前もって用意させていた部屋に入り、中の様子を窺った。

部屋には、関羽、鳳統、楽進、李典といった面々がそろっていた。

4人は形容しがたい雰囲気、一人の女性を囲って、沈黙していた。

「……や、どんな感じ？」

後ろ手に扉を閉めると、ちよいつと手を挙げ、部屋の中央へ歩み寄る。

「どんな感じ？ ではありません！」

愛紗が、口を開くなり激昂した。

「なんで華雄がここにいるのですっ!？」

「あー、うん。愛紗には言ってなかったか。降伏してもらったんだ」

「ふん」

部屋の真ん中で椅子に縛り付けられて、華雄がふてくされている。

「あわわ、孫策軍に伝わらないよう、箝口令がしかれていましたから」

鳳統が補足する。

「情報もひきだせるかもしれないし、黙ってたのは悪かったよ」

「……まあ、そういうことなら……私も別に……でも、なんで……ばかり……」

「ごによごによ、と愛紗は何事かを口ごもる。

「ええと、それじゃあ、華雄」

「なんだ」

「董卓軍について知っていることを話して欲しいんだけど」

「断る」

にべもなく却下です。

「ぷふっ」

李典が思わず吹き出した。

「隊長……もう少し厳しくやらなければ、尋問にならないかと」
楽進が助言する。

「そういうの苦手なんだよ……」

と、俺は苦笑しながら周りを見る。離里と目があった。

「あわわ、わ、私も苦手です」

「だよねえ……こういうのが得意なのは……」

再度視線を回らせる。愛紗と目があった。

「……なんで私を見るのです」

「得意じゃない？」

「……ご主人様がわたしにどういう印象を抱いているかよくわかりましたっ！」

愛紗は目をつり上げて怒り、華雄の正面へと移動した。

「華雄。お前は敗軍の将だ。命を取られても文句は言えない。それがご主人様の慈悲によって救われたのだ……お前に恩に報いる

気はあるか？」

「ふん。押しつけに恩など感じるか。負けたとは言え、古巣を裏切る気など無いわ」

「ほう。意外と忠義の士なのだ。だが、董卓は都で暴政を敷いていると聞くぞ。そんな主にそこまで忠を尽くすのか？」

「……うん？ 暴政……董卓が？」

華雄は眉を顰めた。

「何を言っているんだ？ 董卓は暴政などしていない。むしろ手緩いぐらいだ。宦官共を排除し、清流派を召集して、いまも民の鎮撫の真つ最中のはず……それを貴様らが妨害しているのだろう」

「なに？」

今度は愛紗が眉を顰めた。

楽進や李典、鳳統も同じく。

「やっぱりか……と俺は思った。董卓 月は暴政などしていない。彼女は、騙されて洛陽に入り、いつのまにか利用されていたのだ。そして封鎖された洛陽の外で、偽の情報が流布される。」

董卓は暴君である、と。

「ご主人様、これは……」

さすが、鳳統が事態を察知して、こちらをみた。

「……反董卓包囲網は、誰かが私利私欲のために仕組んだってことか？」

「なっ……」

関羽と楽進が絶句した。

「そ、そんなん誰が……曹操様はちやうでっ！ そりゃ、なんちゆうか、腹黒やけど……」

「真桜……擁護になってない」

「桃香様と白蓮さん、曹操さん、孫策さん、馬騰さんは違うと思います。それぞれ立場は違いますが、連合を煽って利を得るような性格ではありませんから」

「ふん、どうだか……」

華雄がつぶやくと、ギロツ、と楽進と関羽が睨んだ。

「そうなるか……袁紹か？」

「可能性としては一番だと思いますが……」

「そんな頭があるのか？」

全員が沈黙した。

「袁紹さんもまた、利用されているのかもしれない」

「なるほど。それなら納得できる」

愛紗がふむふむと何度か頷いた。

「ただ袁紹の評価低いんだよ……と思わなくてもないが、まあ仕方ないだろう。」

「そうなるか……隊長、私たちはどうすれば？」

凧が困惑した様子で尋ねる。

「ん……そうだな。離里、連合軍を止められると思う？」

「……難しいと、思います」

「なぜだ？ 袁紹とその黒幕はともかく、他の諸将は利用されていると知れば兵をひくのではないか？」

「連合軍はその兵站の多くを、袁紹軍、袁術軍に握られています。」

「ここから撤退するとなれば、兵糧乏しいなかで帰還しなければならなくなります。戦場で失うよりも多くの命が無駄に失われることを、諸将は認めないでしょう」

「兵糧を敵からの略奪に頼っている軍も多い。まだ戦果を上げていない中では、たとえ仕組まれた戦いでも、やらなければならぬということか……」

「なんかこつちが悪者みたいやな……」

「ふん……ざまあないな」

華雄が苦笑する。

今度は愛紗も凧も睨み付けることなく、むしろ肩身が狭そうに唸った。

「とりあえずこれからの方針は、できるだけ袁紹の思い通りにしない、手柄を立てさせない、董卓軍はなるべく降伏させる、そんな感

じでどうかな」

「それでいいと思います。董卓軍の降伏には　その……」
と、鳳統は華雄のほうを見た。

華雄はそっぽをむいたまま、

「まだ董卓軍が負けると決まったわけじゃないだろう……董卓軍が敗勢になつたら、考えてやる」

「……………頼む」

関羽が、頭を下げた。

華雄はそれを一瞥して、居心地悪そうに身じろぎした。

そこに、部屋の外から兵の声が響いた。

「北郷様、孫策軍が捕虜の選別を終了したので、関羽殿と鳳統殿を連れてくるようにと　」

「了解つ。じゃあ、愛紗、雛里、お願いできる？」

「わかりました」

関羽が退出する。

「ご主人様、孫策軍には伝えるべきでしょうか？」

「そうだなあ……できれば孫策軍と協力できればいいんだけど。なにか策はない？」

「そうですね……兵糧の問題を解決できれば、協力できるかもしれません」

孫策軍は荊州からここまでの行軍を、袁術軍に頼っている。だが、孫策と袁術の関係は微妙で、そこに付け入る隙がある、ということだろう。

「雛里の判断に任せるよ」

「は、はいっ！」

雛里はぺこつと頭を下げ、退出した。

「さてと……楽進、李典。2人は張飛と于禁を呼んできてくれる？
交代で休もう」

「はっ。隊長はどうされるのです？」

「俺も適当なところで休むよ」

「了解ー、ほな、凧いこか」

凧と真桜も退室した。

これで華雄と二人きりだ。

「うかつな男だな。捕虜とはいえ、護衛もつけずに……」

「華雄ひとりが捕まったなら、ここで暴れることも考えられるけど、部下も一緒に捕まってるだろ？ 部下の命を気遣う華雄が、いま暴れるとは思えないな」

「ふん……」

「意外と部下思いだよな」

「う、うるさいっ」

顔を赤らめて、縛られた体を暴れさせる。

「で、そんな華雄に質問があるんだけど」

「答えんっ！」

「中身ぐらい聞いて欲しいなー」

「いーやーだっ！」

また、ぷいっとなつぽをむく。

「仕方がないなあ……じゃあ、ちょっと強硬手段をとろうかな……」

「？」

華雄は、俺の言葉の雰囲気気を引かれたのか、こちらを横目で見
た。

わきわき、と手を胸の前で開閉させながら近付いてくる俺の姿を見
て、華雄は小さな悲鳴を上げた。

「な、何をする気だ貴様！」

「ふっふっふ」

わきわき。

この体勢からやることなど一つしかない。

「や、やめろっケダモノ　っ！！　っ、ひっ、ひいひい、やああ
っ！！」

「こちよこちよ」

「ひゃ、やめ、やめろおっっ！！」

脇は縄で縛ってあって固く、指が入らないので、足の裏をくすぐる。
「こちょこちょこちょ」

「ひ、ひいいいい、あ、ああああああ!!!!」
足をばたつかせたくても縛られているのでどうにもならず、壊れる
ぐらいの悲鳴を上げる。

「喋る？」

一旦手を停止して、華雄の顔色を窺う。

頬を真っ赤に染めて、唇の端によだれの泡をつけた乱れ顔。

「っ……………はっ、はあ……………」

肩で息をし、焦点の合わない目を、ゆっくりとこちらに向ける。

「き、聞くだけ、聞いてやる……………」

「ありがとう」

華雄の呼吸が調うまで待ち、改めて問い掛ける。

「この前の戦い……………なんで俺たちの本陣を正確に補足できたの？」

劉備軍は側面から偵察するために罾を張っていた。それを大きく迂
回したのはわかるけど……………」

「……………」

「こつちも馬鹿正直に偵察部隊を出していたわけじゃない。？水関
への経路は毎回変えていたし、偽装だつてしていた」

戦闘後、孔明に訊いて、その点はちゃんと確認していた。なぜ、華
雄が劉備軍の本陣を奇襲することができたのか。それは孔明に訊い
ても分からなかった。

「……………ただの勘だ」

「それは嘘だろ」

孔明、鳳統という二大軍師が考えた備えを、ただの勘で打ち破れる
わけがない。

俺の視線に耐えきれなくなったのか、華雄はちっ、と舌打ちして口
を開いた。

「……………お前達に軍師がいるように、私達にも軍師がいる。それ
だけだ」

「それは……賈馱？ それとも陳宮？」

賈馱は董卓の軍師、陳宮は呂布の軍師だ。

「よく知っているな。だが違う」

「……他に軍師がいるの？」

董卓軍の軍師といえば今あげた二人ぐらいしか知らない。李儒なんかも有名だが、この三国志世界にはいなかったはず……。

「私も名前は知らん。李カクという将が連れていた得体の知れない巫女だ。頭が切れるとかで、軍師として従軍を願い出てきたんだが……」

「巫女？」

「ああ。李カクの奴は邪教にはまっているからな。おなじような巫女がたくさんいる中の一人で、胡散臭い奴だが……進言はそれなりに的を射ていた。ちょうど、お前達の軍が偵察でうるちよろしていたから、叩き潰す手は無いかと尋ねたら……」

「まさか」

「正確に、おまえたちの本陣と罾の位置を地図で示した。なら、試しにつついてみるか、と私が出ることにしたというわけだ」

なんで総大将が出張るんだと思ったが、そこは華雄だから。

「……猪だもんなあ」

「……なんだつて？」

「なんでもないよ」

名前の分からない巫女軍師か……。

正体は今のところ見当もつかない。もしかしたら、この世界における李儒かもしれないし、全く知らない人物かもしれない。

予断の許されない事態が、控えている気がした。

華雄は、「まだ董卓軍が負けると決まったわけじゃない」と言ったが、その通りだ。

董卓軍には、呂布がいて、張遼がいて、賈馱や陳宮、そして名の知れぬ軍師がいる。

俺は次の戦い……虎牢関の戦いに思いを至らせ、唇を噛んだ。

翌日、午前。

昨日の夕刻あたりから続々と到着した反董卓連合軍本隊の諸将が集
合し、軍議を開いた。

「ふああ〜……なぜわたくしがこんな朝早くに軍議を開かなけれ
ばなりませんの」

袁紹があくびまじりで場の空気を濁す。

「七乃お、妾も眠いのじゃー」

袁術もぐずる。

その二人を見て、孫策はいらいらした様子で頭を搔く。

孫策は、全軍が到着した昨日、とつと軍議を開いて今日の朝には
出陣するつもりだった。それが、この二人のせいで遅れたのだ。

「いいから、とつととやるわよ」

曹操が進行役を買って出る。

「河内の韓馥、王匡軍から連絡があつたわ。私たちが？水関を奪取
したことよって、董卓の軍は二分されたとの事。一つが虎牢関に
こもる、呂布・張遼の軍。もう一つが韓馥・王匡たちが黄河を挟ん
で対陣する、牛輔・郭？・徐栄の軍よ」

反董卓連合軍は主に二つの経路で洛陽を目指している。

一つが、洛陽の東から、？水関と虎牢関を突破して向かうルート。
もう一つが洛陽の北から、黄河を渡って南下して向かうルートだ。

「私たちが……いえ、劉備・北郷軍が？水関を早急に陥落させたこ
とによつて、董卓軍は各個撃破ができなくなった。今が好機といっ
ていいでしょうね。連合軍はただちに虎牢関に向かい、董卓軍に圧
力をかけるべきと私は考えるけど……」

曹操は、ちら、とこちらを見、そして袁紹を見た。

「ただちに……って、今からいくんですの？ わたくしたち昨日着
いたばかりですよ？」

「……そもそもまだまともに戦つてもいないでしょう……董卓の軍

程度なら、今日一日で虎牢関まで落とせるんじゃない？」

「おーほっほっほー！ そんなの当たり前ですわ。董卓さんのような田舎者に負ける可能性なんて、マツゲ一本分もありませんわ！」「おーほっほっほ、とまた高笑いする袁紹。

「じゃあ問題ないわね。？水関より虎牢関のほうが洛陽に近い分、設備も部屋も豪華よ。狭い寝台で何日も眠りたくなんて無いでしょう」

「……確かにそうですね」

袁紹は、面倒くさげではあるが頷いた。

「では、雄雄しく、優雅に前進するのでしょうか」

こうして連合軍は出撃することが決まった。

布陣は以下の通り。

先鋒・右翼、曹操軍

先鋒・左翼、孫策軍

中央・右翼、公孫賛、馬超軍

中央・左翼、袁術軍

中央・本軍、袁紹軍

後軍・劉備（北郷）軍、他

？水関の功績があつたため、劉備軍は後方に配置された。

「……」

兵力に乏しい劉備軍としては僥倖だが、俺としてはあまり好ましくなかつた。

戦場の様子が見えにくいし、虎牢関を突破した後、洛陽の董卓……月たちを保護するためには、後ろからじゃ間に合わない。

せめて中央右の公孫賛軍と合流するか……。

と、俺は行軍の最中に、その旨を桃香達に伝えようかと考えていたとき、

「北郷はいるかっ！！」

辺り一帯に響き渡る大声で、呼ばれた気がした。
周囲がざわめく。

……この声、すっごく聞き覚えがあるなあ。

「ここにいるよー」

返事をしないのも悪いと思って、手をあげる。

すると、それに気付いたのか、のっしのっし、と大股で1人の女性が歩いてきた。長髪をなびかせ、よその軍の真っ只中なのに、傍若無人というかんじの武将。

夏侯惇　曹操軍一番の猛将だ。

「曹操様がお呼びだ！　一緒に来て貰うぞ！」

俺の目の前まで来ると、びしっ、と俺を指差してそういった。

「……ええっと」

有無を言わさないご様子。

「待て！！」

北郷隊の脇で備えていた愛紗が、慌てて飛んできた。ちなみに、愛紗が今日は俺の護衛で、鈴々は桃香の護衛だ。一日ずつ交代するようになっていているらしい。

「夏侯惇、貴様、ご主人様をどこへ連れて行く気だっ！！」

「関羽か。今日はお前に用は無い」

「なっ……どこまでも無礼な……！！」

わなわなと愛紗の拳が震えた。

そういえばこの2人犬猿でしたね……まずいな、俺1人で止められるかな。

行軍中は念のため将を分散して配置している。どこかでなにかあっても、即応できるからだ。なので、劉備、張飛、孔明、鳳統はともすぐに駆けつけられる位置にいない。

「曹操様はお忙しい。さっさと行くぞ」

「待てと言っているだろう！　なぜご主人様が曹操の元へいかねばならない！」

「華琳様が北郷を呼んでいるからだと言っているだろう！　馬鹿か

貴様はっ」

「お、お前に言われたくはないっ！」

互いに得物を構え、一触即発となり

「止めるっ、二人とも！」

俺は勇気を出して間に割って入った。

前もこんなことあった気がするな……それで、このあと華琳が夏侯惇を止めて

「おやめなさい、春蘭」

音曲のような、凜とした声が、三人をその場に縫い止めた。

「か、華琳さまっ」

董卓に並ぶ魔王、曹操が、夏侯淵を従えて来着していた。

春蘭は慌てて武器を収める。

それを見て、愛紗も青龍偃月刀をひく。

「私から出向くと言ったのに、なんで呼ぶことになっているのかしら？」

と、華琳は、じっ、と夏侯惇を見る。

「だ、だって、華琳様がこんな得体の知れない男の所に足を運ぶなんて」

「貴様っ、ご主人様になんということをっ！」

「う、うるさいうるさい！ 控える関羽！ この御方をどなたと心得る！」

夏侯惇がぱつと腕を広げ、曹操を示す。

「……………水戸黄門？」

なんかそんなノリだ。さしずめ春蘭秋蘭は助さん格さん。

「……………こーもん？」

夏侯惇が俺の言葉に首を傾げる。

「コホン」

曹操が咳払いした。

「馬鹿騒ぎはここまでよ。春蘭、そして関羽も。これは主同士の見、みだりに口を挟まないように」

「わかった。愛紗、こつちおいで」と、愛紗を手招く。

渋渋、関羽は俺のすぐ横へと移動した。

「それで、どんな用事かな。先鋒の曹操がわざわざ、後方の劉備軍に用事があるとは思えないけど」

「……劉備に用事があるなら、劉備の所に行くわ」

「それは、俺個人に用があるってこと？」

「ええ」

ふ、と小さく曹操は微笑んだ。

思わずドキリと、胸が高鳴る。

「それは 光荣だな」

「？水関突破はうまくやったようね。凧達から聞いたわ」

「ああ。三人にはお世話になったよ」

凧、沙和、真桜の三人は、曹操軍へと戻っていた。華雄が捕虜になつていことは内緒にしてもらったが、その他の情報は自由にさせた。全部秘密にしていたら、凧達が董卓軍と戦いにくだらうと思つたからだ。

「それと、董卓が利用されているらしい、ということも聞いたわ」

「……そうか」

「そんな、雑兵ごときが知るよしもないだろう情報を一体誰から聞き出したのか、興味があるところだけど……まあ、それは置いておきましょう」

「……」

気づいてるよ。絶対気づいてるよ、この魔王。

「連合軍の誰が仕組んでいて、誰が裏で糸を引いているのか……さすがに、いまの情報だけではわからないわね」

「盟主である袁紹が一番怪しいと皆は考えているみたい」

「その裏に誰がいるかは分からないという事でしよう？ 正直な話

麗羽は利用しやすすぎて、誰でもやれそうだけれど……」
と、苦笑する。

「董卓は違つわ。それなりの軍師を抱えている董卓を、ここまでうまく嵌めるなんて、凡百の策士にできることじゃない。それこそ」
につこり、と微笑み、

「私ぐらいじゃないとね」

冷気を孕んだ含み笑いだつた。

俺は一瞬、本当に彼女が謀主なんじゃないかと勘繰つたが、すぐに否定した。

俺は、彼女を信じている。

華琳は、たとえ策謀をめぐらせるときでも、自分の名を隠したりしない。堂々と表舞台にたつて、宣戦を布告し、罨を張り、軍を動かし、敵を打ち破るだろう。

董卓と袁紹を利用して、己の権力を密かに高めるなんて迂遠なことをしたがるとは思えない。

それは孫策にしても同じだ。

「ま、冗談はともかく」

曹操もそれ以上疑わせるようなことはいわなかった。

「袁紹の思い通りには動かない、というのが基本方針みただけ、それなら、軍の最後方に配置されたのは失敗ね」

「ああ。俺もそう思っていたところだ」

「どうするつもり？」

「とりあえず、公孫贄の所へ行こうかなつて」

「ふうん。確かに、中央右なら好位置だし、いいんじゃない」

横の関羽が、何か言いたそうにじつとこちらを見ている。

また白蓮殿のところへ？ と、目で問うているようだった。

「孫策軍には伝えてあるの？」

「いや、まだだ。交換条件があれば、こちらの動きに呼应してくれるとは思つけど。うちの鳳統がいうには、兵糧の問題を解決すれば、協力できるんじゃないかって」

「兵糧なんてどこも余裕がないわ……袁紹と、袁術を除いてね」

袁紹と袁術は、連合の盟主であるという立場と、本拠地からそれほ

ど離れていないということがあつて、兵糧は潤沢である。

「……あるところから拝借しましょうか」

「借りるっていうか、盗む？」

「嫌な表現ね……幸い劉備軍は後ろにいるからとりやすいわ」

「じゃあ、劉備軍が袁紹、袁術の兵糧をもらつて」

「左の袁術側からは通れないから、右から私の軍と、孫策軍に流しましょう」

「わかつた。右の公孫賛には俺から伝えて……その、馬超にも協力を仰いでいいか？」

別の三国志世界の記憶だが、翠　馬超は華琳を親の仇としてみている。今は、多分大丈夫なはずだ。

「馬超　涼州の雄、馬騰の娘ね。いいでしょう」と、華琳は即断した。

「それじゃあ、ここは劉備に任せて俺は一度公孫賛軍に」

「ちよおおつと待つたあああ!!」

1人の女が、そこに割り込んできた。

大きな胸を弾ませて、大陸随一の大器が1人。

劉備軍の主、劉玄德が張飛、孔明、鳳統の三人を連れてただいま参上、である。

「ぽかん、と曹操が小さく口を開けてそちらをみた。珍しい表情だった。」

「たとえば味方の曹操さんでも、ご主人様を勝手に連れていくなんて許しませんからっ!!」

どん、と効果音が付きそうな迫力で、桃香は啖呵をきる。

どうやら北郷隊の動揺を聞きつけて、皆集まってきたしまったらしい。

しかし。

「と、桃香さま……」

慌てた様子で関羽が説明に走った。

「え？　協力？　曹操さんと？　それでいまからまた白蓮ちゃんの

ところへ？」

「ごめん。あとで伝えようと思ってたんだけど」

俺は頭を下げて謝るが、桃香は半ば聞いていなかったようで、

「……また……ご主人様がどこか行っちゃう」

と、呟いた。

そして、何かを決断したように、胸に手を当てて、

「私たちも行くよっ！ 後方にいてもやることはないもん！」

「えええええええええっ！！？」

劉備の言葉に俺が驚いている間に、

「はわわ、では影武者を立てて桃香さまを隠します！」

「あわわ、兵が少なくなるので、旗を多く立てて偽装します！」

「この場は簡雍、糜竺、孫乾、馬良、徐庶にまかせる。本陣周囲は敵に警戒し、他軍に様子を窺わせるな！」

「じゃあ、鈴々達は変装するのだ！」

あれよあれよというまに事が決まり、絶句して立ち尽くす俺に、
「…………… 大人気ね。ま、いいんじゃない。兵糧が円滑にまわって

くれば何も言わないわ。それじゃ、また後でね」

曹操は呆れたように一声かけて、立ち去った。

俺はそれに生返事しか返せず、慌ただしく移動の準備を開始した5人を、見守るだけだった。

しばらくして、俺たちは公孫釐のところへと赴いた。

「おお、北郷！ よく来た、な……………？」

白蓮は星とともに俺を出迎え、そして、目を見張った。

俺の後ろには、桃香達がいるのだが……

「……………と、桃香、だよな？」

「しーっ！！ 白蓮ちゃん、声が大きい！」

その恰好は、いつもの服の上からマントを羽織り、色つき伊達眼鏡を着用するという、致命的に怪しいものだった。

「私たちは今ここにいないことになってるの！」

「はわわ、そうなんです。説明しますと」

孔明がかくかくしかじかと経緯を語る。

「……で、全員で来ちゃったと……」

「ぷつくつく、主は好かれていきますな」

星はおかしそうに相好を崩した。

「あーっ！！ 星がこんなところにいるのだ！」

「久しぶりだな、鈴々。愛紗や桃香さま、朱里に離里も……ん？

そちらは？」

星は愛紗と鈴々に挟まれた女に視線を向けた。

女は居心地悪そうにしながら、口を開いた。

「……葉雄だ」

「新しい仲間か？」

「そんなところ」

葉雄。その正体は華雄である。

董卓軍降伏の鍵となるかも知れないため、連れてきた。

戦いの混乱で脱走する可能性はあるが、部下が？水関で捕虜として

捕まっているため、逃げることはないだろうと踏んだ。

「で、食糧を曹操軍に運べるようにすればいいんだな？」

「ああ。結構大量になると思うから、馬超軍にもお願いしに行くよ」

「馬超か。あいつなら頼りになるだろうな。頭は残念だが」

「面識があるのか？」

「まあ少しだけな。涼州で反乱が起きたとき、私も参戦したから」

「そうなのか」

「馬超に会いに行くなら私も行く……桃香達は留守番な」

「えええええ！？ どうして！！？」

桃香や鈴々が不満げに口を尖らせた。

普段なら可愛い仕草だと思いが、怪しい恰好をしている現状、
なんだか笑える光景になってしまっている。

「その恰好で馬超にあってみろ！？ 変人扱いされて、最悪門前払

いだ！」

「うう……」

「たしかにそうなのだ……」

見た目に自覚はあるようですごすこと引き下がった。

「ふむ……」

その様子に星は何か思うところがあるようで、

「あの仮面が全員分有れば……おいしいな」

などと、1人悔しがっていた。

「？水関での活躍、帰ってきた兵達に聞いたぞ」

馬超軍への移動中、白蓮は自分のことのように、嬉しそうな声で言った。

？水関を占領した後、互いに忙しくて、白蓮と会う機会がつかれなかった。兵を貸してくれたことへのお礼も、伝言で届けて貰った。

「公孫贇軍や曹操軍の兵のおかげだよ。皆、よく戦ってくれたし……あ、そうそう、白蓮のところの副官さんには助けられたよ。俺に矢が飛んでくるのを、盾でかばってくれた」

「公孫越が？」

「ん？ 家族なのか？」

「ああ、いとこだ……ふうん、あいつ一刀が華雄をどうやって倒したか身振り手振りで話してくれた割に、自分のことは何も言わなかったけど……そうか。あとで誉めておいてやろう」

「そうしてやってくれ」

そういえば、白蓮にも易京城の戦いのかばわれたな、と俺は思い出した。

いつかちゃんと恩返ししないと。

どんな形ですべきかな……。

……べ、別に聞でどうしようなんて考えてないんだからね！

「白蓮殿！ 主！」

先に馬超軍に来訪を告げにいった趙雲が戻ってきた。

「おお、どんな反応だった？」

「二つ返事で、歓迎すること」

「そうか。一刀は馬超たちのこと知ってたっけ？」

「ん、まあ、少しだけね」

本当は真名どころか性癖まで知ってますが。

俺は馬超と馬岱、二人の顔を思い浮かべた。名前の通り、ポニーテールの少女たち。馬超は、連合軍の大本営でちらつと顔を見たが、ちゃんと正面から接するのは初めてになる。

「嫌な奴じゃないよ。少なくとも曹操や孫策や麗羽たちみたいなのじゃない」

白蓮の中でその三者は同じカテゴリーらしい。あんまり関わり合いになりたくない連中ということだろうか。白蓮は太守という立場があるから、個人的にどうこうというより、勢力的に近付きたくないという意味もあるだろうが。

「見えてきましたな。馬の旗と、涼州精鋭騎馬部隊が……」
馬超率いる、馬騰の軍。

涼州において異民族、五胡と戦い、時に混じり合い、中原とまったく異なる様相となった軍だ。数においては小勢だが、質の平均値はどの軍よりも高い。

涼州の英雄、馬騰こそ西の異民族に備えていて参戦していないものの、長子馬超は少しばかりの策などものともしない勇猛さがある。

……でも、よく考えてみたら、董卓軍も涼州兵なんだよな……
……賈馱に陳宮もいるし。大丈夫かな、翠。

できれば力になってやりたいが。

「北郷殿、公孫贛殿がお見えになりました！！」

馬超軍の集団の一端にさしかかると、馬群が綺麗に開かれて、道を作ってくれた。

「……さすが、統制が取れてるな」

白蓮が感心して、白馬の上で心なしに背筋を伸ばした。

「おーい！」

騎兵隊が左右に並ぶ道の先で、少女が手を挙げてこちらを呼んでいた。

「お、馬超かな？」

「こちらも手を挙げた方がよいですか」

「………というか、その前にあっちがこっちに来るみたいだけど、だんだん馬影が迫ってくる。」

「速いな。白蓮と同じか、それ以上」

気付けばもう目の前で速度を緩め、停止していた。

「とっ」

びょん、と翠が馬から下りる。

俺たちもそれにあわせて、下馬する。

「よっ、白馬長史、それと、北郷……でいいか？」

「ああ。それでいいよ」

「私は良くない。その名で呼ぶなといつも言っているのに……」

「ははっ、悪い悪い」

馬超は悪びれた様子もなく、快活に笑う。

「ん？」

馬超が来た方向で砂塵が上がっている。馬超と似たシルエットの騎駆けは、やはり馬超と似た雰囲気での動作で

「お姉様ああー！！ たんぽぽを置いてかないでよー！！」

いや、ちよつとだけ荒い感じで駆けてきて、抗議した。

「たんぽぽが遅いんだよ。ほら、ちゃんと挨拶しろっ」

「はあーい！」

尻尾のような髪を揺らして、ぺこり、とお辞儀する。

「こんにちは、伯珪さん、と、えーっと、天の御遣いさま？」

「ああ、そういえば天の御遣いなんだっけ？ よくわかんないけど」

「なんか噂になってたよー、天の御遣いさまが現れて、劉備軍にい

るーって。やっぱりそうなんだ？」

「ああ……うん、一応そういうことになってるけど。できれば名前
で呼んでくれるとありがたいかな」

正直面映ゆい。

「じゃあ、北郷さん？」

「それでいいよ」

「はーいつー！」

「はあ……悪いな、北郷。引っ掻き回して。こいつは馬岱。わたし
の従妹だ」

「そっか。よろしく、馬岱」

「よろしくー！」

と挨拶を交わしあい、本題に入る。

「曹操軍に兵糧を？」

「ああ。続いて孫策軍にも流すかもしれない」

「そりやまた、大胆なことするなあ……まあ、袁紹達からなら、問
題ない気もするけど」

涼州の姫も、袁紹には容赦がないようです。

「あたしのところは、兵が少ないからそれほど兵糧は必要ない。そ
のかわり、武器とかの予備が足りないんだ。できれば、まわして欲
しいんだけど」

「ああ。一緒に持ってくるよ」

「助かる」

「いや、こちらこそ……それじゃ、よろしく頼むね」

「ああ！」

馬超が踵を返す直前、俺は声をかけた。

「それと 個人的な頼みがあるんだけど」

一旦公孫贛軍に戻り、曹操軍を経由して孫策軍の元へ赴くため準備

している最中。

「本当に行くのか？ 桃香」

白蓮が心配そうに声をかけた。

「うん。劉備軍の要請としていくんだもん。私が行かなきゃ」

桃香はさすがに怪しすぎた色眼鏡を捨てて、そのかわり髪形を変えてついでくることになった。長い髪を三つ編み巻きにして、出立の準備は完了したようだった。

「じゃあ、行って来る。雛里、鈴々、星、行こう」

軍師として孫策軍共闘策を練っていた鳳統、護衛として鈴々と、星もついてくることになった。

「あいつは半分劉備軍だからな……というか北郷軍か？」

特に異論はないのか、白蓮はそれを見送った。

曹操軍の本陣に着くと、曹操本人と護衛の夏侯惇、そして桂花……軍師である荀？と一緒に孫策のところへ行くことになった。

「やっぱり、曹操が直接交渉するぐらいの相手なんだな、孫策は」

「ええ。そっちだってあなたと……あれは劉備よね」

俺と星の影に隠れている桃香を一瞥する。

「うん……なるべく目立たない恰好にしたんだけど、どう？」

「いいんじゃない？」

特に興味もなさそうに、華琳は言った。

「ところでさ　なんか俺、睨まれてるんだけど、何か悪いことしたかな」

曹操の隣、桂花の方からすごいプレッシャーを感じる。

春蘭も、俺が華琳と話していることに対して、あまり愉快そうではないが、桂花ほどではない。

「さあ？　あなたの胸に聞いてみたら？　覚えがないなら、堂々としていればいいのよ」

「そんなもんかな……」

「主はある意味女の敵ですからな」

「女の敵って、どういことなのだ？」

「うむ、それはだな……」

「そこ！ 説明しなくていい！」

過去の記憶を呼び戻してみると、桂花は確かにあんな性格だった気がするので、華琳の言うとおり堂々としていることにした。

「孫策軍が見えてきたわね」

「ああ…… 本当だ、真っ赤な軍勢が」

真っ赤。

血の色。

それは夕暮れの、あの、地獄の色。

「っ！」

一瞬、立ち眩みがした。

こっちに来て以来、あの悪夢は見えていないというのに。

「……どうしたの？ 怖い顔をして」

華琳が、怪訝そうな顔でこちらを見た。

「えっ？ あ、ああ、いや。なんでもない。ちょっと、緊張しただけだ」

静かに深呼吸して、強張った表情をほぐす。にこやかに、とはいかないが、普通の顔に戻す。

「別に敵のところへ行くわけじゃないんだから、しっかりしてもらわないと困るわね」

「そうだな。これから、虎牢関を攻めようっていうんだから、これぐらいこなさないとな」

「ええ。あなたの相手は難攻不落絶対無敵七転八倒虎牢関であって、孫策じゃないわ。今のところはね」

「……なんかすごく物騒な四字熟語の関門だな」

華琳は華琳なりのやりかたで俺の緊張をやわらげようとしてくれたみたいだ。

そんな会話をしているうちに、孫策軍と接触し、本陣へと通された。本陣には、孫策と周瑜だけでなく、何十人という将、軍師、護衛が揃っていた。

宿将である黄蓋をはじめとし、それぞれ一騎当千の力を身に纏った將軍達が、こちらを観察している。

何も知らないままだったら、ここで怯んでいるところだが、俺は幸い過去の記憶があったので、むしろ、懐かしくて、ちよつとだけ泣きそうだった。

特に、陣の片隅でこちらをじつと睨め付けている蓮華……孫権の顔を見つけたときは、思わずにっこり微笑んで、手を振ってしまいうだった。

「足労痛み入るわ、曹操殿、北郷殿。といつても、同じ先鋒の曹操殿はともかく、後方の劉備軍がどんな用事でこちらに来たのかはよくわからないけど」

孫策は、とりあえずの儀礼をこなして、こちらに着席をすすめた。

「……単刀直入に言えば、協力の申し出だよ」

腹の探り合いを拒否して、俺は開口一番そう言った。

「協力？」

「ああ。袁紹の思い通りにさせないためのね」

本陣の、陣幕の中が少しざわめいた。皆の視線が俺1人に集中する。

「袁紹の……どういうことかしら？」

俺は、反董卓連合のからくりを説明する。

「……誰かが、董卓を敵とするように仕向けた、か。その可能性もあるとは思ってたわ。強かな董卓たちを、まんまとのせるほどの奴が見あたらなかったから、ありえないとも思ってたけど……黒幕、か」

「ああ。連合軍の中にいるかも知れないし、外にいるかも知れない。どっちにしても、袁紹に功績を立てさせることも無いと思うんだ」

「……袁術と縁のある私たちが黒幕とは、考えないのかしら？」

「無いとはいわないけど。できるだけの顔ぶれが揃っているしね」

周瑜や陸遜がいれば、可能だろう。

「ただ、できないんじゃないかと、やらないと思ってる」

「……そう。なんかよくわかんないけど、信頼されているのかしら

「？」

「袁紹や袁術よりは」

「ふふっ……それ、すっごく微妙」

孫策は失笑した。

「では、協力の内容を聞きましようか。返事はそれからよ」

「わかった。鳳統」

「は、はいっ！」

俺は雛里を呼び、計画を開陳させた。

「　という形で、糧食と武器を確保し、こちらから　」

兵站に関する細かい点は周瑜と呂蒙が応じた。

「ふむ、これなら、十日は維持できるか。曹操軍との割り振りは

「

「こちらは余ってはいないけれど、急を要する状態ではないわ。だからこちらの荷駄は往復させて　」

それに苟？と華琳も混じって、細目を詰める。

「ねえねえ、北郷」

「え？」

いつの間にか孫策が、会議の内容に聞き入っている俺の後ろに回って、肩をつついていた。

「紹介したい子がいるんだけど、来ない？」

「へ？」

「軍議は軍師に任せてさ」

「いいのか？」

「大丈夫よ、信頼する軍師だし、そっちもそうでしょ？」

「まあ、そうだけど」

「でしょ。はい、こっち来て」

背中を押される。

押されるままに陣の中を移動し、ひとりの少女と対面する。

孫策と同じ色の肌、髪、そして蒼い瞳と、その奥に見える火。孫策が美女なら、彼女はまだ美少女。育ちきる前の、萌芽を思わせる雰

困気は、未完成でも、英雄のそれだった。

孫権。孫仲謀。後に孫呉の皇帝となる人物。

蓮華だ。

「姉様？」

目を見開いて、俺と姉を交互に見る。その表情は当惑の色でまっていた。突然やってきて、見知らぬ男をつきだされては、仕方がないだろう。

「北郷よ、蓮華。北郷、こっちは私の可愛い妹、孫権」

「あ、ああ……劉備の所の。孫仲謀だ。よろしく頼む」

「よろしく、孫権。俺は北郷一刀」

と、手を差し出す。

「……………その手は？」

「あれ？ 握手って、こっちじゃ挨拶じゃなかったっけ？」

「ん……………そういうことか。では」

蓮華は差し出された手に、自分の手を重ねる。

握り合う手と手。一回り小さな手を、丁寧に包むように握る。

「ん……………」

ピクツ、と蓮華が身じろぎした。

力を入れてしまったかと、握り直す。今度こそは、と、優しく。

「あ……………」

ちよつと良かったようで、蓮華も、きゅっ、と握りかえしてきてくれた。

少しの間そのまま置いて、やがて、どちらからともなく放した。

ふと、蓮華の頬に、少し赤みが差していることに気付いた。

多分俺も、紅潮しているだろうな、と思った。

「うふふふふふ」

にやにや、と孫策は笑う。

お見合いを成功させた、仲人のように。ここからは若い二人に任せ
て　とか言いそうだ。

「ね、姉様、軍議にもどらなくて良いのですか？」

「あら？ 短時間だったのに、もう終わったのかしら。軍師が優秀つても考えものね。ごめんなさい一刀、戻りましょ」
「う、うん」

名残惜しいが、戻ることにした。

蓮華はそれを見送り、一刀に握られた手を、見つめた。

「蓮華さま？ どうかしましたか？ 北郷が何か」

近くで護衛していた甘寧が、声を掛ける。

「いえ……なにも、なにもないわ」

まだ体温を感じる手を握り、顔を引き締める。

あいつの手で、母様を思い出すなんて………どうかしている

蓮華は、軽くかぶりを振り、懐かしさと愛おしさを、同時に振り払った。

評定の場に戻ると、大体のことは決まり、あとは主同士の決断のみが残されているということが伝えられた。

「……どんな感じ？ 劉備軍の軍師は？」

小声で雪蓮は冥琳に問う。

「こちらの兵の数、兵糧の残量まで、適確に把握している様子だ。

こちらがこちらを知っている程度に、あちらはこちらを知っている」

「厄介ねえ………どうする？ あえて、拒絶するのも手だけだ」

「そうになると、袁術に頼むことになるが」

「それはそれで嫌よね」

「………お前の勘にまかせる」

「なによ。私だってちゃあんと考えてるんだから！」

「はいはい」

短いやりとりを終えて、孫策は俺たちと向き合う。

「この内容なら協力してもいいけど、ひとつ、劉備軍に対して疑問

があるわ」

「……なんでしょう？」

鳳統が不安げに尋ねる。

さすがの鳳雛も、小霸王の威風には気圧されるらしい。

「劉備軍は？水関で功績を立てた。それゆえこの戦いでは最後方という位置にある。？水関ではさつさと敵は引き揚げたみたいだけど、虎牢関ではそうはいかないわ。敵はここを抜かれれば洛陽を取られる。だから、激しく抵抗するでしょうね」

「はい……将は同じでしょうが、？水関以上の兵力をもって抗撃してくることは確実です」

「そう。だとすると、先鋒の私たちや、曹操軍はその矢面に立たされることになる。負けはしないけど、疲弊はするでしょうねえ？」

「……そうだな」

「そうでしょう？ 董卓軍の将の実力には詳しくないけれど、難攻不落絶対無敵七転八倒虎牢関に苦戦することは十分考えられる」

「……それ、言わなきゃいけない決まりでもあるのか？」

朱里も虎牢関をそう呼んでいた気がする

「そのあと、どうにかこうにか私たちが敵の勢いを弱めて、それから」

孫策はこちらを探る口調で、

「後ろにいる北郷軍が、私たちが戦って得た好機をもって、虎牢関へ押し寄せる……という筋書きが考えられるわね」

「そんな」

俺が口を開いた刹那、

「そんなことありません！」

いままで口を噤んで控えていた劉備が、大声を上げた。

「え……あなた……もしかして、劉備？」

孫策は驚いた顔でかたまつた。

気付いてなかったんかい。

「私たちは、漁父の利を得ようなんて考えていません！ 邪な気持

ちでこんな大きな戦いを起こした誰かに、抗いたいだけです！ 本当は、騙された董卓軍の人たちも救いたいけれど、それができないことはわかっています。だから、せめて……」

桃香は一気にまくしたて、一息ついて、

「せめて、私たちが勝利を得て、二度とこんなことが起きないようにしたい。それだけなんです。だから、だから虎牢関で戦功を掠めようなんて思いません」

雪蓮は、理想を語る桃香を冷ややかに見つめながらも、心の奥底で、火がともった気がした。

「……………誓約できる？」

「はいっ！！」

桃香は即答した。

「では、虎牢関での功は、孫策軍か、曹操軍が得る。いいわね」

桃香は頷く。

「曹操軍もいいわね？」

蚊帳の外にいた華琳も、頷く。

「ええ、もちろん。どちらが多く取るかは、その場の流れにまかせましょう。ただ、互いに競い合うことはあっても、妨害はしない。それでいい？」

「ええ」

そして、三人は立ち上がり、誓約した。

「ここに、三軍の盟約は成った。天地神明に誓い、各々の誇りをもつてこれを履行する」

すっ、と孫策から差し出された手に、劉備、曹操の手が重なった。

（俺は……………俺は、すごい光景を見ているのかもしれない）
後に魏呉蜀をそれぞれ建国する勢力が、一致団結した。

三雄の会盟……………いや、あえて、言い直そう。

これは、三国の同盟だ。

心が奮い立つのを感じる。

？水関から出発したときの漠然とした不安は、雲散霧消していた。

たとえ、呂布と張遼が相手でも、負ける気がしない。
俺は拳を握り、武者震いを密かに抑えて、この場に立ち会えた幸運
を噛み締めていた。

洛陽、朝議の間にて

「月っ　！」

眼鏡をかけたひとりの少女が、小走りで入ってきた。

「詠ちゃん」

それを迎えた少女は、貴人の服装をした、小柄な娘。
彼女たちは、董卓軍の賈馱と、董卓その人である。

「どうしたの？　連合軍に何か動きがあった？」

月は親友のただならぬ様子を見て、ああ、これは、きっと悪い知らせだ、と思った。

けれど、詠は、なんともいえない複雑な表情をしていた。

もし、董卓軍が負けてしまったなら、もうちよつと悲しそうな、あるいは怒り顔をするだろう。

「良い知らせと悪い知らせが一つずつ……いえ、もしかしたら、悪
いだけの知らせが一つあるわ」

「……わかった。悪い知らせから言ってくれる？」

「黄河に進軍した、牛輔、郭？、徐栄たちが死んだわ」

「っ！！」

覚悟はしていた。不利な状況にある董卓軍。仲間や知り合いが死ぬのは、覚悟していたはず。だが、月は、悲しみに涙が溢れそうになった。しかし、泣くのは堪える。まだ、泣いてはいけなと思った。

「良い知らせ……の方は？」

「……その牛輔たちが対陣していたはずの、敵側の将、韓馥、
王匡も死んだわ」

「え……!?!」

戦場だから、敵味方両方の軍の将が死ぬのはありえることだ。だが。

だが、それでは、互いに全滅ではないか。

「洛陽の街の隅っこに、大きな井戸があるのは知っているわよね。今は使っていない」

「……え? う、うん」

突然の話題の転換に、月は戸惑った。

「そこに、五人の死体が沈んでいたわ」

「っ!? そ、それ、まさか」

詠はこくりと首肯した。

「そう。牛輔たちと韓馥たちよ」

月は立ち上がり、小さく震えた。

「そんな、そんなことって」

「その上……」

賈馱は、言葉を重ねた。

「その場に偶然居合わせた男の医者が言うことには、韓馥と王匡の死体は、牛輔たちの死体よりも数日前のもの、らしいの。つまり、牛輔たちが韓馥たちを迎撃しに、出陣したときにはすでに」

「し、死んでいたの? でも、それなら、黄河の対岸にいた連合軍は一体誰が率いて」

「わからない……牛輔たちが率いていた董卓軍も行方がわからないわ」

「どこへ……どこへいったっていつの?」

董卓は、カチカチと、齒を鳴らした。かわいそうなぐらい、震えている。

「月……」

賈馱はその体を抱きしめた。

月は私が守る。必ず。そんな決意を持って、強く、抱きしめた。連合軍も、わけのわからない事件も、月に近付かせるものか。

暗雲の中の、悲愴な決意。

「黄河の、牛輔たちが布陣したあたりと連合軍がいた地点に偵察の兵を送るわ。私は、念のため、虎牢関の様子を見てくる。ヘッポコの華雄のかわりに胡軫を連れて置いてくる。李力クと李儒には、洛陽撤退の準備をさせるわ。月、なるべく表に出ないで。子飼いの護衛たちを増やして配置しておくね」

「うん……詠ちゃん。詠ちゃんも、気をつけて」

「ええ。様子を見たら、すぐに戻ってくるから」

詠は、忍び寄る悪夢に足を取られるような気がして、重くなった足を、ぐつ、と踏み出して、駆けた。

月の視線を、背中に感じながら。

虎牢関へと。

戦の待つ、虎牢関へと。

第4話 無銘伝三丁虎牢関の同盟（後書き）

本当は虎牢関の戦いが終わるまでを書きたかったんですが、とても入りきらないので次の話へ。

多分、次が一区切りになるかと思います。

第5話 北郷伝 くその名は混沌く (前書き)

ついに、連合軍は董卓軍との本格的戦いに入る。
一刀は、手を伸ばし、月を救うことができるのか

第5話 北郷伝 くその名は混沌く

董卓軍、虎牢関本営

「敵の布陣は三段、一段目が孫と曹、二段目が袁紹中心、脇に袁術、公孫賛、馬超。三段目が劉備含む残り全部や」

敵の偵察を終えた張遼が報告した。

「なかなか堅い布陣ですっ……………！」

陳宮が険しい目付きで、地図上に敵の配置を示す駒を置いた。

「ああ…………孫策と曹操を前に出すだけなら考え無しの力任せのようやけど、劉備を後ろにつけたのが周到やな」

「劉備、強い…………？」

呂布はいつもとおなじような口調で、劉備を表している駒をつついた。

「強いで。劉備本人はともかく、関羽が強い。関羽いうたら、あれや、美髯公や。美しい黒髪で青龍偃月刀を振るうっちゅう」

「そんな話は今どうでもいいのですっ！！ 劉備軍には、関羽、張飛といった将がいるのです。曹操や孫策の軍よりは小粒ですが、簡単には、奇襲は通じないと思われます」

「華雄を討ち取ったっちゅう、北郷もいるしな…………」

「後ろに回り込んで、袁紹を狙うという手は使えそうにないのです」

「かといって、正面は孫と曹の二枚看板……………きつついなあ」

張遼と陳宮が頭を抱えていると、

「案ずることはないわ」

眼鏡をキラリと光らせて、賈馱が登場した。

「おお、来てたんかい」

「ええ。胡軫も連れてきたわ。華雄のかわりになるかはわからないけど」

「胡軫？ 牛輔たちのところに行かせる予定やなかったか？」

「……さすがに、こつちの数が少ないかと思っただから」

賈馱は、一瞬、牛輔たちが死んだことを伝えようか迷ったが、やめた。

混乱させるだけだろう、と判断した。幸いというべきか、黄河周辺に敵の姿は 味方の姿も 無かった。わかっているのは、董卓軍の牛輔たちと、連合軍の韓馥たちが死んだという事のみなのだ。

「……？ まあいいのです。たしかに、張遼と恋殿の二人じゃ、動くにしても、どっちかが虎牢関に残って、どっちかが攻める形にしかできないですし、もうひとり将がいるのは助かるのです」

「せやけど、どう連合軍を攻めるんや？ そこはまだなんも光明がないで」

「いくら数が多くて、質が高くても敵は連合軍。寄せ集めよ」

陳宮が並べた駒を、賈馱が動かす。

「どんな頑丈な糸でできていても、縫製がどんなに堅牢でも、穴はあるわ。問題は、どのようにその穴を広げ、活路を開くか……穴の位置を示すのはボクと陳宮がやる。広げて開くのは、あなたたち二人の仕事よ」

と、恋と霞の二人を見やる。二人はこくり、と頷いた。

「目立つ穴はまず、ここ。孫策軍と曹操軍のあいだ」

「たしかにそこなら、連携の取れていない軍同士、対応に困るかも……でも、それは奴らも気づいているはずなのですっ」

「ええ。だから罫を仕掛けるわ。こんな感じに 駒をずらし、かちりかちりと、展開させる。」

「 足止めたあと、恋と霞が突破。狙いは中央、袁紹の軍よ。首を取るまで行かなくてもいい。揺さぶりをかけて」

「 囲まれてまうんやないか？」

「 神速を誇るあんたのセリフとは思えないわね。まず、張遼が前曲、呂布が後曲。最速で敵陣を叩き、出て行くときは逆に、閉じようとする敵部隊の門を呂布が力づくでこじ開けて脱出しなさい」

「力任せな策なのです」

陳宮が呆れたような声を出す。

「それに、袁紹の首を取れなかったら、警戒されて、袁紹軍は後ろに退いてしまうのです。そうしたら、こちらが不利になるのは必定
つ」

「袁紹軍は数が多いわ。それが一斉に後ろに退いたら、陣形に大きな歪みができる。次はその穴を突けばいい」

賈馱はすり下がった眼鏡をあげ、駒の配置を元通りにした。

「とにかく、簡単には虎牢関にとりつかせないこと。時間を稼げば、遠征している敵は勝手に消耗していくわ。大軍の勢いをまず一撃して殺いで、持久戦にもちこむ。いいわね？」

「……………異論はないのですっ」

陳宮はしばし考えて、頷いた。

「ウチもええよ。こもって戦い続けるより、兵の士気も維持しやすそうやし」

「恋は？」

恋は黙って、こくりと、首を縦に振った。

「……………もし、不利になって、撤退することになったら、洛陽じゃなくて長安を目指すこと。すでに継馬を各所に集めてあるわ」

「民を長安に移してるうちゅう話しやっただけど、月も行つとるんか？」

「……………まだよ。ボクはとつと遷ったほうがいいって言ったんだけど、都にはまだ月を信じて残っている人たちがいるの。それを見捨てたり出来ないって」

「あちゃー……………月らしいっちゃ、らしいけど」

「メガネ……………勝算は、どれほどと見積もるです……………？」

「……………ここでの戦いに限定するなら、2、3割」

「ははっ、わりと高いんやな……………」

？水関から虎牢関へ退き、ある程度兵の数は揃った。それでも、敵の数は数倍だ。

そして質も、同等かそれ以上。

「まあええ。詠はとつと引き返して、撤退の説得に戻り。ウチらは連合軍に挨拶して」

「ボクも緒戦だけは見てから帰る。もし、最初から駄目なら、説得の暇はないわ。強制的に全員撤退。なりふり構ってられないわ」

「そうかあ、それじゃ」

「はじめる？」

恋がいつのまにか方天画戟をかかえて、佇んでいた。

穏やかな目に、深紅の戦意が宿っている。

「やる気やな……行くでしょうか。陳宮もええか？」

「いつでもいけるのですっ!!」

三人は互いに頷きあい、外へ続く出口へと向かった。

「……………気をつけて」

戦いに赴く仲間の背中に、詠はつぶやいた。

届くか届かないか微妙な声量だったが、張遼が、ぐっと拳を握って上にあげ、返答した。

詠はそれを見送り、珍しく、武運を祈った。

「詠、様子がおかしい」

恋が眉をひそめた。

「たしかに、なにか、変だったのです」

「いつもはもつと強気な口調で命令しとるのに、妙にしおらしいというか……不気味やったな」

三人は虎牢関の外に出、馬に跨り、率いる兵達をまとめる。

「勝てば、全部元に戻る」

「そやな。月も詠も、元気が一番やっ」

「……………メガネはあのままでもいいような気がするのです」

董卓軍、虎牢関防衛の七万のうち、半分が動き始める。

「お前らあつ!! 連合軍に一発ぶちかましにいくでっ!!」

「陳宮隊っ、軽騎兵を外側に、中に工作隊をひそませて前進するのですっ!!」

「全軍、前進つ」
出陣。雄叫びと共に、はじまりのはじまりを告げる。
血を流す前の血のたぎり、兵達を戦場へと突き動かす。
戦場へ、戦場へ、と。

先鋒・右翼、曹操軍、本陣

「斥候より連絡つ、董卓軍が虎牢関より出陣、前方に展開している
とのことですよ！」

「へえ……虎牢関に頼らず、寡兵を野戦に出す、か」

曹操は、報告を聞いて、ふむ、と唸った。

「畏でしょうか」

荀？がちら、と主のほうをみる。

「陽動作戦で、こちらを仕掛けに導くつもりかしら」

「仕掛け……畏か、伏兵か？」

「伏兵？ どこかに董卓軍が隠れているというのか？」

夏侯姉妹が揃って、華琳の傍で警戒を強めた。

「可能性はあるわね。でも、私や孫策が前に出ている限り、それに
引つ掛かることはないといっているでしょう」

「では、袁紹や袁術が標的でしょうか」

「こちらの陣を無視するか、貫けると考えているのか　　そういえ
ば、北郷が何か言ってたわね」

孫策軍、劉備軍との同盟の後、あの、天の御遣い男が、私たちを呼
び止めて、のたまった言葉があった。

「ああ。確か……『呂布に1対1で挑むな。最低2対1、できれば
3人でかかれ』でしたか」

「ふん、臆病な奴のいいそうなことだっ！」

「そうね。臆病者の言に聞こえるわね。無名の将相手にそれだけの
ことを言う……こちらをあなどっているのか……」

華琳は、手持ちの将、夏侯惇、夏侯淵、許緒、典韋、楽進、李典、于禁の顔を思い浮かべた。

「それとも、私たちが相手をあなどっている、見ているのか」

「しかし、北郷も董卓軍と戦った経験は一度のみ。加えて、我が軍の内実も知らないのですから、気に留める必要はないのでは」

「ふむ……呂布とやらが、無名なだけで、よほどの名将とにらんでいるのか……いえ、違うわね。1対1、2対1、できれば3人……つまり、呂布の率いる軍に対して二倍、三倍ではなく、呂布本人に3人で戦えと言っているのだから。つまり」

「呂布本人が、規格外に強いと？」

「そういう忠告でしょうね。たしかに、将としてはともかく、本人の武勇については聞いたことがあるわ」

「し、しかし、それこそ実際に戦ってみなければわからないことのはずっ！ 華琳様、私なら1対1でも呂布を仕留めて見せます！」

「……そうね。春蘭なら1人でも十分とは思っけれど」

華琳は、忠告を発した時のあの男の表情を、記憶から呼び起こした。あれは、推測から過剰に敵を恐れるといった顔ではなかった。私たち1人1人の力量と、呂布1人を天秤にかけるような、どこか冷たく、重い表情だった。もし命令権があれば、それを強制するような。

「前衛に春蘭と秋蘭、そのすぐ後ろに季衣と流琉を配置しましょう。中央は私、その後ろに凧、沙和、真桜」

前衛に4人、中央1人、後方に3人という陣形だ。

「敵が正面から挑み掛かってくるなら、押し包んで殲滅する。我が軍と孫策軍の隙間を狙ってくるなら、春蘭と秋蘭、そして季衣が側面に、流琉は私の傍に、凧、沙和、真桜は敵後方にまわらせる。全体の統括に桂花、前衛の動きは凧、後衛は風に任せるわ」

「はっ！」

「呂布との一騎打ちは禁ずる。2人以上でかかりなさい」

「華琳さまっ！！」

春蘭が不満そうに口を尖らせる。

「……やむをえず1人で戦うときは、必ず合図を出して味方の援軍を呼ぶこと。いいわねっ」

「は、はい」

シヨボンと、春蘭は肩を落とすが、その肩に秋蘭が手を置いた。

「姉者、華琳様は一騎打ちをしても良いが、その時は知らせること、と言っているんだ」

「そ、そうかつ!! よし、絶対に呂布を討ち取ってみせるぞ!!」
夏侯惇は気炎を上げた。

華琳はそれを横目で見て、軽く苦笑しつつ、秋蘭に目線を送った。
こくり、と秋蘭も小さく了解の合図。

呂布が現れたら目を離してはならない
主従の意志は、完全に一致していた。

「さて、それでは、董卓軍との会戦にのぞむとしましょうか。全将兵、戦闘配置につけっ!!」

本陣で備えていた、曹操軍の全武将、軍師がそれぞれの持ち場へと移動する。

配置完了を旗の動きで知ると、華琳は命令を下した。

「全軍、出撃っ!! 愚かしくも彼我の力量の差を見誤った敵に、曹操軍の真価を教えてやりなさい!!」

旗揚げから敵の軍を吸収して巨大化した、二万を超す曹操軍が、その牙を剥き、前進を開始した。

先鋒・左翼、孫策軍、本陣

曹操軍が董卓軍の動きを知ったのとほぼ同時に、孫策軍もその情報を得た。

「先手打たれちゃった。やりづらいなあ」

「野戦に出るとは、なんの心算か……」

「兵糧が十分ならとつとと虎牢関に躍りかかっている所なのになー」

孫策は口惜しそうに、頭を搔く。

孫策軍の強みは、速度だ。敵が予想する以上の速さ早さで攻め上がり、敵に構える隙を与えずに攻撃する。

孫策が好みとする、電撃戦である。

「良かったな、伯符。蓮華様が間に合って。こういう戦はお前より蓮華様の方が得意だ」

「まあねえ……質が違うんでしょうね、私とあの子は。それじゃ、私は一武将に徹しようかしら」

「おいおい、そこまで拗ねるな」

「どうせ私は持久戦苦手ですよーだ。でも、真面目に、前衛を私と祭が担当して、中央と全体の動きは蓮華に任せてみない？」

「……ふむ。だが、蓮華様には経験が足りない。実戦を積むにしても、相手が董卓軍では荷が重い気がするが」

「そこは冥琳に頼むわ。いざとなったら助言して。どうしても駄目なら代わりをやって」

「蓮華様にとつて辛い結果にならねばいいが……」

「大丈夫よ。あの子強いもの。多分、私よりもね。それに、もしかしたら、これから董卓軍より強い、たくさん敵を相手にするかも知れない。その時になって経験が足りないなんて、言っていられないわ」

「……」

周瑜は刹那、黙考した。

董卓包囲網の次。次の世界の姿を想像する。

誰が主導権を握るか。孫呉が握るには何が必要か。その障害は何か。障害を越えるのに必要なものは

「いいだろう。蓮華様に指揮を任せる。私はそれを補佐する。で、お前は前衛でなにをするつもりだ？」

「そりゃあ、蹂躪以外にやることないでしょ？」

と、孫策は手綱を引き、ドガツ、と馬蹄を大地にたたきつける。蹂躪とは要するに、敵をぶっ飛ばす、ということだ。

「最初は様子を見るけど、董卓軍が簡単に背中を見せるようなら、一気に虎牢関を抜きに行く。いいわね？」

「止めても無駄だろう？ まあ、できるだけ、他軍との息を合わせてくれよ。こちらだけ突っ走ったら、連合軍全体が危ういかもかもしれないからな」

「そうね。いくら孫呉が強兵揃いでも、単独で董卓軍には当たれない。曹操軍との協力………寒気がするけど、やるしかないわ」

「なに、蓮華様はうまくやるさ。お前はあまり気にせず暴れ回れ。私の目の届く範囲でな」

「どこにもいかないわよ。死ぬまではね」

「縁起でもない」

「ふふふっ」

孫策は南海霸王を手に、馬を進めた。

「じゃ、董卓軍の味見をしてくるわ」

「わかった」

冥琳は馬首をかえし、孫権の元へ。

「私が総指揮を？ 姉様はどうしたのだ？」

眉を少しだけ持ち上げて、蓮華は冥琳の目をじっとみつめた。

「雪蓮本人が、やらせてみよう、とのこと。雪蓮は前衛に、私は補佐に」

「……そう」

「まず、前方を塞ぎ、挑み掛かってくる敵の迎撃布陣を」

「む……」

孫権は、突如の事への驚きを一飲みし、

(姉様も冥琳も、私を試しているのか)

ぐっ、と目蓋に力を込めて目を瞑り、静かに、目を見開いた。

「前衛は黄蓋と姉様だな。中央は私を中心に横陣を組む。左翼に呂蒙と周泰、右翼に陸遜と甘寧。前衛が食い破った敵のほころびを、左右の軍で引き裂く。後ろ備えは周瑜に任す……これでいいか？」

孫権の青い目が、周瑜の眼鏡の奥の瞳をとらえる。

「よろしいかと。しかし、曹操軍との接点となる右翼が甘寧でよいのですか？」

「なれあうわけではあるまい。思春のやり方に追いつけぬなら放っておけばよい。こちらが困るようなら、穩が機転を利かすだろう」

「……御意」

（この方は……）

周瑜は胸の奥の熱い炎を、表に出さぬよう取り繕った。

（孫堅さまとも雪蓮とも違う、しかし、確かに王の器　予断をゆるさぬ孫呉の継嗣選定。だが、これは半ば決定か。伯符に続く者としては少々堅実すぎるが……）

孫呉は不慮の事態で主を一度失っている。そのため二度と混乱を起こさぬよう、後継ぎを少しでも早く見出すというのが、冥琳含む首脳部の懸案だった。

「北郷が呂布とかいう将を警戒していたな。万一のため、冥琳は後方右寄りに備えていてくれ。迂回して、すぐ前方に出られるように」

「はっ！」

「それと……後ろの袁術軍が気になる」

「？」

「わざとなのか知らないが、本来の配置より後ろにさがっている。

今は問題ないが、戦いが始まって敵の攻勢が激しくなってから、さらに後退されると、我が軍が分断される可能性がでてくる」

「確かに」

連合軍の弱点は軍と軍の接点が弱いことだ。曹操軍との隙間、袁紹軍との隙間、袁術軍との隙間。

前方に配置された孫策軍は、曹操、袁紹、袁術のラインが断たれると孤立する。だからこそ、後方にいる袁紹と袁術にはなるべく前に出てきて欲しいのだが……。

「期待するだけ無駄だが、こちらとしては孤立して戦うのは最悪だ。そういう意味でも、冥琳には右後方で備えていてもらうぞ」

右後方は孫策軍が接する全ての軍の動きを掴むことが出来る、急所

である。

「ふふっ、蓮華様におまかせして、私は高みの見物のつもりでしたが……隠居にはまだ早そうですね」

「ふっ、祭がまだ現役なのに、お前が隠居できるわけ無いだろう」

「ですな。しかし、連携という点では、曹操軍が羨ましい。後ろの馬超も公孫贇も袁術よりは有能で誠実、そしてやる気がある」

「警沢は言つてられんさ」

（あの男の軍は最後方だったな……この戦いで一緒に戦うことはないか……）

蓮華は少し前に握手を交わした男の顔を思いだした。

（……なんで私は残念な気持ちになっているんだ）

形容しがたい気分を抱えつつ、蓮華は各将に指示を飛ばす。

「董の旗を打ち倒し、孫呉の旗を中原に掲げよ！ 全軍前進っ！」

大陸北方の雄、董卓の軍。そして南方の雄、孫呉の軍。

その二つの軍の衝突の時が、目前に迫っていた。

中央、袁紹軍、反董卓連合軍、本陣

「董卓軍、約四万が我が軍前方に展開中とのことですよっ！」

「敵の多くは精鋭の涼州騎兵隊と思われまます！」

細作からの報告を受けて、袁紹軍本陣も慌ただしく動き始めた。

「まったく、鉄壁の虎牢関を出て戦おうなんて、兵法を知らないにもほどがありますわっ！」

「やりやすくなっていーじゃないですか、姫」

馬車の上で昼寝をしていたところをたたき起こされて、不満そうな袁紹を、文醜がおさえた。

「そうですね。攻城戦と違って、野戦ならすぐ決着がつきますし、

もしかしたら今日中に董卓軍を洛陽から追い出せるかもしれません
っ

顔良も一緒になって主の機嫌をとる。

「ふんっ、わずか四万でなにができると思っっているのかしら。こんな砂煙がたつような場所で、わたくしの優雅な軍が戦うことはありませんわ。孫策さんと曹操さんの軍で十分でしょう。わたくしたちは雄雄しく、真っ直ぐに進軍するだけですわ！」

「はっ、はいっ!! ああ……陣形とかは」

「適当で良いでしょう、丸でも四角でも。斗詩さんがやってくださいな」

「そ、そんな〜」

黒髪の少女は泣きそうな顔になった。

「斗詩い、どうせ敵は自棄おこして最後の攻撃に出てるだけだっつて！ このままでいいじゃん。いざとなったらあたいが暴れて蹴散らしてやるよ」

文醜は相棒を慰めた。

「それでー、麗羽様あ、敵ぶつたおしたら、洛陽まで行くんですよ？」

「ええ。董卓さんが占拠した都なんて別に興味ありませんけど、この名門のあたくしが、直々に、袁家の色に染めなおしてさしあげますわ〜!!」

おーほっほっほ!! といつもの高笑い。

「そうですね。戦功をたてなくても、都を立て直せば連合を呼びかけた袁紹様の顔も立つし……」

「はい？ 何を言ってますの斗詩さん。呼びかけなんて面倒臭いこと、わたくしがやるわけないでしょう」

「……え？ じゃ、じゃあ、だれが決起を主導したんですか？」

「さあ？ あのクルクル頭の性悪小娘じゃありませんの？」

「クルクル……あ、曹操さんですかー……あれ？ でも、私、東郡太守の喬瑄とかいう人が曹操さんを参加させたとか聞きましたけど

「？」

「誰ですのそれ？」

「？」

3人は互いに互いの顔を見合って、首を傾げた。そんな奇妙に弛緩した雰囲気のまま、袁紹軍は、戦いに突入したのだった。

中央・左翼、袁術軍、本陣

「七乃お、八チミツはまだなのじゃー？」

「お嬢様あゝ、さつき食べたばかりですよー」

「……そうじゃったかのお」

のほほん、とした空気を漂わせて、袁術軍はいつも通り。

「どーせ、孫策が妾のかわりに働いて、妾の分の功績を稼いでくれるのじゃ」

「美羽様のグータラは世界いちいゝ！」

「戦場で働いたら負けじゃと思うとる」

「それじゃあ、戦いが始まったら、後ろで見てましようかあ」

「それが良いっ」

この戦いにおける袁術軍の動きは以上で終わりである。

中央・右翼、公孫賛軍、本陣

「ご主人様、劉備軍の偽装、完了しましたっ！」

「劉備軍の半数が動かせませす。白蓮さんにお借りした兵を含めて、5千が全兵力ですっ」

朱里と雛里の軍師コンビが報告する

「5千かあ、これは多いのかなあ、白蓮ちゃん？」

「なんで私に聞くんだ桃香……これ以上は無理だからな？」

「曹操さんの軍も、孫策さんの軍も、すっごく多くて強そうなの。なんだか私、足引っ張りそうで……」

「？水関で十分活躍したんだ。この戦いは援護だけで構わないと思うぞ？　なあ、北郷？」

「……」

「北郷？」

「え？」

俺は呼ばれて、白蓮の訝しげな顔を見た。

「な、なにか言った、白蓮？」

「どうしたんだよ、北郷、ぼーっとして」

「なにか考え事？　ご主人様？」

桃香も心配そうな表情で、じつとこっちを見る。

俺は首を横に振り、

「いや、なんでもないよ……そろそろ戦闘が始まりそうだし、しゃんとしないとな」

「ふふっ、主のことだ。いつもと様子の違う女たちを前に、よからぬことでも考えていたのでしょう」

星が笑う。

たしかに、俺の周りには、普段と恰好の異なる仲間たちがそろっていた。

桃香、愛紗、鈴々、朱里、雛里、それぞれが変装ということで、見慣れない服に着替えていた。

いつもの服が似合っていることは言うまでもないが、変装した姿もまた、愛らしいものだった。

「不思議な感じだけど、これはこれで動きやすいのだ」

「たしかに。これなら戦いにも適している」

「それに、3人一緒で、なんだか楽しいしね」

おおむねそれは好評だった。しかし。

「……道着なんて、一体どこから出てきたんだ？」

明らかにそれは剣道用の道着だった。

白の道衣に紺の袴。ご丁寧にさらしを巻いて、どこからみても剣道少女のそれだった。

清々しい見た目なのに、少しだけ露出した首回りとか、足首が、強く女をあらわしている気がするのなぜだろう。なぜだろう。

「で、こっちは……」

「み、水着みたいです……」

「お、おかしくないかな……？」

軍師二人は道着ではなく、体操服だった。

小柄な体形によく似合っではいるのだが……。
上はまだいい。

「ブルマ………？」

下がおかしい。いや、悪いのではない。ただ、この状況にあってないだけで。

「最近流行っている服だとか」

「すげえな三国時代」

魅惑の三角形を前に、生唾を飲み込んだ。

じろじろと見られた少女達が、一様にもじもじと恥ずかしそうに身じろぎした。

「ご主人様ツ、そ、そんなに見つめられたら、こ、困りますっ。それと星もっ！」

愛紗が胸元を隠した。さらしを巻かれてなお主張する隆起がまぶしい。

「むう………」

俺は咎められてなお目を離せずにいた。

「我々も着替えますかな、白蓮殿？」

「……遠慮しとく」

星と白蓮は必要がないのでいつも通りである。

「こほんっ、えーっと、そろそろ敵と接触すると思われまますので、

作戦をですね」

朱里が、赤い頬のまま、なんとかかまじめな顔を作る。

「……敵は四万か。曹操と孫策が壁となっているから、守勢にまわることはないと思うが」

愛紗が応じる。道着効果で凛々しさ2割増し。

「虎牢関という要塞を背にして、野戦を挑むからには、何かの策がある可能性が高いです」

「策か……崖の上に伏兵か、地形を利用した罠か」

「落石とかなら簡単にできそうだもんね」

うんうん、と桃香が頷く。

「曹操さんも孫策さんもそれは気付いていると思います。易々と計をうけることはないでしょうが……」

「この先の道が、細くなったり、曲がりくねっていたりすることはないの？」

「確かに隘路であれば、寡兵で戦うことができますが、虎牢関へ続く道は広く、平坦な道ばかりです」

「うーん」

「袁紹を狙って、一直線に攻撃してくる、というのはどうだ？」

「愛紗、それはイノシシなのだ」

「う……鈴々にイノシシといわれるとは……」

愛紗は苦い顔をした。

「一点突破で総大将を狙うことはあり得るでしょう」

「連合軍の陣形をみると、曹操軍と孫策軍が並んでいて、その後ろに袁紹軍が配置されているので、曹操、孫策軍の隙間に突撃すれば、道が開けます」

「ということは、そこを補強すれば、隙は無くなるな」

「なら、私たちが待ち構えようか」

「しかし、そうすると董卓軍の精鋭を真正面から受け止めることになりませんが」

「うーん、じゃあじゃあ、袁紹さん達の軍に紛れ込んで戦うってい

うのは？ 最初は袁紹さんに戦ってもらって、勢いが衰えたところに私達が横から攻撃するの」

「そうですね。それなら戦えるそうですねっ!!」

朱里と雛里、二人が合意した。

「また私たちが一番になったりして」

「孫策達も、敵が攻めかかってきたときに敵将を討ち取ることまで批難したりはしないだろ」

「だよ。じゃあ、今回も、劉備軍が一番っ、活躍してみようか!」
桃香が手を上げると、

「おおおおおっ……!!」

と、喊声があがった。

「……目立ったら、後ろで備えているはずの軍がなんで前にいるんだって、怒られますけどね……」

朱里が、ぽそっ、とツツコミをいれたが、誰も聞いてはいなかった。

連合軍、前衛

「そろそろ董卓軍が見えるか……」

愛馬に跨り、魏の猛将は前方を睨む。

「姉者、先走るなよ。呂布と戦うなら私の弓が届く範囲で、だ」

「わ、わかってるさ」

「っ! 見えた、董卓軍だ!!」

夏侯淵の目が、敵を捉えた。

数こそ多くないが、その威容は、遠目からでもはっきりとわかる。

「……斥候の報告では、もう少し近くで陣を張っていると聞いたが、さすがに、虎牢関よりの距離に戻したようだ。冷静な軍師がいるのだろう」

「無駄なことだ! 軍師ならこっちには3人もいるんだからな!

……ちよっと変なのが多いが」

そんなことを言っている間に、董卓軍が連合軍に気付いたか、小さく動きはじめ、やがて大きなうねりとなって、連合軍へと突進を開始した。

「準備は万端だ。いつでもいけるぞ、姉者」

「よし。いつていいか？」

「ふむ。孫策軍と足並みを揃えた方が効果的だが……速さに定評のある孫策のことだ、ついてくるだろう。行こう、姉者っ!!」

「応っ!! 行くぞっ! 夏侯惇隊、突撃っ!!」

「夏侯淵隊っ! 続いて突撃だ!!」

連合軍の先陣を切つて、曹操軍が突撃を開始した。

「董卓軍の前進に合わせ、曹操軍が突撃、旗は夏侯ですっ!」

「夏侯惇か夏侯淵か、あるいは両方か、どっちにしても、私たちも行くわよ!」

「っ 策殿一人を突つ走らせるな! 儂らもいくぞ、続けい!!」
孫策軍先鋒、孫策、黄蓋も突撃を開始。

「崖上に動きなし。敵の工作隊の動きは封じました。これで落石はないっ!」

曹操軍前衛の軍師、郭嘉が敵軍を睨む。

「あとは、春蘭さまたちと、敵の将との優劣だけ。これなら?」

「うおおおおおおおっ!!!」

「さすが姉者、これなら我が軍が一番槍で?」

最初は、郭嘉の小さな違和感。

そして次は、目のよい夏侯淵の違和感。

「この場所、たしか斥候が報じた、敵の元本陣の位置!?!」

「敵の騎兵っ、なぜ槍ではなく弓を持っている! 姉者! 様子が

馬を失いつつも、見た目は何の怪我もなく、しかし、眉根に皺を寄せて、険しい表情で秋蘭のところへ戻ってきた。

「落ちる寸前に跳躍して、なんとか脱出したっ……、見たところ、穴の幅と深さはそれほどでもない」

「ゲホっ、と煙にむせる。」

「兵をまとめて一旦退くか……」

「……くっ！」

火焰と煙の向こうから飛んでくる矢を剣で弾く。

「敵もこつちの様子は見えてはいない。矢で闇雲に攻撃しているだけだ。敵の狙いは私たちの足止めか……」

「……姉者」

しやがみこみ、大地に手を付けて、夏侯淵が口を開く。

「騎兵が動いている。大軍だ。ここから南の方向」

「南というと、我が軍の左翼……!？」

「敵は、中央突破を狙っているようだ。この分だと孫策軍も同じ畏をくらっているだろう。その混乱を利用して」

「袁紹軍を狙うということか……! ちいっ！」

「炎と陥穽で人為的に隘路を作った上で突撃とは、やってくれる！」

「春蘭さま! 秋蘭さま！」

混乱を聞きつけて、郭嘉と許緒、典韋が到着した。

「お2人とも、ご無事ですかっ!!」

「おお! 来てくれたか! 兵に被害は出たが、こちらは無傷だ！」

「だが、敵の動きが早い。我らが躊躇していると、手後れになるぞ」

「はい。後方へ逃れた散兵を、ある程度まとめました。数千から動かせます」

郭嘉が報告する。

「ですが、損害を統制するためには、この場に残り、指揮する将が必要かと」

「ふむ。流琉は華琳さまの護衛にまわるから、季衣に頼むか」

「は、はいっ! 頑張りますっ！」

季衣が何度も頷く。

「稟は季衣を補佐してくれ」

「はっ!!!」

「私たちは残りの兵を糾合しつつ、連合軍の陣に突入して来た敵軍の側面を突く！」

「どうか、お気を付けてっ！」

「応っ!!!」

春蘭は季衣が連れてきた予備の馬に乗り、秋蘭と共に駆け出す。

「祭と姉様の安否は!？」

孫策軍の本陣で、孫権が叫ぶ。

「黄蓋様は健在ですっ!!! すでに兵と共に後退中っ! 孫策さまは、無事は確認されていますが、現在行方が……」

「……………姉様」

拳を握り、唇を噛むが、しかしすぐに持ち直して、

「敵は中央に集中している!! 軍を右に振り向けるぞ! 周泰を右翼へ、陸遜と共に敵の喉頸を締め上げよ! 黄蓋と呂蒙は持ち場を離れず、炎の向こうの敵を警戒しろ!」

自ら馬上で指揮しつつ、頭では戦場の全体図を俯瞰し、敵の動きを計算する。

「周瑜と甘寧は敵の先頭を捉え、両断しろ! 敵の勢いを分散、弱化せしめよ!」

(このままでは、敵と炎に阻まれ、孤立する。敵は袁紹を狙い、我が軍を標的にはしないだろうか……)

「孫策様の搜索は如何致しましょう?」

「………… 姉様の無事が判明しているなら、それでよい。姉様は姉様の考えで行動している。………… 案ずるに及ばない」

心中の不安を、自らの言葉で打ち消す。

「本陣も動かすぞ! こちらを嵌めてくれた敵将の首、必ずやあげ

るのだ!!」

叫声と怒声が混じる戦場、孫権が動き始めた。

「敵軍は孫策軍と曹操軍を突破つ、袁紹軍に迫りつつあります!」

「なんと……予想を遙かに超える速さだな」

報告を受けて、臨戦態勢を取っていた愛紗が驚き、孔明の顔を見た。「ありがたいというべきか、先鋒の二つの軍に比べ袁紹軍の速度が遅かったため、袁紹軍と敵がぶつかるまでまだ時間がありますから、十分迎撃の用意ができそうです」

「それじゃあ、作戦通り袁紹軍に紛れて敵を討とう。あらかじめ言っておいたけど、呂布とは1人で戦わないようにね」「はっ!」

俺の言葉に全武将が応じ、劉備軍も行動を開始した。

「敵の先頭は誰が率いているんだろ」

「斥候の1人は、張の旗を視認したとの事ですが……もう少し報告があがってこなければ、不確かかと」

「そうか……いや、多分張遼だと思うよ」

これだけの速攻は張遼以外だと難しいだろう。

劉備軍は公孫贇軍から離れ、連合軍の中央に陣取る袁紹軍の内側へ入る。

兵と兵がぶつかる轟音が近い。

「もう袁紹軍が接敵してるのかっ!」

「まずいよ、袁紹さん絶対準備してないもん。早く行かないと大混乱に」

「きゅ、急報! 急報ですっ!」

桃香が焦っている最中、伝令が飛んできた。

「どうした!」

「突入してきた敵の後方部隊が暴れ回り、現在、孫策軍、曹操軍ともに大打撃をうけておりますっ!」

「敵の後方部隊だ！？ 率いているのは誰だ！？」

「旗印は、深紅の呂旗です！」

「っ、来たか！」

愛紗がこちらを振り返る。俺は頷いて、肯定した。

「呂布……ご主人様、どう対処すれば……」

「まずは張遼を追い払わなきゃならないけど、呂布が張遼と合流したら手が付けられない。こっちもどうにかしないと」

「曹操軍や孫策軍に任せるわけには……？」

雛里が、ちら、と俺を見る。

呂布のすさまじさを、今は劉備軍の誰も知らない。

曹操軍と孫策軍が壊滅することは無くても、呂布を抑えきれない可能性はある。

「軍を二つに分ける。対張遼と対呂布。兵数が少なくなるから、慎重に、功を焦らないように。他軍の補助にまわろう」

「ぎよ、御意です！ では、張遼には愛紗さん、呂布には鈴々ちゃんを」

「桃香と朱里は愛紗と一緒に。俺と雛里は鈴々と行こう」

「ご主人様も行くの！？」

桃香が心配そうに目を見開く。

「ああ。大丈夫。直接戦うわけじゃないよ」

憂色の濃い視線を受けつつ、俺は鈴々、雛里を連れて、転進した。

（呂布に俺の知っている誰かが討たれるのも恐いけど、呂布が恋が、誰かを殺すのも、恐いんだ。もう、兵士はたくさん死んでい
るだろうけど、一刻も早く止めて、殺さずに済むようにしなきゃ
）

焦燥を胸に、おそらく、この戦場の中で一番熱い場所へと、疾駆する。

「ご主人様、大丈夫かな……？」

「鈴々もいますし、ご本人が慎重に、と言っているのですから、無

謀なことはしないでしよう」

愛紗は桃香を安心させるように声を掛けるが、自分自身も、油断すると怖気で声を震わせてしまう気がして、言葉を句切りながら、ゆつくりと言わなければならなかった。

「なんだか……ご主人様、帰ってきてから、変わった気がするの……」

「それは、私も感じます」

愛紗も、朱里も同意した。

「声も顔も性格も変わったところなんて無いのに……、目を離れたら、どこかに行っちゃいそうで……」

「桃香さま……」

しん……と、戦場に似付かわしくない、悄然とした雰囲気満ちたそれに気付いた桃香が、慌てて明るい声で、

「ごめん。戦う前なのに、変なこと言つて。大丈夫だよね」

「はっ。私が張遼を討ち取つて、攻守を逆転させて見せます！ その後、ただちにご主人様と合流しましょう」

愛紗も先程とは違う、しっかりした口調で答え、青龍偃月刀を、ぶん、と振った。

「騒ぎの大きさから、張遼本隊はこの袁紹軍の一群を超えたあたりですー！」

「よしっ、桃香さまと朱里はここで待っていてください。千でまず一当てしてまいりますー！」

言い終わるとほぼ同時に、関羽は兵を率いて進軍した。

息をひそめるように、そろりそろりと歩を進め、袁紹軍の兵士達の合間を縫って、ついに、張遼旗下の董卓軍を視界に捉える。

高々と掲揚された張の旗。

その周囲で戦う兵は袁紹の軍兵を次々と撃ち破っていく。

進撃の勢いは陣風となり、その周囲で嵐を巻き起こし、血の雨を降らす。

(速さだけではない、張遼という将、強いぞこれは……)

ぞくつ、と震えが関羽の身体に走った。

今度は恐怖ではない。

武者震いだ。

ぎゅっ、と青龍偃月刀を握り直し、小声で兵士達に指示を飛ばす。

散開した兵士が張遼本人の居場所を掴むと、合図を出し、関羽はそちらへと回り込む。

「私は張遼の足を止める、お前達は弓で張遼の兵を留める」

「はっ！」

隊の先頭で、関羽の武器と似た、飛龍偃月刀を操る将、それが張遼だった。

兵を使うだけでなく、自分も武器を振るい、敵を倒している。

「好敵手に巡り会えたようだなっ……………！」

愛紗はどこか喜び勇んで、張遼の前に姿を現した。

「ん、なんや……………！」

混乱し尽くした戦地、その真っ只中で泰然と立つ関羽の姿を見て、張遼は一瞬、歩みを止める。

しかし、速攻で鳴らしている手前、すぐに飛龍偃月刀を構え、関羽の頭頂にそれを振り下ろし

ガギンッ！！

弾かれた。

「んなっ！！！」

しかもその力で、張遼は数歩、後退を余儀なくされた。

「張遼だな」

「ウチの名前を知つとるか……………で、そっちはなにもんや」

「我が名は関うっ、あ……………えーっと、かん、関、関平だ！」

愛紗は咄嗟に思いついた名前を答えた。

「かんぺー？ その黒髪……………それに、なーんか、その武器に覚えがあるんやけど、名前が違ってるな。字もおしえてもらえるか？」

「字は、長生だ」

「長生……………」

字は関羽が以前使っていたものだ。知っている人間はそれほど多くない。愛紗とよほど親しく、愛紗の過去を知っていなければわかるはずが

「つて、それ関羽やないかいっ！！！！」

「な、なにに！！？ なぜわかった！？」

残念。張遼は関羽マニアなのであった。

「なんで偽名を名のったかようわからんが、歯応えがありそうなやつが出てきて安心したわ……しかも憧れの関羽。ふふっ」

張遼は唇の端をつりあげて、笑った。

「けど、悪いけどここはすぐ終わらせてもらわんと、袁紹の首が取れん。一気にいかせてもらっで！！」

再度武器を振りかぶり、落とす！

関羽は青龍偃月刀の柄でそれをいなし、逆袈裟に切り上げる。

張遼は手首を捻り、刀身でそれを受けるが、またもや数歩後退した。

「っ、っう！ こつちの一撃には眉一つ動かさんと返しよる……」
悔しそうに歯噛みして、三度突っかかる。

今度は頭ではなく体目掛けて斜めに斬り下ろすが、関羽は半身をずらして軽く避ける。

「もういつちよっ！！」

関羽に反撃の隙を与えぬよう、余力を残していたのか、すぐさま、二撃目にうつる。

さすがに避けきれず、青龍偃月刀で受け、張遼の腕を蹴り上げる。

「くっ！！」

予想外の攻撃に張遼はひるむが、退きはせず、跳ね上げられた腕を戻す勢いで、斬りかかる。

力ではかなわぬとみたのか、一撃、二撃、三撃と、速度をあげて手数で勝負し始めた。

「くっ！？ やるな！！」

反撃の隙が見あたらず、関羽は防御のみに注力した。弾き、いなし、かわし、受ける。

音速の斬撃を防ぐ数2桁に及び、刹那の息切れを狙い、関羽は反撃する。

「うおおおおっ!!!」

ズガツツ……!!!」

豪撃に張遼の体が吹っ飛ぶ。

「くっ………そお、こっちの攻撃には動じんのに、そっちはでたらめや」

「張遼將軍!!!」

「なんや!!!」

董卓軍の兵集団から、声がかげられた。

「孫策軍の旗が後方に迫りつつありますっ!!!」

「ちっ! 退き際………なら、これが最後っ!!!」

くずおれかけた膝にぐっと力を入れ、地面を蹴り飛ばし、その速度を、武器を持つ腕に伝える。一足一刀の距離、敵の懐にまで、目にも留まらぬぐらいの速力で入る。

「っ!!!?」

その神速に、関羽は、正面から敵が迫っているのに虚を突かれた気さえた。急いで青龍偃月刀を斜めに構え、防御の姿勢をとる。

ガギイイイイイン!!!

重い音を響かせて、二つの偃月刀が交差した。

力と力がぶつかりあった衝突音のあと、大きく、関羽が後ずさった。この一騎打ちにおいて、関羽の初めての後退だった。

「くっ、うっ………!!!」

「へへ、ウチも結構いけるみたいやな………でも、今回はここまでや、関羽!!!」

踵を返し、馬に飛び乗って、前進と同じ速さで後退を始める。

愛紗は追うことを考える頭に体がついていける余裕がなく、それを見送ってしまった。

すっかり遠くなってしまうた張遼を追うのを諦め、乱れた道着の襟を正す。

倒され殺され乱れきった軍勢の向こうの空に、孫策軍の「周」「甘」二旗が翻っていた。

関羽対張遼が一応の決着を見た頃より少し前、俺たちは呂布の軍勢を遠巻きに見ていた。

呂布を囲っているのは、孫策軍の陸遜、周泰、曹操軍の夏侯惇、夏侯淵、そして俺たちだった。

呂布は、退路の確保のため、完全包囲にまわろうとする隊を数度叩き潰しており、俺たちは、呂布を直接攻撃するか、しつこく包囲を試み続けるかの選択を迫られていた。

「決め手に欠けるな。孫策軍は軍師1人に将1人、曹操軍は将2人、こっちは将1人軍師1人俺1人、か」

「やはり合力して戦うしか手はないと思います……」

雛里が魔女っぽい帽子の鍔をいじりながら言う。体操着でもその帽子は外せないんだね……。

「だよね」

「鈴々もあれは1人じゃ抑えるのがいっぱいいなのだ」

実は一度、血の気の多い夏侯惇が挑んだのだが、数撃打ち合ったところで夏侯淵が割ってはいり、姉を救出していた。正直、あのまま戦っていたら、殺されるまではいかなくとも、重傷を負っていたと思う。

「ですが、連携が出来るかどうか不確実性が大きく、他軍が将兵を動かしてくれないかもしれません」

即席の同盟は、協力して敵に当たるといふより、背中を守り合うという意味合いが強い。積極的な互助を誓ったものではないのだ。

「かといって、連絡のために動いたら、呂布に狙われそうだし」

「だんだん包囲が呂布から離れているのだ……皆、怖がっているのだな」

「手は、何か手は……」

鳳統が、うん、と唸って策を練っているが、俺には一つ策があった。多分、これなら他軍も協力してくれる……はず。

……でも、やりたくねえなあ……

「あ、また一隊やられたのだ」

ドカーン、という擬音が聞こえてきそうなくらいの一雑で、兵士達が空へと飛ばされた。炎を背景に、血しぶきにまみれる深紅の呂旗。凄惨の一言しか出てこない状況だった。

「うむむ……仕様が無いな。鈴々、いざとなったら助けてね」

「え？ お兄ちゃん？ なにを……？」

戸惑う鈴々を置いて、馬の腹を蹴って襲歩突撃する。

刀はすでに抜刀済み。剣はその表面に赤き火焰を映して、血に濡れたかのようにだった。

馬の鉄脚で一気に寄せて、呂布の横へと馳せる。

呂布は振り向くまもなく、目だけでこちらを捉えた。

「呂布つつ！！」

叫びざま、斬りかかる。目標は方天画戟を支える腕！

呂布は軽く体をそらし、斬撃を回避した。斬れたのは皮どころか服の線維だけ。

「ふっ！！」

兵卒達にそうしたように、呂布は片腕だけで方天画戟を薙ぎ払った。

「っ、この……！！」

呂布の膂力に耐えられるよう、拳で刀身を支え、斜めに構えて衝撃から逃れる体勢をつくる。

キイイイイン！

岩石をぶつけられたような一撃に、視界に火花が散り、頭が真っ白になる。

「く、うおおおっ！」

馬上から落ちそうになるが、自ら飛び降りて、着地する。

受けた腕が潰れたかと思った。痛い。痺れるどころじゃない。

「……………弱い」

呂布も一合で俺の力量を見切ったようだった。

「名前だけ……………聞いてあげる」

名前も聞かず斬り捨てた兵卒よりは、マシらしかった。

「北郷、一刀」

名のと、ぴく、と呂布が眉をふるわせた。

「……………華雄を、討ち取った将？」

「ああ。そういうことになっている」

「……………北郷一刀」

呂布が、細い体躯の2倍以上はありそうな重い方天画戟をかつぎ、近付いてくる。

「ここで……………死ね」

絶望的な状況だ。

背を向ければ斬られる。かといって、立ち向かうに術がない。

だが、何とか救援が来てくれれば

そんな一縷の望みが届いたのか、次々と、救いの手がさしのべられた。

「お兄ちゃん！」

張飛の声、

「北郷ッ！！」

夏侯惇の声、

「北郷さんっ！」

周泰の声。

魏呉蜀、三国からの助けは間に合った。

「あれは……………北郷っ!？」

「あの馬鹿男っ！」

呂布を包囲していた夏侯惇と夏侯淵は、俺が呂布と対陣しているのを見て取ると、ただちに動き始めた。

夏侯淵は中距離、矢が外れても簡単には味方に当たらない位置に。

夏侯惇は馬を飛ばし、俺の元へ。

さらに、孫策軍も動いた。

最初、俺が無謀にも呂布に1人で挑み掛かっているのを見て、周泰と陸遜は、躊躇した。助けるべきか、否か。

いくら同盟の相手当主でも、こちらが危険にさらされてまで助ける義理があるのか

「あれは……お、おい、なんで北郷が呂布と戦おうとしているんだっ！！」

2人が逡巡しているところに、孫権がちょうど合流して口を開いた。「蓮華様っ！！？ あ、あの、こちらもよく分からなくて」

「あいつを見殺しにするわけにはいかないっ！ 明命、側方から一撃だけ加えろ！ 穩、祭の弓兵を連れてきているから、援護しろっ！」

「ぎよ、御意ですっ！！！」

孫権の命令で、2人は急いで助けに向かった。

「北郷ッ！！！」

呂布が俺の体を方天画戟で両断しようとするところを、夏侯惇が七星餓狼で受け、抑える。

「お兄ちゃん！」

それでも断ち切ろうとする呂布の圧力を、ほぼ同時に駆けつけた張飛が、丈八蛇矛で押し返しはじめた。

「北郷さんっ！」

呂布は、少し顔をしかめて、斜め後ろに飛びすさった。

明命が数本のクナイを投げ付け、呂布の集中をそらしていた。

さらに、左右の夏侯淵、陸遜たちから弓が射掛けられ、呂布は俺との距離をますます離れた。

「……………増えたところで、変わらない」
飛来する矢を、方天画戟の旋風で弾き、再度、俺の方へと走ってくる。

「そこで見てる馬鹿っ！！！」

夏侯惇は俺に拳骨をくれてから、呂布の迎撃に向かった。

「お兄ちゃんは鈴々の数倍馬鹿なのだっ!!」

鈴々もむくれた顔で、呂布迎撃へ。

俺は苦笑して、邪魔にならないよう、後方へさがる。

「大丈夫ですか？」

黒く長い髪をなびかせて、周泰が、ぴよこぴよこと寄ってきた。

「ああ、大丈夫。ありがとう、助けてくれて」

「いえいえ！ わたしはなにも！ また来るかもしれませんが、わたしの後ろにお下がりにください！」

その周泰の言葉通り、呂布は張飛と夏侯惇をあしらい振り払うと、こちらへと矛先を向けた。

「はっ！」

周泰は俺を抱えて、猫のように呂布を中心とする円周をとびまわり、呂布と一定の距離に保ち、攻撃から逃れた。

「……………逃げても無駄」

と、呂布が急停止し、方天画戟を天に掲げ 大地に振り下ろした。衝撃で地面が揺れ、人の頭ほどの岩が砕けてこっちへ飛んでくる。

「あうっ!!」

明命1人なら高跳びして回避できただろうが、俺と一緒にいたため、咄嗟に2人で大地に伏せた。岩石が頭上を通過してすぐ立ち上がるが、その時にはもう呂布が、攻撃の圏内に入っていた。

恐怖に顔を青ざめさせながらも、けなげに、明命は俺をかばい、呂布に刃を向ける。

「待てええええっ、呂布うっう!!」

呂布の背後、遠間から夏侯惇が叫ぶが、間に合わない。

「ひうっ!!!？」

渾身の力がこもった一撃をもらって、明命は傷こそ負わなかったものの、武器、魂切を取り落とす。

「明命っ!!」

今度は俺がかばう番、脇に小柄な少女を抱えて、刀を構える。

「来いっ！ 呂布ッ」

内心逃げ出したいが、強がって、立ち向かう。

呂布は、リーチの差を生かせる距離から、横薙ぎに一閃
「うおおおおおおっ!!!」

刀に体重をのせ、柄頭でパリングし、脇へまわり一足、踏み込んで
二足、三足と同時に片手で突きをくりだす。

狙うは喉元 否、咄嗟に踏みとどまり、肩へ！
ガンツ！

切っ先は呂布の方天画戟の柄を叩くにとどまった。

「っ!？」

思いがけない突きの鋭さに、呂布は一旦退いて体勢を整えた。

俺は、軋み悲鳴を上げる自分の骨に、どうにか活を入れて、正眼に
構える。だが、もはや、立っているのも限界で、膝が笑い始めてい
た。

次の一撃を食らえば、もう、後はない。

本能でそう悟った。

「北郷っ！ 無茶するなっっ!」

風切り音とともに、夏侯淵の矢が呂布の足元と、頭を同時に打ち貫
かんと飛翔してきた。

呂布は急所である頭を狙った一矢を弾き落とすが、足への矢は対処
できず、掠めさせた。

「くっ……」

思えばこれがこの戦い通して初めて与えた、呂布への有効打だった
のかもしれない。

さらに

「だぁあああああ!」

全速力で夏侯惇が戻ってきて、ノンストップで呂布に豪撃を加える。

「……………っ!」

呂布が眉をしかめた。これもまたどこかに掠ったのか、少量の血が
舞った。

さらに張飛も戻ってきて俺の護衛にまわった。

最悪の状況を脱した……いや、もしかしたら、逆転かもしれない。呂布はまともな一撃こそくらっていないが、かつての勢いはない。逆にこちらは、この場にいる全ての人間が協力し、呂布にあたっている。

そして、神の計らいか、その瞬間、天に向かって鎗矢が放たれた。皆の動きが止まり、鎗矢が奏でる大音の方向を見た。何の合図かと思つた次の瞬間には、呂布が反転し、虎牢関の方へと駆け出していた。

「ま、待てつ、逃げるか！ 呂布！！」

夏侯惇が慌ててその背中を追つた。

「あ、姉者！！ 駄目だつ！！」

夏侯淵が呼び止めるが、間に合わず、夏侯惇は追撃に行つてしまつた。

「鈴々、俺たちも追おうつ！ 1人じゃ危険だ！」

「了解なのだ！！」

馬に飛び乗り、呂布を というより、夏侯惇を止めに行く。

馬をしばらく走らせると、董卓軍が掘つた落とし穴のある場所まで到達した。すでに炎は半ば消えつつあるが、まだ壁として機能しているようだった。

呂布は穴の近くにいる連合軍の兵を、蹴飛ばし蹴散らし蹴り落とし、一掃した。

そして、夏侯惇が追いつく前に、炎と炎の間をぬつて、壁の向こうへと姿を消した。

「く、くうううつ！ 呂布を取り逃したか！」

炎の壁の前で急停止し、夏侯惇は齒ぎしりした。それを見て、ともかく呂布相手に俺を含め生き残れたことに、胸を撫で下ろす。

と、視界の隅、炎の壁が揺らぎ、その向こうに、何かの煌めきが見えた。

こちらに向かつて、殺意をあらわにするそれは

……弓、矢……？

理解と共に、体が動いた。

嫌な汗を感じながら、転びそうになるぐらい、ただただ前へ！

「春蘭……！！！！！！」

彼女の体に飛びつき抱き寄せ、その射線上から逃れ　　！

「うあああああっ！！！！？」

春蘭の悲痛な叫びが響いた。

「姉者っ！！？」

その声に、夏侯淵が目を見開いた。春蘭が馬上から転げ落ちるところを、俺がなんとか抱え下ろしているところに、秋蘭が一目散に走り寄る。

「秋蘭っ！　春蘭がつ……！！」

「姉者！　どこをやられた！！　眼か！！」

春蘭は左目のあたりを押さえて、切れ切れに、言葉を発した。

「だ、だい、じょうぶだ、眼じゃなくて、左のこめかみあたりをえぐられただけだ」

「そうか……良かった」

心底安堵した顔で、夏侯淵は俺と一緒に姉を抱え支え起こす。炎の向こうにまだ敵がいる。急いでこの場を離れなければ。

「心配かけてすまない……秋蘭、あと、その……北郷も」

「いや、大事が無くて良かったよ」

「私からも礼を言わせてくれ、北郷。あのままだったら、姉者は左目を失っていただろう。お前のおかげだ」

頭を下げる秋蘭に、俺は首を横に振った。

「俺の方こそ、呂布と戦つてるとき助けられたんだ。それでおあいこだよ。さ、念のため治療が必要だろ」

「ああ……我が軍の陣所に運ばなければ」

「もう敵も撤退しはじめている。追撃せずに、曹操軍の所へ移動し

よう。俺たちも一緒に行く」

「ん……重ね重ねすまない」

清潔な布で傷口を押さえ、包帯を巻き、春蘭を運ぶ。周囲を鈴々が警戒し、周泰もそれに参加してくれた。

雒里と合流すると、退却する敵が通らない安全な経路で、曹操軍を目指した。

俺たちは、連合軍は、勝ったんだろうか……？

激しい戦いを生き抜いたものの、どこか苦い思いを噛み締める俺を尻目に、虎牢関へと続く大通りを舞台とする会戦は、終結した。

結論から言うと、この戦いにおいて、連合軍は大勝利を収めた。

確かに、落とし穴や、張遼、呂布の攻撃により、連合軍は混乱したが、兵数でいえば全体の一部あたりが削られただけなのだ。

主要な将も健在で、継戦に問題は無し。

それに対して董卓軍は、曹操軍と孫策軍の挟撃で、突撃した軍の数が割を失った。

撤退時も、落穴の向こう側へ回り込んで退路に潜んでいた、孫策軍の黄蓋、曹操軍の楽進・李典・于禁、馬超軍によって打撃を受け、さらに兵を喪失。

そして最悪なことに、開戦初期から行方がわからなくなっていた孫策が、後方で待機していた董卓軍の輸送部隊、輜重隊を捕捉、攻撃したうえ、燃やし尽くしたので、董卓軍は一気に虎牢関まで退かなければならなくなった。

結果、董卓軍の目標である足止め持久戦は叶わず、洛陽の最終防衛拠点である虎牢関のみを頼りとする戦いとなった。

連合軍は虎牢関近くまで進軍し、そこで日没、戦いは次の日へと持ち越された。

同日、夜、劉備軍本営

呂布と一騎打ちをするという愚行を、桃香に愛紗に鈴々に朱里に雛里に白蓮に責められ、俺は幕舎の外へ逃げ出した。

熱い戦場と戦場の合間を象徴するかのようなぬるい風が、頬を撫でた。

顔を上げれば星が瞬き、下げれば、ひとまずの勝利に酔う劉備軍の姿がある。

喧噪から離れて、ふらりふらりと、風の向くまま散策する。しばらくして、

「あなたも、」
不意に声をかけられた。

声を旋律にのせて奏でるような言葉の出所を追うと、冴え冴えとした月の光を受けて、金色の髪をきらきらと輝かせる、少女の姿があった。

「詩作かしら？」

「か……曹操」

思わず真名を呼びそうになった。

「詩作なんて柄じゃないよ。逃避、かな？」

「あら。勝利の宴から逃げるなんて、なんの罪を犯したのかしら」
クス、と小さく笑い、くるり、と華琳はまわり、ステップを踏む。

「お酒でも飲んだ？」

「ええ。酒に対してはまさに歌うべし、ね」

対酒当歌。後世に伝わる曹操の詩、「短歌行」の一節だ。

華琳は自身の詩に、即興で曲を作ったのせ、歌いながら優雅に舞った。

その姿を見つめていると、少しだけ、感傷的になった。

「俺たちは 勝ったんだよな」

「……」

俺の真意をはかっているのか、少し、沈黙して、

「小さな、小さな勝利よ。それこそ、一杯の酒の理由になる程度の。この先も戦いは続くでしょう。董卓がいるから乱世になったのでも、董卓を操る誰かがいたから乱世になったわけでもない。黄巾党のせいでも、五胡のせいでもない。乱世の根は深いわ。それを癒すには、きつと、たくさんの荒療治が必要でしょうね」

「……この戦いに勝てば、少しは、良くなるのかな？」

「あなたは、どう思うの？」

華琳の、夜明け前の空のような、深い蒼の瞳が、俺を見る。

酔ってはいても霸王は霸王で、その瞳の前に、俺は全てを見透かされているような気がした。

「今より、もつと、悪くなる気がするんだ」

史実においては、董卓が都を焼き払い、行き場を失った連合軍は瓦解、群雄がそれぞれの思惑をもって争いあう世界が出現した。

多くの民が殺され、多くの兵が殺され、多くの将が殺され、多くの英雄が殺された。

それは、地獄みたいな現実で、終わらない戦いの果てに、結局、どの国も残らなかった。

三国時代の終わりは、魏呉蜀全ての滅亡で幕を閉じるのだ。

劉備も曹操も孫権も、自分の国の滅亡を看取ることは無かったけれども……

「乱世はいつそう混沌として、みんなが、苦しむ気がするんだ」

俺の深刻な表情を前に、華琳は、少し考えて、

「混沌……か。たしか、それは、顔のない神の名だったわね」

突然、ファンタジーな事を言った。

「え？」

「神話よ。目も鼻も口も耳も無い、無貌の神だとか………ふふ、それに私たちはもてあそばれるというわけね」

華琳はどこか愉しげな調子で説明し、さらに言葉を継いだ。

「そんなわけのわからないものに呑みこまれてしまうことを恐れるより……それにどう立ち向かい、抗い、制するかを考えた方が楽しいわよ」

「曹操にとつて、この乱世は、楽しいものなのか？」

「ええ。私1人ではどうにもならないぐらいの世界の方が、生きがいがあるじゃない。そして、この乱世を治めることができたらきっと、なによりも楽しいでしょうね」

「……………そう、か」

たとえそれが、親しきものや愛するものを、失う世の中でも、か？

「あなたが、何を知っている、何者なのかは知らないけど」

月を背に、華琳の蒼い炎を宿した目が、俺を映す。

「あなたの知識よりも、あなたが何者かよりも、あなたがこれから何を為すかが重要なのよ。それぐらい、わかっているんじゃない？

ねえ、北郷軍の北郷一刀」

「……………そうだな」

俺は今、未来の知識を得てこの世界に放り込まれた、それだけの人間ではない。

兵を率い、将を率い、仲間と共に歩む、乱世の当事者なのだ。

「ありがとう、曹操」

俺の言葉に、華琳はきよとんとして、微笑した。

「別に感謝されるようなことを言っただつもりはないわ。見た目通り、変な男ね」

「あ……………やつぱり、変だと思つてたんだ」

「ふふ、悪いわけじゃないわ。ただ胡散臭いだけで」

「それって良くないような」

「そうねえ……………またの機会があつたら、もう少し胸襟を開いてもらおうかしら。あなたの正体がかめるぐらいに」

笑みを深めて、曹操は少し俺から距離を取った。

もうそろそろ、就寝の時間なんだろう。顔を逸らして、小さなあく

びを手で隠す。

「ああ。そんな時が来ることを願ってるよ。じゃ、今日は、お休み」
「ええ。明日また、戦場で」

挨拶を交わし、別れる。

それぞれの寝所への数歩。

俺は振り返ることはなかった。

が、密かに、華琳は振り返っていた。

声をかけることなく、じっと、北郷一刀の背中を見つめる。

(何を知る何者か……か)

華琳は思う。

少し前、曹操軍の陣中で、春蘭と秋蘭が話していた。

「なあ、姉者」

「ん？」

「北郷が姉者を助けたとき、北郷、私と姉者の真名を呼んでなかったか？」

「……………ああ、そういえば、呼んでいたな」

「気づいていたか。怒らないんだな」

「一応助けられた身だからな。一度くらいは許してやる。次はゆるさんが」

「……………姉者。北郷に、真名を教えたことはあるか？」

「あるわけないだろう。そんな簡単に真名を許すか！」

「じゃあ、なぜ北郷は真名を知っていたんだろうな？」

「んん？ それは……………ああ、多分、華琳さまが私を呼んでいたのを耳にしたのだろう」

「そうか……………」

秋蘭はその後何も言わなかった。

が、その話を何気なく聞いていた華琳と、秋蘭本人は気付いていた。確かに、華琳が夏侯惇の真名を北郷の目の前で呼んだことはある。

だが、夏侯淵の真名を北郷の前で呼んだことは、一度もないの

だ。

（何を為すかが重要なんで言ったけれど……）
もう、遠くなつた北郷一刀の姿を眺め、

（あなたが何者か、少しだけ、興味があるわ）

華琳は胸の奥にともつた好奇心を自覚して、少し、自嘲した。

（馬鹿ね）

つまらない興味、と断じつつも、華琳はそれを打ち捨てようとは思わなかった。

自分自身の矛盾を、客観的に見て、面白がる気持があつたからだ。けれど、その矛盾した好奇心の成長した姿が、恋心の似姿だとは、華琳自身もすぐにはわからなかったのだった。

少し時を遡って、孫策軍本営

孫策軍の本営は、酒を酌み交わしながらの、今日の武勇伝披露会と化していた。

孫策が語る、敵軍の火計をくらつてぶち切れて、炎の壁を越え、敵軍の弓兵を蹂躪し追いかけて回したあげく、偶然輜重隊を発見して仕返しとばかりに燃やしてやった話。

黄蓋が語る、孫策を見失い慌てて捜し回り、いつの間にか敵の後方退路を断つていて、逃げる敵をついでに叩き潰した話。

周瑜が語る、袁術と袁紹の逃げっぷりの話。

そして

「それですね、天の御使いさん、あ、一刀さんっていうらしいんですけど、一刀さんがたつた1人で呂布に挑み掛かつたんです。もちろん、とても相手にはならなかつたんですけど、強敵を前に全然怯んでいなくて！」

「ほ、北郷がねえ」

「なんと、ただの孺子では無かったか」

「へー、やるじゃない」

「……」

「それでそれで、わたしが呂布の一撃を受けて武器を落とした絶体絶命の時に、明命っ！　つてかばつてくれたんですっ！！」

「おおー！」

身振り手振りの明命の話に、皆が喝采をあげる。

しかし、1人だけ　見張り役として外に出ている甘寧は最初から除いて　ちよつと不機嫌そうな顔した少女がいた。

「……ちよつと待て、真名をゆるしたのか？　あの男に？」

孫権が硬い声で尋ねる。

「え？　いえ、ゆるしてはいないのです。多分、咄嗟のことだから真名だつて知らずに呼んだんだと思いますです。でも、助けてくれたときの横顔がすごく凛々しくて、ちよつとだけですな、ああ、この方になら真名をゆるしてもいいかな、なんて思ったり……えへへ」

頬を染めて、明命は、自分の武勇伝そつちのけで一刀の話を続ける。

「……むむむ」

蓮華は、自分が何故それに不機嫌になっているかわからず、余計不機嫌になった。

「あらら……」

それを見て取り、孫策は頬を掻いた。

（蓮華の相手に……なんて思ってたけど、なんだか大人気ね。多分、劉備軍のなかの誰かも、一刀のこと想ってる子がいるだろうし）

『っ、くしっ！』

『くしゅん！』

その瞬間、劉備軍のあちこちでクシャミがおこったという。

（蓮華の婿、なんて勝手に決めたら大騒動になりそう。争いの火種

ね……。ん、でも、これを逆用すれば、一つにまとめられる？
突拍子もないか。あの子を中心に国を……。なんて)

天才的な嗅覚で、常人の想像も付かないやりかたで戦い、政治を行
う孫策も、さすがに、自身のとんでもない発想に、苦笑した。

(何にしても、まだまだ先の話……。ふふ、頑張りなさい。色々
ね、蓮華……)

一瞬、英雄ではなく姉の顔をして、妹のふくれっ面を眺め、忍び笑
い。

孫策軍の夜は、こうして更けていったのだった。

明けて翌日、董卓軍虎牢関本営

「撤退、やな」

体の何力所かに包帯を巻いた張遼が、呟く。

「……」

重重的い空気の中、全員が、俯くように頷いた。

賈馮が、寝ていないのか、疲弊した様子で、戦略を示す。

「今日か……。もって明日には陥落するわ。いくら虎牢関でも、十万
以上の兵におされたらもたない。頃合と見たら退いて良い。何度も
確認しているように、長安へ向かうこと。そうね……。足の速い霞を
先頭に。恋、わるいけど、殿をお願い」

「………わかった」

こくり、と恋は頷く。昨夜の傷は浅かったようで、霞と比べてどこ
にも包帯が無い。

「……… 呂布の殿に文句言わないのね、陳宮」

「呂布どの以外に任せられる将が、もう、いないのです」

「……… やっぱり、気づいていたわけね」

「何も言わないから、こっちで推測しただけなのです。今や、私た

ち以外、まともな将も軍師もいないって」

「……そうか」

「……………」

霞も、恋も、特段衝撃を受けた様子もなかった。

「……………」 本当にどうしようもなくなったら、降伏して良いから」

「な、何を言ってるんや、詠っ！」

声に力の無かった霞が、初めて大声を出した。

「月も、あなたたちまで失いたくないと思っっているに違いないわ」
気丈な詠の声が震えた。

涙こそ無いが、もう、限界を示していた。

「今日一日や」

飛龍偃月刀の柄頭で床を叩き、張遼が、拳を握る。

「今日だけ、ここを保てば、月も逃げられるし、ウチらも安心して
長安へ行ける。ええか。今日駄目なら、詠の言つとおり、降参も選
択肢の一つに入れようやないか」

今度は、誰一人頷かない。

張遼も、別に同意を求めてはいなかった。

「なにせよ、死に花を咲かそうなんて思わないで。それだけは、
本当に、誰も望んでいないんだから」

「ん……………」

恋がこくりと頷き、霞を見る。

霞は、内心を見抜かれた気がして、小さく舌打ちした。

今日一日保てるなら

霞は、玉砕してもいいような、そんな気がしていたのだった。

「わかった、わかった。暴れるだけ暴れて、駄目とわかったらすぐ
逃げるわ！ そんな単純な戦いや。ふん。というか、戦いなんてみ
んなそんなもんや！ 死ぬなんて阿呆らし！」

霞はそういつて、その場を離れた。

恋と音々音もそれに続いた。

「……………」それでいいわ。月をこれ以上、悲しませたくないもの」

誰に言うでもなく、独白して、詠は虎牢関から去り、洛陽へと向かった。

撤退のために、生き残るために、最後の足掻きへ向かう。

賈馱が虎牢関を出てからすぐに、戦闘が起こった。

勝敗は既に決まっていた。

あとは、それが結果として出るのが、いつになるかということだけだった。

連合軍は、野戦では出せなかった攻城兵器をふんだんに使った。

投石機、雲梯、撞車、井闌車

董卓軍にとって頼もしいはずの城壁城門を揺さぶり、打ち砕き、乗り越える。

もはや、呂布や張遼のような、1人の将が戦況を動かせる状況には無かった。

その日のうち、まだ日の高いうちに、あっさりと虎牢関は陥落した。孫策軍が最初に虎牢関を突破し功を上げ、曹操軍は守将の1人胡軫を討ち取って功を上げた。

呂布、張遼、陳宮は撤退しつつ、散発的に連合軍を足止めして最後の役目を果たし、長安へと進路を変更した。

孫策軍はいち早く洛陽へ入城せんと進軍。

曹操軍は

「追撃しろですって!？」

「は、はいっ、洛陽は袁紹たちに任せろ、と」

「あの呂布を追撃なんて、簡単に言ってくれるわね……」

「でも、これを逃して自由にしたら、厄介な将であることも確か……」

「わかったわ。でも、一軍だけで追撃なんて無茶よ」

「華琳さま! 劉備軍と鮑信軍が追撃に加えるよう申し出てきています!」

「劉備と鮑信が? ……ありがたいわ。では、我らは董卓軍の追撃

にうつる！！」

事態が大きく動く中、俺は、馬超や公孫賛たちと共に洛陽へとひた走っていた。

虎牢関へ向かっている時、馬超に、虎牢関を突破したら洛陽まで最高速で連れて行って欲しいとお願ひしていた。

馬超の速度について来られるのは、馬超軍、そして公孫賛と、その軍の一部だけだった。

俺は桃香達には、葉雄　華雄を連れて董卓軍を追い、降伏させられるなら降伏を、と伝えて、別行動を取った。

呂布とのがあつて心配そうだったが、馬超と趙雲が一緒だという事で納得してもらった。

「でも、洛陽に何かあるのか？」

俺を一緒の馬に乗せ、洛陽へ向かう道の途中で、馬超が尋ねる。

「……捜し人、かな」

月、董卓たちは、逃げている可能性も高いが、もし洛陽に残っていたら、危険であることは言うまでもない。

董卓を助けて得られるものはなにもないが……。

昨夜の曹操との会話を思い浮かべる。

董卓を倒しても意味はなく、助けても、乱世の何かが変わるわけではない

でも。

何を為すか、と問われたら。

俺は、あの悪夢の中で死んでいった少女を救う、と答える。

それが、多分俺がこの世界に戻ってきた理由だから。

だから、今絶望の中にいるだろう少女を見捨てるわけにはいかない。

月　！

ついに見えてきた都、洛陽のどこかにいる少女の無事を、強く、祈った。

虎牢関陥落の少し前、

洛陽、朝議の間

「月っ！ 早く、早く支度して！」

「う、うん！」

月は慌てて、予め揃えていた旅支度に着替え、最小限の荷物を用意した。

「いい！？ ギリギリまで待つけど、虎牢関が陥落したらすぐ出るからね！」

「で、でもっ」

「でもは無し！ 大丈夫よ、ちゃんと霞たちに指示は出してあるし。洛陽の街に残る人には手を出せないように、私たちが洛陽をでたら、ただちに降伏するように指示を出してあるわ」

「うん……」

本来入ってはいけない所にまで馬を寄せて、洛陽脱出の準備は万全

「董卓様っ！ 虎牢関が陥落いたしました！！」

伝令が凶報を伝え、緊張が高まる。

「月っ！」

「う、うん！」

朝議の間を脱し、前庭へ。護衛の兵士達に囲まれ、脱出経路の最終確認、女子供から逃して、順番を待っている最中

「なっ！！？」

前庭から見下ろす洛陽の町並み、見納めと思いきや感傷をもって一望している、異常事態に気付いた。

「だ、誰が街を焼き払えと言ったの！！！」

洛陽のあちこちで、火の手が上がっていた。

「は、ははっ！ こちらからは何の指示もしておらず、現場の兵の判断かっ」

「そんな馬鹿なこと……っ！！ 止めさせなさい……」

「しかし、今から指示を出していたら脱出が」

「くっ、わかったわ。月を先に逃がして。私が残るわ」

「賈馱様!？」

「いいから、早く指示を!」

「はっ!」

伝令が飛びすつ飛んでいく。頭を掻き、月になんと言えはいいか考
えながら振り返り

目を見開いた。

「月は!？ 月はもう脱出したの!？」

前庭に月の姿が見あたらなかった。

脱出に向かったかと思っただが、月を護衛するはずの兵がまだここに
残っている。

「ど、どういうことっ!」

焦って、何度も、何度も視線をめぐらせ、何か忘れ物かもと朝議の
間へ向かうがそこには誰もいなかった。しかし、不自然に、部屋の
中央で何かが光った。

「月の、月の髪飾り !？」

それは詠があげた、月の宝物だった。大事にしまって、脱出の時も
ちゃんと持つて行くと荷物に入れていたはずの !

「ここに誰か不審な者は来なかった! !？」

前庭に戻り、尋ねる。

「い、いえ! まったく! !」

「くっ……そんな……こんな少し、目を離しただけなのに……、一

体誰が、誰が、月を連れ去って」

誘拐。

いや、誘拐だけならまだ良い。

そのあとどうなる? 連れ去られた後、月が無事である保証なんて

……どこにも……無い。

洛陽のあちこちであがった火の、灰が舞ってきた。

それが目に入り、詠は、目元を拭った。

「ひっ………っくう」
しゃくりあげる。

耐えに耐えていたものが、決壊した。

「く………うう、月、なんで、こんな………うう、」

涙が、袖を濡らす。

「………う、うう、うあ、うあああああああああああ！
！」

人目を憚らず、詠は、泣き叫んだ。

洛陽までもう少しというところで、洛陽の城壁内から、煙が上がっているのが見えた。

「なっ、………まさか、都を、街を焼いているのか！！？」

馬超が驚きと憤りの声を上げる。

「北郷！ どうするんだ！ このまま洛陽に入ったら」

白蓮が叫ぶように質問する。

高速で移動しているため、声が出しづらい。

「入って見なきゃ、わからないっ！」

「っ………そりゃそうだっ」

洛陽目前まで来て、門が完全に開いていることに気付いた。すでに孫策軍の先鋒が来て開門させたのか、それとも最初から開いていたのか。

「馬超軍、半数は馬を下りろ！ 前後左右を警戒しつつ入城だ！」

「公孫贇軍、続くぞ！」

「承知ッ！」

俺たちは洛陽の街の中に入った。

俺は、月、それと詠の特徴を伝え、皆で搜索してもらうことにした。
「火の手が街のあちこちにまわっている。気をつける。消せるなら消してまわりたいが、火が多すぎる………」

日が没する前になんとか

俺は馬を大通りにすすめ、一つ一つの通りを見て回る。
いない。いない……。いない……………。

もう洛陽にいないのかもと思いつながら、目を皿にして、捜す。

「北郷っ！ 中央の政庁を囲う壁の内は孫策軍が占拠、政庁は空っぽだったそうだ！！」

馬超からの報告を聞き、安堵と、失望が同時に襲ってきた。

まだ孫策軍に捕まったのなら、密かに助命を嘆願する余裕もあったかも知れない。だが、これから洛陽に入る袁紹や袁術の軍に捕まったら

「っ！」

「あ、北郷！！ そっちはもう火の手が！」

気付くと、洛陽の三分の一近くが、燃え始めていた。ますます、俺は焦る。

馬を飛ばし、確実性を損ねながらも、急いで捜す。

「！？」

洛陽の街の隅、兵士達がかたまっていた。

「どうした！？」

馬を降り、兵に尋ねる。

「あ、北郷様！」

「あ、あの、あそこの でかい井戸の様子がおかしくて
兵達は取り囲んだ井戸を指差した。

たしかに、その井戸は異様な雰囲気醸し出していた。

一言で言えば 死臭が、漂っているのだ。しかも、下手な戦場よりも、濃い。

ごく、と唾を飲む。

恐れる兵を背に、歩み寄り、息を止めて、井戸の中を覗く。

井戸は深い暗闇で、なにも見えなかった。

「あ、明かりと、縄を！」

体に縄を結わえ、兵達に支えてもらい、井戸の中へと降りる。

死臭はより濃くなり、吐き気をもよおしそうだった。

松明を掲げ、底を照らす。一刻も早く戻りたくて、急いで目視確認

「っ!?!」

井戸の底は、気のせいか死臭が無く、むしろ、清涼でさえあった。

暗闇の奥底。冷たく、清らか、どこか神秘的で、神聖ささえ感じる場所。

そして、そこに

手をのばす。届かない。もう一度

捕まえた。

「……………引きあげてくれ」

俺の言葉と共に、縄が引つ張られた。縄が食い込んで、体が軋む。いつそバラバラになってしまえ、と思った。

やがて井戸の縁まであがり、外へと転がり落ちた。

「だ、大丈夫ですか」

「ああ、ありがとう」

「何かありましたか!?!」

俺の様子に、何かを感じたのか、兵が気遣う声を掛ける。

「いや……………なにも、無かったよ」

「北郷様っ! こちらにも火が回ってきました。一旦、洛陽の外へでましよう!」

兵に促されるまま、俺は駆け出した。

拳を開き、それを見て、もう一度握る。

「こんなものが」

俺は怒りと悲しみを吐きだした。

「こんなものが欲しかったんじゃないっ……………!?!」

俺は、震える手で、玉で作られたそれを、握り締めた。

それは、「受命於天 既寿永昌」と彫られた、玉璽だった。

これを得た者が天下を得るといふ、皇帝の証し。

秦の始皇帝からつたえられたといふ、伝国の玉璽。

それがいま、俺の掌中にあつた。

けれど、月の手を掴もうとして伸ばした手で、こんなものを拾つて、何になる？

天下を得て、少女を失う？

それは。

それは、あの地獄と似ている、と思つた。

この外史は、北郷一刀が、全力でとある少女を救う物語。

この戦いをもって、物語の序章は終わる。

混沌は深まり、乱世は次の舞台へと移る。

それは地獄への道なのか、それとも誰かを救える道なのか。

一刀は、まだ、なにもわからなかつた。

外史『無銘伝』、序章／完

……どこをどう歩き、ここに至ったかは覚えていない。

振り返れば、街の半分近くが焼失した洛陽が見える。

もう、涙は出なかった。

歩いて、歩いて、歩いて、足が棒のよう。

「……月」

それでも進む。

小さな望みを杖に、少しでも前へ……。

ふと、大地に影が差し、誰かが自分の近くにいることに気がついた。顔をあげる。馴染みの顔がそこにあった。

「……………無事だったか、詠」

真名を呼ぶその声も、聞き覚えのあるもので。

「なによ……………あんた、生きてたの……………華雄」

その女は、風貌こそ見慣れた衣装ではなかったが、確かに董卓軍の将、華雄だった。討ち取られたと聞いていたが。

「どこへいくつもりだ？」

いままで何をしてきたかの釈明もなく、尋ねる。

「……………長安よ。月を、月を追わなくちゃ」

詠もまた、詰問する余裕など無かった。

「月は、長安にいるのか？」

「……………」

そんなこと、詠にもわかるわけがなかった。

華雄は、その沈黙に何かを感じたのか、

「今、私は劉備軍の捕虜になっている。気に入らないこともあるが、まあ、悪くないところだ……………」

「ふうん。てつきり、逃げ出てきたのかと思ったけど」

「最初はそのつもりだったがな。このまま逃げて、董卓軍の捕虜は

隙あらば逃げ出すなんて情報が蔓延したら、面倒だ」

「……………そうね」

暗に、恋や霞、音々音や詠の事を心配しているのだろう。もし、連合軍に捕まっても、命だけは無事で済むように。

「おまえも、北郷……………劉備の所へ来るか？ 連合軍は追撃こそ諦めたが、まだ、長安へ行くことを諦めたわけじゃない。劉備は、董卓、月が、悪政をもって民を虐げていたわけじゃないことにも気がついてる。お前のことも、悪いようにはしないはずだ」

「ん……………」

華雄は、董卓軍の残兵は長安にいるものの、もう、再起の目はないとみているのだろう。

だから、はやく降伏して命を長らえるべき、とすすめているのだ。それもいいかもしれない、と詠は思ったが、首を横に振った。

「……………できれば、早く、長安に行きたいの。月の所に……………。でも、劉備という名前、覚えておくわ。ありがとう、華雄」

そう言っつて、詠は歩いていった。

「……………詠」

華雄は、いつもと様子の違う賈馱を前に、それ以上何も言えなかった。

長安まで馬も無しにいくなんて、無茶だと思ったが、止められる気がしなかった。

そうして、賈馱と華雄は別れた。

華雄は先程の言葉通り、劉備軍のもとへ。

そして賈馱は

「……………あ」

華雄と会った場所から、どれぐらいの距離を歩いただろうか。

詠は、風を受けて揺らめく何本もの旗が、近付いてくるのに気づいた。

連合軍……………！？

詠は逃げようと思ったが、もう走る力もなかった。

近付いてくる。
旗が。

その旗がしめす軍の、噂だけは聞いている。
乱世の奸雄。

曹操軍の旗だった。

逃げ出すことも、前に進むこともできず、詠はその旗と軍勢が近付いてくるのを、ただ、立ち尽くして、見ているだけだった。

「月……」

最後に、愛しい少女の名を呟いて、詠は目を閉じた。

大陸の南方、荊州

「董卓軍が、破れたそうだな」

「ええ……」

2人の女性が、少量の酒と、大陸の地図を前に語らっていた。
年の頃が同じぐらいの、親しげな2人。少女とはいえないが、まさに「女」といった雰囲気を持つ彼女らは、遠い目をして言葉を交わす。

「戦が終われば孫策軍も帰ってくる。わしらも、どうするか決めなくてはな」

「……孫策軍と戦うか」
「降るか」

女の1人、美しい紫の長い髪をもつ、麗しき女性が、溜息をついた。
「孫策軍に勝てるだけの力はない……じゃあ降伏か。孫策がどんな人物か、まだよくわからなくて」

もう1人の女、緩やかに波打つ髪に簪を挿し、露出の多い服を着ている美女が、それに応じる。

「そうさなあ……いろいろ噂は聞くが、少々、乱暴なところがあるように見えるがな。まあ、民にとっては頼もしいといえるが」

「乱暴なのはちょっと……いっそ、他の誰かの所に、身を寄せようかしら」

「ふむ。そうだな。わしらは、益州を奪われ、お主の所を頼ってきた。できるなら、天下を平定し、慰撫できるような、力と徳と、それを願う意志のある者のところに、仕えたいものだ」

「……いるのかしら、そんな理想的な人」

「さて……噂からあげれば、曹操という名がまず浮かぶな」

「そうね。理想的、といえば、彼女はその通りなのでしょうね。文句のつけどころがないわ……私にとっては、だけど」

「なんだ？ 何か含むところでも？」

長い髪の女は、ちら、と部屋の隅の方を見る。

そこには寝台があつて、1人の童女が健やかな寝息をたてていた。

「……教育に悪そう」

「ああ……なるほど」

曹孟徳、女色の趣味あり。これは有名だった。

「となると、袁紹や袁術は無いとして、馬騰のところは遠すぎる。

最近聞く公孫賛も北の彼方。ふむ……残るは、劉備か」

「劉備……」

少しのあいだ、沈黙がおりた。

酒のみ、熱い吐息を天に放つ。

「力はともかく、徳もあり、意志もある」

「……そうね。けれど、力がなければ、また、泣くことになるのかもしれない」

2人のいままで生きてきた人生が、理想の甘さと苦さを、肌身にしみこませていた。色を知る艶めいた肌は、痛みもまた、知っているのだった。

「力……か」

その日、それ以上2人の議論が進むことはなかった。

「始まったな」

額に妙な紋様を浮かべた短髪の少年が、口を開く。

「……終わりの、はじまりですか」

眼鏡をかけた青年が、顎に手を添えて、呟く。青年もまた額に紋様を浮かべていた。

「これで、この忌々しい外史とおさらばできる」

「……左慈、あなたはそれでいいのですか？」

「当然だ！」

左慈と呼ばれた少年は、吐き捨てるように言った。

「お前も、そうは思わないのか、于吉？」

「……」

青年、于吉は、なにも答えず、ただ眼鏡の位置を直した。

「ふん」

左慈はおもしろくなさそうに、その場から離れた。

「あの御方ならやつてくれる。外史は全滅だ！」

そういつて笑いながら、左慈はどこかへと消える。

于吉はそれを見送り、左慈が見えなくなってもなお、沈黙した。左慈の笑い声だけが響き、それも聞こえなくなると……しばらくして、重々しく、于吉が言葉を紡ぐ。

「しかし、この外史……とても一筋縄ではいきませんよ、左慈。英雄たち……そして北郷一刀、彼がどう動くか……」

于吉がそこで口を噤むと、また沈黙が降りて、于吉はもう、何も言わなかった。

洛陽を望む、とある山にて

ひとりの少女が、軍を率い、その山にいた。

燃えさかる洛陽を見ても、表情一つ変えず、嘆息一つもらさない。
少女は後ろを振り返る。

そこにはたくさん兵がいた。

この時世、兵集団など珍しくもないが、異様なのは、その兵達にまつたくと違っていいほど統一性が無いことだった。

少女は手をかざす。

それが何かの合図だったのか、兵達が動く。

兵達は、山のおちこちに穴を開けており、そこになにかを放り込んでいた。

それは服であつたり、旗であつたりした。

旗には、「董」「牛」「郭」「王」などの文字が描かれていた。

やがて、穴になにもかもが入られると、少女は、あげていた手を振り下ろした。

兵が、穴に火を放つ。

火は、穴の中の色々な物を焼き焦がす炎となった。

少女は、無言でそれを見届ける。

燃え尽きて灰になるまで。

その炎は、洛陽の火に比べれば小さなもので、気に留めるものなどいなかった。

けれど。

やがてその火が、大陸の全土を焼き尽くすことになるうとはこの時、誰一人、知るよしもなかった。

ただひとりの少女を除いて。

第5話 北郷伝 くその名は混沌く（後書き）

お待たせいたしました。第5話です。

書きたいものを全部つめこんだら三万文字以上になりました。

四万文字以上は1話に詰め込めないのです、ちよつと危なかつた……。本編にも書いたように、これで序章は終わりです。

大体序章含めて序破急で三章構成かな、と考えています。まだ先のことなので、あまり厳密には決めていませんが。

名前が出てるのに全然セリフが無いキャラがたくさんいるので、次の章では活躍させたいなあ、と思っています。誰か取り上げて欲しいキャラがいたら、言って頂ければ、対応できるかも知れません。

とりあえずこれからオマケとかの補完に入るので、第6話がいつ完成するかは、ちよつとわかりません。進捗は自分のサイトの方（特に掲示板）にのせておりますので、よかつたら見に来て下さい。

それでは。

欠史1 華雄（葉雄）伝 華の名は？（前書き）

無銘伝第5話と第6話をつなぐ、華雄の挿話です。

作者はPC版無印恋姫と真・恋姫、萌将伝、アニメ恋姫（真の方はまだ見てません）だけ見たのですが、華雄って真名はないんですね？

18禁のオマケのつもりで、「4ノ華雄尋問ハード？」を書いたんですが、書いてある途中で、あれ？これ18禁じゃない？って疑問がわきまして……判断がつかなかったのでアップしましたが、もしアウトっぽかったら、4を削ってあげなおそうと思います。

5月中に書けるとか言っておいて6月になっちゃってすみません。

r z

欠史1 華雄（葉雄）伝 く華の名はく

- 1 / 陽は落ちて暮れても
- 2 / 豪傑葉雄伝
- 3 / 葉擦れの音と一緒に
- 4 / 華雄尋問ハード？

1 / 陽は落ちて暮れても

董卓軍が洛陽を焼き払い撤退した後、洛陽郊外で、劉備軍と天の御遣い、北郷一刀が合流した。

一刀は、見た目なんの変化もなく、桃香達と共に陣を張り、都の消火活動を指揮していたが、よくよく見ると、憔悴した雰囲気が見出していた。

「大丈夫かな……」

桃香や愛紗が不安そうな声で囁き合っている。

「ふん」

葉雄は 前の名を華雄という劉備軍の将は、それを横目に、北郷一刀の元へ歩みよった。

「ん？ どうかした、葉雄？」

葉雄の見たところ、一刀に変わった様子はそれほど見られなかった。じっと見続けてかすかに感じ取れるぐらいだ。

（共に過ごした時間の違いか）

葉雄はちよつと不機嫌になった。

「何かあったのか」

「……あはは、皆から心配されてるなあ」

一刀は頬を搔いた。

「董卓、いなかっただな。それがちよつと残念だなあ、なんて」

「はあ？ それだけか？」

葉雄は肩をすくめた。

「それはそうだろう。一軍の主が、燃やすと決めた都に最後まで残っているわけがない。長安にとつと撤退したに違いない」

「……うん。そうだよな。うん」

北郷一刀は、素っ気ない葉雄の言葉に、なぜか嬉しそうな顔をした。

「お前……まさか、董卓と面識があるのか？」

「内緒だよ。……あつちは俺の顔知らないけどね」

「……？」

葉雄は首を傾げ、しかし、それ以上質問は重ねなかった。

劉備軍は消火を続け、燃えても壊れてもいなかっただ主無き屋敷を仮に接収して、一息ついた。

「明日は私の元部下たちにも手伝わせて良いか？」

庭に据えられていたベンチに座り、遠くの空、日が沈みつつある赤い空をぼうつと見ている一刀の隣に、葉雄は座った。

「ん……そうだな。問題はないと思うよ。武装は解除してあるしね。念のため、桃香と朱里の許可を得てくれ」

「わかった」

2人は並んで、黄昏の空を眺めた。

昨日今日、血や炎を見飽きるほどに見てきたせいか、夕焼けはどこか苦い。

葉雄は、感傷的になっっている自分に気づいて、苛立ちをおぼえた。

こいつが隣にいるせいだ

「お前がそんな顔をしていると、癪に障る！」

葉雄は立ち上がったって、人差し指を一刀の目の前に突きつけた。

「な、なんだよ急に」

一刀はあつけにとられて、後ずさった。

「辛気臭い顔をした将のもとでは部下も働きたがらん。ただでさえ、

天の御遣いなどというわけのわからんあだ名なのだ。もっと、鷹揚に構えろ」

「そんなひどい顔してるかな」

「ああ。おまえたち……いや、わたしたちは勝ったのだらう？ 喜ばなくても良いが、もっと余裕のある顔をしる。こんな夕空でも、いまから一日が始まるぐらいの顔でいろ！」

「う、うん」

自分の顔をなでさすり、一刀は薄い笑みを浮かべた。

「こんな感じかな？」

嘘くさいその笑顔に、葉雄はぷつと吹き出した。

「気色悪い！」

「な、なんだそりゃ！」

一刀はがくつと肩を落とすが、あっはっはっ、と大笑する葉雄の顔を見て、一刀も思わず相好を崩し、互いに笑い合った。

陽は落ちて暮れても、暗闇の中、花は花としてあるように。

戦に疲れ果てても、微笑むだけの、最小にして最大のエネルギーは、ちゃんと残っていた。

それを喜ぶように、2人は長く、笑い合った。

2 / 豪傑葉雄伝

虎牢関の戦いが終わり、董卓軍が長安へと撤退してからしばらくたった、とある日。洛陽へと続く道を歩く、1人の女の姿があった。大股でずんずんとまっすぐ歩む女の姿は、出で立ちこそ他の町娘と変わらないものだったが、その奥に潜むただならぬ雰囲気は、まぎれもなく、武将のそれだった。

彼女の名は葉雄。昔の名を華雄という、劉備軍の将である。

かつては董卓軍に身を置く歴戦のものふであったが、？水関で北郷一刀によって討ち取られた、ということになっている。公には、

華雄という名は死んだ名だ。

彼女を捕縛した北郷一刀が、咄嗟の機転で死んだことにし、名前を変えて、仕えさせたのだ。

華雄改め葉雄は、それ以後、装いも変えた。軍装を肌の露出の少ない、大人しい物に変え、髪も少し伸ばした。遠目から見れば、董卓軍の昔馴染みであつてもわかるまい。

とはいえ、性格や行動は外見ほどすぐに変化しない。

「他軍に気づかれぬようにしていてくれれば、いつもの華雄でいいよ」

とは、主、北郷一刀の弁である。

しかし、葉雄も、少しはその点を気にしてはいるようで……

「っと！」

何かに気づいたかのように、葉雄は立ち止まり、すぐにまた歩き出した。今度は、ゆったりとした、常人にとつて普通ぐらいの歩幅で。

「普通……普通か」

葉雄は頭を掻いた。

劉備軍の軍師、孔明や鳳統に尋ねたところ、目立たないように、とは、普通に、ということらしい。そして普通とは、普通の女のように、ということらしい。

「普通の女……」

別に董卓軍の武将であつたときも、女を捨てたわけじゃなかったのだが。

「女らしさ」なんてものは、他者の勝手なイメージに過ぎず、葉雄はそんな他人の押しつけがましい形式を拒否しつつ、自分の中の理想の女像を実現したつもりだつた。

だが。

「女らしく、か」

なぜか、あの男の顔が脳裏に浮かんだ。慌ててぶんぶんと首を横に振る。

「阿呆らしい」

と、言いつつも、豪快な歩き方には戻さず、静々と音も立てないぐらいの歩みのまま、洛陽城内へと入る。

洛陽の都城内は、連合軍の修復によって、ある程度回復していた。袁紹や袁術は飽きたのかほとんど関与しなくなったが、劉備や曹操、孫策が中心となつて、今も修復が続いている。

反転攻勢を狙っている董卓軍の呂布や張遼に対抗するため、外城、出城、砦を増設、修復し、やや安全になってきた洛陽には少しずつ人が戻ってきていた。

「お？」

葉雄は足を止めた。

その視線の先には武器屋があつた。

軒先には新しい槍とか矛、剣がそろつていた。武器は各軍の管理下にあるので売買は禁止されているはずだが、予備を含めて大量に必要なため黙認されているようだ。

とはいえ、弓矢、弩のような遠距離武器は優先して軍に流されているのだろう、まともなのは見あたらなかつた。

「お、なにかご入り用ですか？ 護身用で？」

葉雄の様子を見て取つて、店の主人の親父が近付いてきた。

「ん、いや……そうだな、何かがあるか見せてくれるか」

お気に入りの自分用の戦斧、金剛爆斧は修理中だ。一刀に柄を斬り飛ばされてしまったこともあるが、華雄の象徴ともいえる武器で目立つため、急いで直す気もなかつた。

「では、お客様なら……と、こんなのはどうです？」

一振りの剣を、親父は差し出した。小刀と大刀のあいだぐらいの剣だ。

「なんだそれは？」

「なかなか良い物ですよ。片手剣としては大きいですが、女性でも扱いやすい両手剣で」

「小さすぎる」

葉雄は片手でぶんぶんと振った。

「え」

「ぼかん、と店の親父は口を開いた。

「戦用の斧か槌がいい。60斤以上だ」

「ろ、60斤!？」

「60斤以上となると男用としても重い。

「で、では店の奥から出していきますので、少々お待ちを……」

「当惑した表情を抑えきれないまま、店主はひっこんだ。

「……はっ!？」

葉雄はそれを見て何かに気づき、慌てた。

「こ、これが普通じゃないということか!?!」

まあ、普通ではないだろう。60斤となると、10キロ以上の重さになる。持つのは無理ではないが、使うのは無茶である。

葉雄にとつては楽なものだし、劉備軍の関羽や張飛はそれ以上の重さの得物を軽々振り回すが……。

「くむむ……」

「女らしい、普通の武器とはさっきの剣のようなものだろうか。だがあれでは玩具みたいで、頼り無いのだが……。」

「……」

葉雄は服を捲って、腕を露出した。

「筋肉……いや、そんなにはない。ないはずだ」

「さわってみるが、筋肉の堅さのうちに柔らかさのある、女性らしい腕だった。だが、葉雄には他の女性の標準がわからない。

「さらに服の裾に手を入れ、他人に見えないように、おなかの肉を触ってみる。」

「無駄な脂肪のない引き締まった肌。つまんでも、皮ぐらいしか引張れない。つつくと、ほとんど沈まず、はね返される。」

「これは、いいのか?」

「駄目だ。わからない。もういちど孔明達に訊くべきかも知れない。いや、関羽や劉備に訊いてみようか……。」

関羽は自分と同じぐらいの体型で同じ武人だし、劉備は体型が似ていて半ば文官。良い比較対象になるかもしれない。

朱里、雛里は頭は良いが、小柄なうえ文官で、共通点がない。鈴々は小柄で武官、比較も難しければ、助言も期待できないだろう。

「あいつは……どっちがいいんだ？」

小さいのと大きいのかたもとやわらかめ。

「……いや、あいつは関係ない！ あいつの好みの問題じゃない！」

また首を横に振り、一刀の顔を頭から追い出す。

「あ、あの、持つてきましたが……」

店主と店員が、2人がかりで持つてきた戦槌を抱え、怪訝そうに葉雄を見ていた。

「む」

こほん、と咳払いして、それを受け取る。

「おお！」

2人で持つていた大槌を、1人で持ち上げた姿を見て、店主達は驚きの声を上げた。

「振ってみるから、少し離れている」

よけてもらって、安全を確認してから、振り上げ、振り下ろす！

ぶおん、という風切り音のあと、戦槌は地上すれすれで止まった。

無理矢理持ち上げて落とすように下ろしたら、確実に地面に激突していただろう。それを防ぎ、戦槌をとめたのは、紛れもない葉雄の力だ。

「おおー！！」

喝采と拍手が響いた。観客は2人しかいないから地味なものだが。

「なかなか良い物だな。これをもらおう。劉備軍の本営に、葉雄の名で運んでくれ」

「かしこまりました」

「……それと」

口ごもりつつ、ちらり、と店先を見る。

「さっきの剣、女用だったな？」

「は、はい」

「では、あれも……いや、あれは護身用だったな。壊れやすいのではないか？」

「はい。確かに。作りはよいので良く切れるのですが、何かにぶつけてしまうと、欠けやすいものです」

「戦用の長刀……いや、いつそ短剣にしよう。それなら荒く使って壊れても、複数携行していけば問題ない。短剣を見せてくれ」

「はい！」

店員がそそくさと店先に並べた短剣を数本かきあつめ、持つてくる。

「ふむ」

そのうちの1本を握り、華雄は肩の辺りまで持ち上げ、振り下ろし

スポット

「あ」

すっぽぬけた。

短剣は空を切り裂き、路地を隔てた向こうの壁にぶち当たり突き刺さった。

「……………え」

「おっと」

軽く放っただけなのに、思い切り投擲したぐらい深々と突き刺さった。

「刺さってしまったな。すまん。金はあれの分も払う」

「い、いえ」

あらためて、もう一振り短剣を握り直し、葉雄は思索した。

（今、たまたますっぽ抜けて突き刺さったが、投擲武器としては、ありかもしれんな）

葉雄は、店員の手短剣を戻す。

「や、やはり軽すぎますか」

「いや、これでいい。これと同じ物を、そつだな、とりあえず10本、さっきの槌と同じ所に同じ名で頼む。ではな」

「はいっ!!!」

店員達は直立不動で葉雄を見送った。

(ただひとつの武器にこだわるのもいいが、様々な武器に精通し、手練手管をもって戦う姿というのも、女らしい、かもしれん。うむ。)

その日以降、劉備軍に葉雄という名の豪傑あり、という噂が流れ始める。

しかし、劉備軍ならよくあること、というツツコミによりその噂は沈静化されたという。

3 / 葉擦れの音と一緒に

連合軍が洛陽を占拠して少し後。

劉備軍がねぐらとしている屋敷にて。

「ふう」

朝から昼にかけての中庭での修行を終えて、華雄は水を飲み、厨房へと向かっていた。

訓練用の重い槌を振り続けたせいか、汗が全身から吹き出ている。

「あ、葉雄さん」

誰かに呼ばれて葉雄が声のしたほうへ向くと、朱里が手を振っていた。

中庭の隅につくられた東屋で、朱里と雛里がお茶をしているようだった。

「おお」

片手をあげて、葉雄は東屋へと足を向ける。

東屋は小高い丘の上に作られていて、庭を見ながら休むのに適していた。

「軍師2人そろって休憩とは、珍しいな」

「はい。最近ようやく政務も軍務も落ち着いてきているんですよー」
雛里が答える。

2人は同じ軍師ではあるが、どちらかというとなると朱里が政務担当、
雛里が軍務担当という役割になっている。

「……」

貴重な優雅な一時の邪魔にならないか、と、葉雄は少し、近付く
のを躊躇した。

「？ 葉雄さん？ こっちに水を汲みましたよ？」

朱里が首を傾げる。

「ん、いや、訓練の直後だから、ちよつとな……」

匂いが気になるらしく、葉雄は二の腕を顔の近くに持っていき、
鼻をひくつかせた。

「あ、汗ですか」

雛里がびよびよこと動き、真新しい白布を持ってくる。

受け取った布で手早く汗を拭い、朱里が差し出した水を一口二口。
そうしてやつと落ち着いた。

「すまん」

「いえいえ」

笑顔で応える朱里と雛里を前に、やはり劉備軍は董卓軍と違うな、
と葉雄は思った。

董卓軍の将は、呂布をはじめとして、粗暴とまではいかないが、
他人をそこまで気遣わない。あえていえば、総大将である月 董
卓が1番人をよく見て配慮するが、総大将であることもあって、あ
まり近しく接する機会がなかった。

劉備軍は、トップである劉備・北郷からして親しみやすい性格だ
し、部下も、関羽は例外として、みんなどこか人なつっこい。関羽
も、劉備や北郷が認めた人物なら、そこまで刺々しくはしない。ま
あ、無闇に北郷と接近したりすると、嫌な顔をするが。

(こつこつのも)

と、葉雄は思う。

女らしい、と言うのだろうか？

劉備軍に入って一月も経っていないが、その人当たりの良さは、折に触れて感じられた。最初はその軟弱さに苛立ちも感じたが、ゆつくりとしみわたる湯のような心地好い関係は、それほど悪くないと葉雄は結論した。

とはいっても、葉雄自身が、その真似事をしようなんて思ったりなんてしなかったのだが……。

葉雄は、目の前の、2人の少女を眺める。

2人は、お菓子をつまみながら、お茶を飲み、くつろいでいる。互いに持ち寄ったお菓子を交換し、他愛ない話を泡のように浮かべて、この時間を楽しんでいる様子がよくわかる。

その仕草一つ一つが、愛らしく、少女らしい。

それは換言すれば、弱弱しいという事でもあるし、極言すれば、子供っぽいような気もする。

むかしむかし、自分も、あんな時代があつて、そしてそれを踏み付けて忘却して今の自分になった。どこか胸が締め付けられるような、懐かしさがあつた。

それは唾棄すべきものだ、思っていた。

強くなければ、生きていけないのだから。

生きていけない、弱いままでは駄目なのだから。

だから、葉雄は、軍師というものを軽んじる傾向があつた。1人では兵卒にも劣るその存在を。

けれど、これはこれで

「ぱくぱく……もぐもぐ」

「こくこく……ずずー……ぷはー……」

(いいかもしれない……)

小動物チックな2人を見守りつつ、葉雄は、1人微笑した。

(体型からみれば董卓軍の陳宮や賈馱と変わらないが、この2人は角が無くて丸っこいというか……いや、太っているわけじゃないが)

「あ、葉雄さんもどうぞー」

と、茶とお菓子をすすめられる。

「ああ」

甘い餡を包んだ饅頭や、果物をつまみ、茶をすする。2人にならい、あまり豪快にならないように、少しずつゆっくりと。

それから少し、歓談する。

話題は特に意味のあるものではない。

庭にはいりこんできた猫の話とか、いついつ庭の花が咲きそうだとか、桃香様が寝惚けてご主人様の寝所で一緒に寝てたとか

最後の話は微妙に聞き捨てならなかったが、そんな話ばかりだ。

葉雄は訓練直後で疲労していたし、朱里と雛里は根を詰める仕事の合間だったし、重い話ができる状況ではなかった。

そんな流れで、

「2人はどういう経緯で、劉備と北郷のところに来たんだ？」

過去の話に触れた。

ちよつと繊細な話題かと思ったが、2人はあっさりと答えてくれた。

「荊州からか……それは遠いな。仕えるべき主を見つけて、か。それで何百里も行くお前たちもすごいが……北郷はよく一目で2人を仲間にしたものだな」

荊州から幽州までの距離、ざつと900？。

「はい。ご主人様は、私たちの名前を聞いて、この2人なら、自分たちの助けになってくれると信じてる、って」

「名前を聞いて……」

ふと、何かを、葉雄は感じた。違和感、というか、気付き、というべきか。

「まるで、自分たちを前から知っているように、か？」

「は、はい！ たしかに、そんな感じでした！」

我が意を得たり、という調子で、雛里がこくこく頷いた。

（奴は董卓も知っている風だった。だが、董卓の方は自分の顔を知

らないだろう、とも言っていた……)

葉雄はただ胡散臭いだけだと思っていた男の、影を、踏んだ気がした。

(天の御遣い、か)

黄巾党、太平道教祖と似た印象しか抱いていなかった、その名称が突然、真実味を帯びてきた。

葉雄は唾を飲み込み、深くそのことを考えようとしたところで、

「葉雄さん　華雄さんはどうして董卓軍に入ったんですか？」

と、朱里が尋ねた。

「ん？」

風が一陣、さあっと吹いて、庭の木々が葉を触れ合わせて涼やかな音を奏でた。

「あ、言いつらい事ならいいんです……あの」

朱里は葉雄の顔色を窺う。

「いや……大した理由ではない。お前達ほど理想に燃えていたわけでもないし、誰に望まれたわけでもない」

こくり、と茶を一飲み。

唐突に、あたりが静かになった気がした。

「私は関中……長安あたりの出身で、董卓や馬騰、韓遂なんか周辺に勢力を誇っていた。と、いつても、小さな軍閥も多かったし、異民族なんかも入り込んでいた。私は、無名の軍閥で暴れ回っていた……賊や黄巾を相手にしてな。たまたまだ。時機が違えば、私が黄巾を身につけていただろうよ」

また風が鳴った。

目を閉じれば、駆け抜けた黄土が蘇ってくる。

「黄巾の乱が終わる頃、黄巾との戦いに敗北して帰ってきた董卓軍と、韓遂の戦いが起こった。涼州叛乱だ。私は、韓遂側に着いた。

これも別にどちらが正義だからとかではなく、より力を見せそうな方を選んだだけだ。疲弊してはいるが数も質もそろっている董卓軍を吸収すれば、韓遂は馬騰と一緒に関中を制することができる、そ

んな気はしていたがな」

茶を飲み干して、杯を下ろす。卓にあたって、カチン、と剣戟の音を思わせる、高い音が響いた。

「結果は……董卓軍の圧勝だった」

空っぽの杯に茶のかわりに水を注ぎ、口を湿らせる程度に飲む。

「まだ私は一軍の将ではなかったが、一隊の長ではあった。わけのわからないうちに負けて、ばらばらになった兵をまとめて反撃したが、あえなく包囲されて降伏……おまえたちの時と同じだな」

ふ、と華雄は苦笑した。

「そして、董卓は、やはりお前達と同じ……私を助命した。そして私は、特にすすめられたわけでもなく、いつのまにか、董卓軍に入っていた。董卓軍は、その後も戦いを続けて、董卓の軍はいつのまにか以前の数倍に膨れ上がった。軍閥、匪賊、異民族、多くが董卓軍に制圧されて、吸収されていった。……そこらへんは、多分お前達も知っているだろう？」

朱里と雛里は、黙って頷いた。

もう董卓軍に入った理由は語り終えていたが、華雄は、話を続けた。

「その巨大化を危険視した中央は、董卓軍の解体を命じた。まあ、当たり前だな。元々は官軍だ。だが、すでに董卓にとって、配下の軍は……大事な、仲間みたいなもの、だったようだ。手のかかる、厄介な、どうしようもない奴らだけだな。……私も含めて。董卓がいなければ1つにまとまらない。韓遂や馬騰に引き渡せば……なんて言える状況じゃない」

風音が止んで、華雄の声だけが、はっきりと響いて空に溶けていくようだった。

「朝廷は、并州牧の地位と引き替えに、再度、軍を解体せよと命じた」

并州は、洛陽のある司隸の北、涼州の北東に位置する州だ。

「異民族が暴れ回る并州に、空手で入れるわけもない。軍の解体は

せずに、一旦、少数の精兵を連れて、董卓は并州に移った。とりあえずの様子見だ。その時だな、呂布や張遼たちと出会ったのは……」

その時の光景を思い出すように、華雄は目を閉じた。

「あいつらは、上の連中に飼い殺されて、くすぶっていた。お前達にとつては敵だから、よくわからんかもしれないが……張遼は一本気な奴で、呂布は……なんとというか、とらえどころのない奴でな。扱いにくかったんだろう。特に、呂布は。実力は私と同等……か、それ以上かもしれないんだが」

華雄は、正直、呂布と真正面から一騎打ちをして勝てる気はしなかった。ただ、プライドもあるので、朱里や雛里相手にそれは言えなかった。

「それでも、異民族撃退や黄巾討伐に功をあげてはいたようだ……将としてというより、兵器として、な。呂布も張遼も、当時は死んだような目をしてたよ。董卓はそれを見かねたんだろう。董卓は、2人に……陳宮もだったかな？ともかく、連中に何度も会いにいらした」

「……じゃあ、それが」

と、雛里が相槌を打つ。

「そうだ。呂布の離反につながり、董卓の朝廷掌握につながった」

董卓は、最終的に朝廷の招請に応じ、わずかの兵と共に洛陽へ入った。

だが董卓は、この時ミスをおかした。

「人づてに聞いた話だから正確なところはわからんが、あの時、董卓には2つの勢力からの接触があったらしい。宦官の最上位、十常侍の張讓。そして大將軍の何進だ。2人とも董卓の軍に注目して、敵対勢力の牽制、ひよっとしたら殲滅に利用しようとしていたのかもしれない。董卓はもちろん、それを見切っていた。あからさまな策謀の招きに応じる必要は無い、それが軍師、賈馱の意見だったし、私たちも同意見だった」

朱里と雛里は、神妙な表情で華雄の話聞いていた。貴重な、当

事者の語りは、2人の知的好奇心を強く刺激しているようだった。

なので華雄は、どこか気持ちよく、話をすすめられた。

「だが、董卓は洛陽へ向かうことに決めた。中央の身勝手ないざこざに、怒りもあつたのだろう。数万の大軍勢から、わずか三千を選び抜き、出発した。張讓、何進、どちらにも味方する気はなかつたようだが……情勢は一気に変化した。宦官による何進暗殺。そして袁紹たちによる宦官殲滅。張讓の皇帝と陳留王を連れての洛陽脱出……めまぐるしい変化の中、運が良かったのか悪かったのか、董卓は、宦官と共にあてどもなく移動していた陳留王を発見、保護して、洛陽へと連れ戻せた」

「え？」

「はわ？」

そこで、朱里と雛里がそろって声を上げた。

「ん、なんだ？」

「陳留王だけですか？」

「皇帝陛下も一緒だったんじゃない？」

「……ああ、そうか。そういうことになっていたか」

華雄は頬を掻いた。

「その時の皇帝は、今も行方不明だ」

「え、じゃ、じゃあ、董卓が皇帝陛下を弑して今の献帝にかえたつていうのは……」

「欺瞞情報だろう。他の誰かが皇帝を殺した罪を董卓に押しつけたか、本当に行方不明なのを利用したのか……今もわからんが」

「あわわ……！」

「はわわ……！」

2人は目を丸くした。

わたわたと混乱した様子を見せてはいるが、頭の中はとてつもない速さで思考しているのだろう、やがて落ち着いてきた。

「ともかく、それで洛陽へ入城したのはいいが、兵を選びすぐってきたのがあだになった。陳留王を擁してはいても、その時の朝廷内

は……混沌としていたからな」

なにせ、張讓と何進、二大勢力のトップが一気にいなくなったのだ。

「混乱をそのままにしておけるほど義にうといわけではなし、かといって、他を圧倒できる兵力もなし。張讓や何進が招き寄せた諸侯はバラバラだが、兵の数は多かった。董卓は、とりあえずの協力を呼びかけると共に、裏で賈馱が工作に走った」

2人は東奔西走し、大兵力を偽装し、陳留王をかつぎあげて、秩序の維持に努めた。周囲の悪意に気づきながら、虚勢を張り続けた。「その時に董卓に応じたのが呂布と張遼だった。主である丁原を切つて、その兵を連れて董卓軍に合流した。無名の2人を將軍にまで取り立てたのは、これがあつたからだな。実力も十分あつたが、この帰順が趨勢を決めたからな、その功績はでかい。加えて、賈馱が死んだ何進の私兵を金で釣り上げて吸収した。実態はともかく、数の上では大兵力が確保できた。これで政局を動かすことができるようになったわけだ」

「それで、袁紹さんたちは黙って従つたんですか？」

「表向きはな。皇帝がいままではマズイということで、陳留王を皇帝に据えたんだが……おまえたちの反応からすると、この時点で反董卓の勢力が工作をはじめていたんだろうな」

「皇帝を殺し、専横を極めている、と」

「ああ。実際は必死だったがな。何進が死んだ前後に、有力な清流派の連中は、洛陽から退いていた。それをもう一度かき集め、残存宦官勢力を排し、政権の形を整えようとした。袁紹や曹操も招聘したが……袁紹は元々自分が上に立つつもりだったんだろうし、曹操は傍観……、まともなやつはほとんど集まらなかったな」

水で喉を潤す。喋りすぎだな、と華雄は思った。

「必死さも報われない、そんな状況だったな……まあ、私は特になにもやってないが」

当時、武官は出る幕がなかった。

「その後は、おまえたちの知るとおりだろう。いつの間にか洛陽から抜け出していた連中は外で連合を組み、董卓を包囲した。そのときに、全て投げ出して長安へ向かうべきだったのかもしれないが、結局、戦うことになった……」

華雄は遠い目をして、空を見上げた。

「あ、あのあの」

孔明が、控えめな声で、

「ご主人様も、桃香様も、董卓さんの思いを無駄にするような事は、しないと思います。だから、あの……」

「……？ あ、ああ、そうだな」

華雄は、2人のどこか悲しそうな目を見て、不思議な思いにとらわれた。

（同情……か？ 変な連中だ……）

憎い敵ではないとはいえ、仲間ではなく敵には違いない相手の想いまで、背負いこむことはないだろうに……と、呆れを通り越して感心する。

（だが……）

華雄は、思う。

（こついつやつらがいれば、後に何も残らない戦いで死ぬことは、無いのかもな……）

華雄は何度か色々な勢力を転々としているが、それは名を残す場を探していたからだ。

戦って戦って、名をあげて、誰にでも知られている存在になる、それが目標だった。夢だった、といってもいい。

しかし、劉備軍ならば……。

少なくとも、こいつらには名前を覚えてもらえるか……。

「ん？」

そこで、華雄は1つ思い出した。

華雄は孔明と鳳統、また他の劉備軍の将の真名を覚えてもらっている。

だが、華雄は真名を誰にも教えていない。

「……ああ、そうか」

今まで、部下や上官、同僚はいても、仲間といえる者はいなかった。董卓達は仲間だと思っていたたかも知れないが、華雄は、どこか冷めた感情のままにつきあっていたからだ。

だから、華雄の真名を知っている者はいない。

「どうかしましたか、葉雄さん？」

雛里が、突然表情を変えたのをみて、小首を傾げる。

「……いや、お前達の真名を知っているのに、私の真名は伝えていなかったことを、思い出してな……聞いてもらえるか？」

「は、はい！」

2人は声を揃えて頷いた。

「別にも呼んでもらわなくてもいい、ただ、覚えていてくれれば……私の名前……私の真名は……」

止んでいた風が、また吹いた。

葉擦れの音と共に、その名は小さく響いた。

「機会を見て、劉備や関羽達にも伝えておく。まあ、知っていれば十分だ。あまり真名を呼び合うのは慣れていなくてな……」

はは、と小さく笑う。

朱里達は、教えられた真名を反芻するように、幾度か小さく頷いた。

そして、誰からともなく茶器を使い、また穏やかな茶会に戻った。

「あれ？　なんか珍しい組み合わせだな」

と、唐突に、北郷一刀が顔を見せた。

「お茶してたんだ？」

一刀は卓の上の様子を見て取り、微笑んだ。

「はい。ご主人様は政務の途中ですか？」

一刀は手に竹筒や紙をいくつか抱えていた。

「ああ、うん。大体終わったけど、文字だけじゃ実状がよくわからないのが多くてね、午後からは街をまわろうかと思って」

「そんなんですか。あの、今日は私、手が空いてますので、一緒に……」

「あ、あの私も……!!」

と朱里と雛里がぴよんと手を挙げた。

「うん。それじゃあ、一緒に行こうか」

一刀は快く応じた。

返事を聞いて2人は途端に頬を緩めた。

「葉雄も一緒にどうぞ?」

「私もか?」

葉雄は一刀の顔を見る。必要だからじゃなくて、多分、そのほうが楽しいから、とかそんな理由なんだろう。無邪気な顔だった。

ふ、と葉雄は笑みを浮かべた。

「そうだな。同行しよう」

「よし、じゃあ、4人でいろいろまわるとしようか」

「はい!」

満面の笑みと共に答える朱里。

その横で、雛里が葉雄の肩にそつと触れた。

「ん?」

「葉雄さん、ご主人様には真名を教えたんですか?」

「い、いや、まだだ……」

「一緒に街をまわるときがチャンスだと思います」

「チャンス……?」

「好機つて意味の、天の言葉だそうです。チャンスです、葉雄さん」

「そ、そうか……?」

葉雄は一刀の方を見て、少し顔を赤らめた。さっき朱里や雛里にしたようにすればいいだけなのに、息が詰まるぐらいの緊張がなぜか胸の内にあつて、ちよつとのがすがすごく難しいことのように思えた。

(よく考えたら、真名を男に伝えるというのは、かなり……特別なんじゃないか?)

親兄弟を除いて、異性に真名を教えるなんて事はめったにない。それこそ、恋人や伴侶でもなければ……。

（しかし、劉備軍の主要な連中は全員真名を北郷に教えているようだし……あいつはあいつで、いたいけな少女たちにご主人様などと呼ばせて）

「あれ？ 雛里、口の所、食べかすついてるよ」

と、葉雄が悶々としているのをよそに、一刀は雛里の口のあたりを指差した。

「え、えと……」

雛里は指摘され、あわてて唇を拭くが、見当違いのところだったようで、

「そっちじゃなくて……ちょっと、動かないでいてくれ」

一刀は手を伸ばし、指先で優しく雛里の柔らかな唇の端をぬぐい、多分饅頭の餡の残りだろうそれを

「ぱく」

と自分の口に持っていった。

「あわわ……！」

ぼっ、と火がついたように雛里は赤面した。

「甘い」

「……ご、ご主人様」

雛里の視線が、一刀と葉雄の間で泳いでいた。嬉しいようでもあったが、困っているようでもあり……その理由は。

「……」

葉雄が、じいっと、一刀を睨んでいた。

「ん？」

一刀もその空気に気づいたのか、そちらをみた。

「おわ！？ よ、葉雄？」

ジト目でねめつけられて、一刀は、不安そうな顔で葉雄の出方を窺った。

なにせ、こういう顔をしているときの葉雄は次にどんな言動をす

抗議の声を上げた。

目の前には、北郷一刀と鳳統がいる。

「だって華雄が俺にだけ真名を教えてくれないっていつから……」
「しょぼーん、とした表情で一刀は華雄を見る。」

「なんだその私が悪いみたいない方は……！」

「ここは洛陽、劉備軍の尋問室……ではなく、一刀の寝室である。」

「呼び出されて来てみた結果がこれか！ わけがわからんぞ！」
憤懣やるかたない様子で、華雄が暴れる。

一刀の部屋に入った次の刹那、待機していた鈴々に転倒させられ、椅子に縛り付けられた。鈴々は役目は終わったとばかりに帰り、あとには一刀、雛里、そして華雄が残された。

そしてこの状況である。

「どうなってるんだ雛里……！」

視線を向けられて、雛里は帽子に手をやり、悲しそうな表情で答えた。

「ええと、あの、私のせいで、お二人が抜き差しならない状況になつてしまいそうなので、ここはひとつ強引な手段で……と」

「待て待て待て待て……！ この状況が一番抜き差しならんだろ！何をやる気だ……！」

「ええと、何をやるんだっけ、軍師鳳統……？」

「はい。短い期間ではありますが、葉雄さんとの色々なやりとりでいくらか性格や性癖の、でーたが集まりました」

劉備軍、特に軍師二人に顕著であるが、よく一刀の使う言葉を取り入れている。

「それらの要素と、この本を照らし合わせて……」

「な、なんだその妖しげな表紙の本は……？」

華雄が眉を寄せた。

雛里はちよつと頬を染めた。

「あわわ、閨房のお作法の本です」

「捨てるそんなもの……！」

華雄はぎろりと一刀を睨んだ。

「北郷！ 何を読ませてるんだお前は！！」

「お、俺が読ませたわけじゃないよ？」

「嘘つけこの！」

暴れてもどうにもならないのはわかっているが、華雄はじたばたして抗議の意を示す。

「えと、それですね、葉雄さんのような方の場合、こういう形になるようです……ご主人様の世界では、こういう人は、どういふんでしょうか？」

雛里は手元の本を、一刀に見せた。

一刀はそれを眺め、顎に手を当てて思索し、やがて口を開いた。

「ん……マゾ……かな」

「なんだその意味はわからんが不快な響きの単語は……！」

自分が、マゾ、とかいうものである、といわれているのはわかった。

「では、そのマゾの葉雄さんに、この本に書いてあるような事を試してみてください」

「わかった」

そして雛里は、あとはお二人で、と言い残して去っていった。

「さてと」

雛里を見送って、華雄のほうを振り向いた一刀の表情は 笑顔
だった。

ぞく、と背筋が寒くなるのを華雄は感じた。

そういえば、最初に尋問されたときも、2人きりになってから、ひどい攻撃を受けた。具体的にいえばくすぐられただけが、束縛された状態からのくすぐりは、かなり、きつかった。

一刀が、ゆつくりと、華雄の方へと向かってくる。

「ま、待て。落ち着け！ こんな方法で真名を知って、それで満足なのか貴様は……！」

「ん、そうだなあ……確かにそうかも」

一刀は華雄の方へ差し出した手をひっこめた。

ほっ、と安堵したのも束の間、

「じゃあ、今日は親睦を深めるだけということだ！」
「がばあつ、と一刀は華雄に襲いかかった。」

「ひっ!？」

不意をうたれて、華雄は思わず息を呑んだ。

「まあ、あまり痛いことか苦しいことはしないから……多分」

「な、なんだ、多分って!」

「だって、雛里が本に書いてある事をやれっていったから」

「……ちなみに、何が書いてあるんだ」

「ええつとねえ……例えば……」

と、一刀は本に目を落とすが、途端に口ごもった。

「う〜ん、口で説明するのが難しいんだけど……道具を使うのと、俺が直に触れるのと、どっちがいい？」

「なんなんだ……道具だと? ……嫌な予感しかしないが、しかし、お前に触られるよりはマシか……」

「なんだよう。そんなに嫌がらなくても良いじゃないか」

一刀は口を尖らせる。

「う、うるさい! とにかく、直接は駄目だっつ!」

「わかったよ……それじゃ、まずは、こんなところからいこうか」

一刀は、部屋の隅に置かれた箱を持ち出してきて、その中の1つを取り出した。

「……? なんだそれは?」

一刀が指でつまんだものは、小さな、二等辺三角形の小道具だった。より細かく形を描写するなら、「A」の形というのが正確だろう。木製らしいそれは、何に使うのか見当もつかなかった。

「劉備軍は資金難だからね。俺の世界にあった物のなかで、こつちでも作りやすいものを再現して、それを売ってるんだ」

「それは知っているが」

「これはね、その中の1つ。『洗濯バサミ』だよ」

「洗濯バサミ？」

「そう。バネの部分がちょっと面倒だから、曹操軍の李典にも手伝ってもらったんだけど、結構便利なんだ」

「名前からして洗濯に使うんだろう？ それをいま出してどうする」
心底不思議そうな顔をするが、一刀が、洗濯挟みを指で開いたり閉じたりしているのを見て、眉を曇らせる。

「……………」

「ちょっとだけ、使い方がわかってしまった。挟み、という名前からも推測が可能だった。」

「本には、もつと拷問器具みたいなやつでやる、って書いてあるんだけど、それじゃ危険だし、かわいそうだからね。これでやるよ」
と、一刀はおもむろに華雄に近づく。縄で締め付けられて括られ、強調された部分が、ぞくりと震えた。

「ま、待て……………」

と言葉では拒むが、身体は動かず、寄ってくる一刀の手からは逃れられない。

「ええつと、ここかな？」

一刀の手の平が、華雄の胸を撫でる。

体のそこかしこのざわざわが、一刀の手の平の中に集められたかのように、華雄の乳房に変な痺れが走った。

「…………つ、ちよくせつ、やるなというのに……………」

声がうまく出ない。

「ごめんね。服の上からじゃよくわかんなくて…………、と、これがよつと、という声と共に、洗濯挟みを開口させ、噛み付かせた。

華雄の乳首に。

「ひっつ……………！！」

どこか甘やかだった愛撫からの突然の痛みに、華雄の体がびくんとはねた。

「どう？ 痛い？」

少し心配げな一刀の様子に、華雄はちょっと丸めていた背を伸ば

した。

「……………ふっ、どうということとは」

「えい」

ぴん、と一刀は指先で洗濯バサミをはじく。軽く。

「つつあう!？」

電流を流されたように震え、その勢いで椅子が倒れかけたので、慌てて一刀は華雄の体を抑えた。

「くっ……………うっ」

一刀の腕の中で華雄は悶え、目の端に涙を浮かべた。

スプリングは弱めに調整してあるものだから、潰れたりはずないはずだが、やはり、痛いらしい。服越しでも効果は十分なようだ。

「もう一つ、やってみる?」

「……………好きにしろっ!」

この程度で屈するつもりはないのか、声を低めながらも、拒まなかった。

洗濯バサミをもう一つ、逆の乳頭に噛ませた。

「つく……………ああ……………!」

歯を食いしばって耐えるものの、痛苦で声を漏らす。

痛みに強いと思っていた自分の体が、たった2つの歯牙に蹂躪されて、悲鳴を上げている。

「……………つくう、なんで、こんな……………」

動きを制限されているせいか、痛みが、痛みとして、とぐろを巻いて居座り、体を疼かせている。

しかも、その疼いているのが、普段は気につけない部分……………精々、運動の時擦れたりするのが気になる程度の部分……………乳首なのだ。

「か……………は、うっうっ」

息がしづらい。痛み到手足が暴れたがるが、縄が食い込んで動けない。

そして、息をするたび、意識が、そっちに集中してしまう。

小さいながら極悪な圧力を、華雄の繊細な部分にかけているそれ。

じりじりちりちりと身を焼く痛み。

「は……あ？」

流れるほどではないが視界を滲ませる程度の涙のむこうに、華雄は一刀の顔を見た。

見ている。

一刀が見ている。

何を

華雄の疑問は、痛みが、答えとして帰ってきた。

乳首だ。

服の上からじゃ、よほどのことがない限り見えない、先っぽが、洗濯バサミで、挟まれて強調されているのだ。

だから、わかる。その存在がわかる。

他人にも。一刀にも！

「うあ、つ、……見るな、っあ！」

視線を感じた瞬間、痛みが、ぐるりと華雄の体をまわって、よがらせた。

乳首からその奥、背筋を通って腰、お尻まで、痛みの熱が、あたたかなとろみとなって駆け抜けた。

「な、んだ、これ……」

快感の前兆のようなものが巡ってきて、華雄は、何が起きたのか起きようとしているかわからず、震えた。

「……？」

一刀は華雄の状態の変化に気付きはしなかったものの、さっきまで痛みを耐えて猫背になっていた背が、反り気味になっているを見てとった。

そこで一刀は、もう一度、

「えいつ」

ぴん、と洗濯バサミを弾き、刺激を与えた。

「っひうあああっ……！？」

絶頂とは違うが、痛みと快樂の汀に突き飛ばされて、華雄は四肢

を引き攣らせた。

その反応に、苦痛だけではない色を感じて、一刀は、興奮を覚えた。

（これが直接なら……？）

ごく、と一刀は唾を飲む。

しかし、すでに涙目の華雄をこのまま追い打ちする気は起きなかった。

「じゃあ、次いこうか」

「つ、ぎ……？」

一刀は華雄の縛めの1つをほどく。手足は自由にならないが、椅子と華雄の体が離れた。床に落ちないように、一刀は華雄の足と首に手を回し、そのまま持ち上げた。

いわゆるお姫様だっこの状態で、一刀は華雄を運ぶ。

（まあ、乳首に洗濯バサミ付けてお姫様もないけど……）

しかし、理解できない痛さと気持ちよさに瞳を潤ませる華雄の顔は、いつもより弱弱しく、支配欲を掻立てられた。

（Sのつもりはないんだけどなあ……）

内心複雑だが、華雄がMなら仕方がないか、と思った。

一刀は寝台の上に華雄を寝かせ、乳首の洗濯バサミを取り、ポケットに入れておいた、拘束具を、華雄の目に付けた。

「っ！？」

華雄は、突然暗くなった視界に驚き、ベッドの上で跳ねた。

新しい拘束具。視界を奪う、目隠し。アイマスク。

「な、なんだ、これ、おい！」

華雄は布団の柔らかさに一安心した直後の仕打ちに、思わず、縄のことを忘れてじたばたした。手も足もぎっちり縄が食いついて、いくらか余裕はあっても、自由はない。

それでも、視界を奪われることに比べれば、不満はともかく、不安は少なかった。

すぐ傍に一刀がいることがわかっていたからだ。ひどいことをさ

れても、一刀なら、限界の前で止めてくれると、信頼していた。その信頼は、自覚していたわけではないが、目隠しされたせいで、はつきりわかった。

拘束されてからさっきまでの、一連の行為も、一刀の存在が撃鉄でもあり、安全装置でもあったのだ。

だから、その存在が、その動きが見えないのは、怖い。

「ほ、北郷ッ！ こ、これは、やめろ！」

「ん？ どうして？」

「どうしてって、し、視覚が。見えないと、心の準備が」

「大丈夫、大丈夫、これ以上痛いことはしないから」

と、一刀は安心させるように、華雄の剥き出しの肩に手を置いた。その肌のぬくもりに、華雄は少し緊張を解いた。

「まだいろいろ道具はあるんだけどね。それはまた今度にしよう」

「今度って……」

次が、あるのか、と華雄は心臓を高鳴らせた。

(いや、喜んでどうする！)

ようするにまたひどいことをする宣言ではないか。

「ところでさ…… 直接触れてもいい？」

「……？ あ、ああ…… まあ、いいだろう」

そういえば、最初は道具の方が良いって言ったんだっけ、と華雄は思いだした。なんであるなことを言ったのか不思議なくらいだった。

今は、直接の方がマシだ。

直接の方が、良い。

「では遠慮無く……の前に」

一刀は華雄の細くくびれた足首をつかみ、華雄の肢体を引っ繰り返した。

「ひあ！？」

目が見えないせいで、何をされたかの判断が一瞬遅れる。

(足を開いて、天井の方に……っ、下着っ、み、見えてる！？)

割り開かれた足の根元、そこには華雄の下着……パンツがある。

「うーん、ピンクとは意外だな」

一刀は感想を漏らしつつ、足の縄を別の縄に通し、股を開かせたまま固定した。

「こ、これっ……ひ、ひどいかっこじゃ……っ!？」

見えなくても、自分がどんな状態かは感覚でわかる。

下半身を天に向けて、股間をさらして……娼婦のように、いや、娼婦でもこんなアホなポーズはしないかも知れない。

一刀は、アソコを、見ているだろうか。こんな姿態にした張本人だ。絶対に、見ているに違いない。下着はつけているとはいえ、こんな、こんな見せ方は想定していない。

そりゃそうだ。下着を見せるとき、なんていうのは、よほどの事態で。

そしてそのよほどの事態の先には、その、つまり、性の、交わりがあるわけで。

となると、下着のままではいけないのだから、こんな、じっくりと、「見られる」ことはあまりない。

そしてこの恰好は、まさに、「見られる」、恰好だった。

店に陳列された商品のように。見られる。観察される。

下着……いや、正確に言えば、下着じゃない。

「女が穿いている」下着……だ。

お尻の丸みで盛り上がり、ふくらみ、お尻の溝にそって皺を作った、パンツ。

視線を感じる。見えないのに。感じる。

股座の周囲をなぞるような舐めるような、ねちっこい、視線の熱。 「っ……あ、み、見るな……見たら、こ、ころすっ……」

ただのショーツではない。その先に、自分の、体の、一番、複雑な部分がある。見せたくない、汚い、いやらしい、隠すべき、秘部。けれど、そこが、男の情欲をかきたてるということも知っている。 なら……一刀も？

このわずか一枚の布を取れば、私を抱きに来る？

(……………いや、だ……………)

華雄は心の奥底で抗いの小さな火を灯した。

(……………こんなので、抱かれるのは、嫌だ)

今のこの状況では、抵抗のしようもないが。

(舌を噛むぐらい、できるんだぞ……………)

華雄は、ひっこんだはずの涙が、またじわつ、と湧き出てくるのを感じた。

(……………こんなの、いやだからな。こんな状況で……………こんな……………?)

乱世に生まれ、戦場に生きた自分の、奇妙な弱さに、疑問を抱いた。

(殺されることも、犯されることも、覚悟はしていたのに……………なんで、こんなに胸が苦しい)

怒りとも違う種類の、胸の締め付けを感じる。縄でぐるぐる巻きだから？ 違う。

結論が出ない心と体のあわいに、一刀の手が滑り込んだ。

「……………ひぁ!？」

つ、と硬い指の先端で、太股の線をなぞられる。

混乱し、沸騰する頭を、一刀の指が掻き混ぜる。見えないせい、か、鋭敏に、指の動きが感じ取れる。すり、すり、と肌に一指が通り、通った肌が加熱される。熱い。

「……………ふぁ……………う……………くう……………!」

それほど敏感でも繊細でもない、性的な器官でもない部分だと思われる場所が、ただの指一本で、色気づく。

汗が噴き出て、吐息まで熱せられてくる。指の先っぽただ一点でも、これは、交わりだった。性の交わりだ。

「あ……………うう……………」

もつと露骨に触ってくれば、罵詈雑言でも浴びせられるのだが、控えめな接触到、なにも言葉が出ない。

そのせいで、からだが熱っぽくなる一方で、気づけばなにも考えられなくなっていた。

指が太股の内側を経由して、足の付け根の方へと進路をとる。ぞく、と総毛立った。ついに、来る、と。

どうする、なんとか、避けるか？

どくん、どくんとうるさいぐらい大きな音をあげる心臓。短く呼吸。汗が流れ、そこかしこが、もどかしくなる。

あと少し、あと少しでパンツに指がかかる

ごく、と唾をのんで心の準備をしたところで。

ひょいっ、と指が体から離れた。

「！！？」

驚きで声も出なかった。

「……な、なにを……北郷？」

途端に不安になる。気配は何となく感じられても、触れられていないと、どこにいるのかわからない。

「はっ……あ……ほん、ごう？」

怖いけれど、なにかを待ち望むような、そんな心境で、彼の動きを、耳や肌で探る。

近付いてくる雰囲気　華雄はどこかほっとして

「ぱっちん、と」

「いっ……！！？」

洗濯バサミ再登場、さつきと同じ、左乳首にがっちり噛み付いた。「ひああああああ！！」

哭声をあげ、体を曲げ、よじる。

過敏になっていた身体に、不意打ちの痛みはこたえたようで、涙声 leaked。

「う……うう……！！」

不意の痛みと驚きが冷めると、怒りの熱がわきおこった。

「もっ……痛くないんじゃないのか……！！？」

「ごめんね」

一刀は素直に謝った。

「たつてたから、して欲しいのかなと思って」

「た……つて？」

言われて意識をそちらに向けたが、左の方は洗濯バサミの鈍痛でわからない。右は……たしかに、勃起しているようだった。

さっきの洗濯バサミのせいか……あるいは、一刀のわずかな愛撫のせいか。

「だ、だからって……だな、これはないだろ……私は、てつきり……」

……

「てつきり？」

「……なんでもない」

ふい、とそらした顔に、一刀の手が触れた。

頬を撫でる手。アイマスクから流れた涙の筋を拭いとる。

「ん……」

ついでに、一刀は洗濯バサミを華雄の乳房から外し、ベッドの隅に放った。

手の平の温もりと、痛みからの解放に、華雄の肩から力が抜ける。その瞬間に。

華雄の唇に、一刀の唇が重ねられた。

「んむ！？」

手指の硬い感じとは違う、柔らかな感触に、華雄は、口づけされている、と理解した。しかし、理解よりはやく、一刀の唇が動く。

唇の表面をすべり、撫ぜる。左右に、こすりあう。

離れたと思ったらくっつき、また離れ、くっつき、雨のように、キスをふらせる。

「……ん、あ……ちゅ……う……」

口で息をしようと思えばその唇を奪われ、声を出そうとすればその口唇を啜えられる。動きを封じるという意味では、身体を縛る縄と同じ。優しい、緊縛。

「……ぷは……あ」

長い長い口づけの連なりがようやく途切れ、華雄は、艶めいた吐息をこぼした。

「お前は、いつも唐突だ……」

と、口を尖らせると、

「じゃあ……これで」

一刀は、華雄の足の縄を解き、自由にした。

そして、アイマスクを外した。

視界が開けて、飛び込んできたのは、一刀の顔だった。

「あ……」

鼓動が早鐘を打ち、声が震える。

唾液で濡れたくちびるが、先程の行為は、確かなものだったのだと主張していた。

再び、一刀の顔が迫ってくる。

今度は、何がしたくて、何をするつもりなのか、わかった。

今なら拒める。

手は動かないが、顔も身体も避けられる。

強引にやられれば拒否できないが、多分、キスしないという意志を示せば、一刀は、しないだろう、と思った。

だから

だから、華雄は、目を閉じた。

唇があわさる。

吸い付くように、ぴったりと重なる。

動かせるようになった足を、一刀の腰にまわして、身体も重ねた。深く、重なる。いや、重なりじゃない。

さっきの、指と肌の触れ合いより強い、交わり、だ。

「んん……」

ベッドの上、2つの肢体が睦み合い、何かの拍子で蹴飛ばされた掛け布団にのっていた洗濯バサミが、床に落ちた。

とん、と床を跳ねる音が鳴り、床の上を転がり、その動きが止まるのとはほぼ同時に、一刀と華雄は唇をはなしていた。

「……………」

「……………」

変な沈黙が降りる。

気恥ずかしいというか、気まずいというか、そんな空気。

「えっ……………」と、あ、改めようか、また、今度に」

「ああ……………」

お互いにもつたいたい気もしていたが、この流れで、そのまま、そういう行為に突入するのも、ちよつと抵抗があった。

一刀は華雄の緊縛を全て解き、痕がついていないか確かめた。

(とりあえず口づけで、満足、か)

華雄は、指で自分の唇に触れて、なぞった。

(……………子供か、私は)

自嘲するが、どこか心地よかった。

いつでも飛び越せると自らに言い聞かせていた一線で、踏みとどまった。

いつでも、どこでも、だれでも、ではない。

真に特別な想いと共に。想いを共に。

(次だ。多分、その時が、真名を、伝えるときだ)

胸に宿った予感と決意を抱いて、一刀の方を見る。

一刀は、洗濯バサミやらアイマスクやらを箱にいれている最中で、こちらに背を向けていた。

「……………」

とりあえず華雄は、

「おりゃああああああああああ！！」

「どわあああああああ！？」

その尻を思い切り蹴飛ばして、今日の溜飲をさげておいた。

欠史1 華雄（葉雄）伝 華の名は（後書き）

本編でなかなか取り上げられないキャラは、これと同じ形で補充しようかと思っています。原作の拠点フェイズと同じノリでやること
思っているんですが……

致命的に文体が暗いので、萌え描写が難しい（；；；）

第6話 無銘伝四下蒼天暗路（前書き）

お待たせしました。新章、第6話です。

第5話から大分間が開いてしまいました。申し訳ないです。

さて、新章なわけですが、二つ注意があります。

まず一つ目は、今更ながら、この二次創作にはオリジナルキャラが出ます、ということ。本当は二次創作にオリキャラは出したくないのですが、出さないと話が破綻してしまいますので……ご了承ください。二つ目ですが、これは注意というか、もし必要なら、という話なのですが、この第6話から、作中で地名が出てきます。わかる方ならすぐわかるかもしれませんが、三国志の地名に馴染みのない方もおられると思います。

作者は傍らに地図を置きながら書いているので何の問題もないのですが、読んでいてちょっとわからない、ピンとこないという方は、「むじん書院」というサイト様の「三国志小事典」「三国志地図」を参考に書いていますので、そちらを御覧になっていただければと思います。

一応、作中で位置関係を説明してはいるので、読めないという事はないと思いますが。

さて、長々と前書き失礼しました。

第6話、楽しんでいただければ幸いです。

第6話 無銘伝四下蒼天暗路

断ち切れ、忘れ去っていた記憶。

冷たく濡れたからだ、兵たちのざわめき、空を覆う雨雲、陽の光はさえぎられて、まるで、そこは、暗闇の夜のようだった。

ぬかるんだ大地を、大軍団と共に歩む。

誰かが天蓋つきの車を用意したと伝えに来るが、首を横に振って固辞する。

「無用だ。馬のほうが良い」

馬の蹄にワラジを履かせて行くこと数十里。摩り切れて使い物にならなくなつて、何度も履き替えさせた。今日一日、雨の中の強行軍だった。

これまで長い長い行軍を、兵達と共に歩んだ。

味方領内を抜けて、すでにここは敵領土で、兵士の皆は、消耗し始めている。

ここで大将である俺が楽をしたら、皆だつて楽なほうに……戦いを止めて、どこかに逃げるほうにいつてしまつたらう。

人の心はすぐく移ろいやすい。手綱をはなせば、すぐに制御できなくなる。

俺は腰から剣を抜き、兵達を鼓舞した。

山を越えた向こうでは、先行した夏侯惇軍が敵軍と衝突している。手持ちの将は中華大陸の東西南北で戦端を開くか防戦を続けており、残る将は俺の護衛と秋蘭だけだ。

「北郷様っ」

その秋蘭が、俺に具申した。

「我が分遣隊だけでも姉者の助勢に

！」

「駄目だ」

一蹴した。

「秋蘭は最後の攻め手だ。今、武將を割いたら、あいつを取り逃す」濡れた唇から、血と共に言葉を吐く。口内が切れているだけで内臓はやられていない。

だが。

心のなかの臓腑は、もう、ぐちゃぐちゃにやられている気分だった。

「ここで、終わらせるんだ」

秋蘭の目をまっすぐに見て、答える。

俺の真正面からの返答を受けて、彼女は、一瞬息をのみ、やがて頷いた。

行軍は続く。

重苦しい乱雲と共に、雨で血を拭いながら。

「敵軍に動きあり！ 東北方向、我が軍の側面に回り込みました！」泥まみれの伝令が報告する。

「要地を放棄してこちらの急所を狙うつもりか……」

「何か攻め急ぐ理由があるのでしょうか」

雛里が首を傾げる。軍師である彼女も、血と泥をまといながらの、必死の征旅だ。

「こちらを圧倒する策でもあるか、あるいは、情勢の変化で出ざるをえなくなっただか」

「どちらにせよ、迎撃を」

北郷軍が戦闘態勢を整えたところに、さらに伝令が続いた。

「夏侯惇軍が敵部隊を撃ち破り、追撃中とのこと！」

「なるほど、それが敵主力が動いた理由か」

「敵主力、東方に展開中！」

「夏侯惇軍は逃げた敵を追っている……こっちは間に合わないか」

「残りは北郷軍中軍と夏侯淵軍だけです」

「もう策もなにも無いな……最後の最後の最後に残ったのは、力だけか」

これが終わったら、終わったら、どうなるんだろう。
戦いを前にして加熱する体に反して、頭はなぜか、冷たい想いで満ちている。

「こんな戦い終わらせなきゃ駄目なんだ」

口に出して、心を奮い立たせる。

けれど、雨粒で湿った服と同じように、心は重く、沈んでいる。

なぜだろう

俺は、馬を走らせ、敵の尖兵を斬り飛ばしながら、思いを巡らせる。

愛紗が、関羽が死んだからか？

俺たちは人を統治し、軍を率いて、戦っている。

人が、兵士が、将が死ぬのはとても身近なことだ。

人の熱情は歴史を動かし、歴史は人をその儂い希望ごと挽き潰す。そういう時代だった。

怨望が世界に満ちていて、俺も、仲間も、敵も、傷つけ傷つきあった。それでも

希望は必ず生まれ出る。それは俺たちだけの希望じゃない。民たちの希望もだ。

人々は、誇りを笑い飛ばされて、泥土を這いつくばっても、立ち上がり、男として女として父として母として子として兄弟として恋人として人として、戦った。

傷つき倒れる寸前まで希望を抱いて。

多くの人は、それを少女たちに託し、散っていった。

英雄たち。英雄たる少女たち。

「愛紗……」

それなのに俺は、民たちの希望を叶える熱情より、冷たく苦しい少女への想いで心を疼かせている。

今まで、死んでいった仲間の分も、戦ってきたはずなのに、こんな、最後の戦いになって、思ってしまったんだ。

この戦いを終えても、
死んでいった少女たちは、誰ひとり、
帰ってこない。

ああ、そうか

俺は得心した。

これが、地獄の正体か

そして、目を覚まして、俺ははつきりと夢の内容を覚えていて、
だから、体が震えた。

(俺は勘違いをしていたのかもしれない)

喉がひどく渴いていたので水差しに手を伸ばしたが手が思うよう
に動かなかった。きつく拳を握り締める。動くようになった。

で、まず自分の頬を軽く叩く。

完全に目覚めた。少なくとも体はもう大丈夫だ。

改めて杯に水を注ぎ、飲み干す。

(俺は、最後の最後に、この手で、少女を殺めた)

悪夢の終わり。それは全て同じ光景だった。

だが、今日の夢は

(俺が彼女を殺す前に……たくさんの仲間が、彼女に殺されていた
としたら?)

悪夢は裏返る。

(俺は……、仲間を殺される前に……、止めなきゃならないんじや
ないか?)

その少女によって殺されないように。その少女のために殺さない
ように。

(夢の通りになれば、俺と、彼女は、戦うことになって……今の仲
間たちは、敵と味方に分かれる。そして殺し合って……俺は、彼女

を殺す)

地獄の完成だ。

(とすると俺は、一刻も早く夢の中の彼女の正体を確かめて、止めなきゃならないんだ……俺が、彼女を殺す、その理由が生まれる前に)

もう一度水を汲み、飲む。

がりがり、と頭を搔く。

「……誰が、敵になるっていうんだ」

焦りが堰を切ってあふれる。

タイムリミットまでの猶予はそれほど無いように思えた。

(今日の悪夢通りなら、愛紗が敵になる。愛紗の主なら、桃香だろうけど……鳳統が俺の傍にいたし、決定的じゃない。ただ、今日の夢で、大体の見当はついた)

夏侯姉妹、鳳統、関羽、華琳を除いて、大軍の主になりそうな人物

「……劉備、孔明、孫策、孫権、周瑜。まずは、そんなところか。

……袁紹や袁術、公孫贊……あ、それと顔はわからないけど、馬騰とか。董卓も……ありうるか。意外と候補が多いな」

部屋の中をうろつき、考える。

「それに、俺が知らない奴って可能性もある。夢の中じゃ、顔が見えなかったし……」

一歩前進はしたものの、その先は闇が広がっていた。

俺はため息をつき、頭を振って、気分を切り替える。

「考えてるだけじゃ駄目だな」

寝間着から着替えて、部屋を出る。

外は朝で、まだ冷たい空気が満ちていた。

ここは洛陽の街、劉備軍が仮本営としてつかっている屋敷だ。董卓軍が遷都を決めたため、主がいなくなっただけで空き家になったようなので、それを劉備軍が拝借したのだ。

「まだみんな起きてないのかな」

屋敷の廊下を歩き、様子を窺うが、警備の兵以外誰にも会わず、人の声もほとんど無かった。

「まあ、ここ数日忙しかったし……」

虎牢関を突破し洛陽を占拠してから、まだ数えるほどの日数しか経過していない。

燃え落ちた都を修復しながら董卓軍の反撃に備えるのは難しく、寝る暇もないくらいだった。

「起こすのも悪いしなあ……、厨房で軽く朝飯とって、部屋に戻るか……あ」

踵を返そうかと思ったその時、目に一つの扉が飛び込んできた。

その扉は、愛紗の部屋へと続く扉だ。

どくん、と心臓がはねた。

夢だとはわかっていても……

ドアノブに手が伸びる。

扉を開け、中に入る。まだ幾日もたっていないのに、ちゃんと愛紗の匂いがする部屋に、足を踏み入れた。

部屋は俺の寝室とほぼ同じつくりで、違うところといえば青龍偃月刀が立てかけられているというところぐらいだろうか。

愛紗はまだ寝ているようで、ベッドの上に布団のふくらみがあった、それがかすかに上下していた。

耳を澄ませば、かすかな寝息が聞こえてきて、俺は思わず頬をゆるめた。

これで帰っても良かったが、ちよつといたずら心が芽生えて、寝顔を見ようと、ベッドに近付いた。

仰向けに寝ている彼女の眠り顔をのぞく。

穏やかな寝顔。桃香や朱里たち文官よりの仲間はどこか疲れ気味だが、さすが、疲労の色が見えない、眠っていてもいつも通りの、凛々しい顔だ。

「ん……」

気配を感じ取ったのか、愛紗が身じろぎした。

「ご主人様……?」

寝惚け眼をこすりこすり、愛紗が半身を起こした。

「よく、すぐに俺だつてわかったね」

「雰囲気で何となくですが……どうかしましたか」

愛紗は体を動かし、寝台に座る形で俺を見上げた。

「いや、なんとなく顔を見に來ただけで……ごめんね起こしちゃつて」

「顔を……」

愛紗は寝起きでぼうつとした顔から、一転、頬を赤く染めた。

「こ、こんな顔を……見ないで下さい……」

と、顔を背ける。

起床前後の姿など見せたいものじゃないんだろう。髪に寝癖とかついてるかもしれないし。

もつとも、今朝の愛紗は、美しい黒髪にほとんど乱れ無く、髪を結んでない分どこか艶めかしくて 恥じらい顔と合わせて、つい劣情が……

「ッー!」

「え!?!」

がばあつ、と愛紗に覆い被さる。

細腰を抱き寄せ、頭の後ろに手を添える。

その存在を確かめるように思い切り抱きしめる。

どんなに関羽の威名が大陸に広く轟いても、確かにあるのは、この腕の中の、ひとりの少女だけだ。

「ご、ご主人様……なにを?」

「愛紗……」

顔を寄せる。

「あ……んん……」

やわらかい唇を食むようにくわえる。押しつけず、ゆっくりと撫でるように動かす。

「ん……ふぁ……じゅじゅ……たまぁ……」

愛紗は少し抵抗するようなそぶりを見せたが、すぐに体を蕩かすように脱力して、俺の手に身をゆだね、口づけに呼吸を合わせた。深く浅く、唇と舌を使って、上唇、下唇、口中とべとべとになるぐらいキスを続ける。

「は……あ……ああ」

唇を離すと、よだれの橋がつうつと愛紗との唇の間にかかった。口唇が熱っぽく疼く。息は出来るのだが、ずっと唇を重ね続けると、何かが壊れてしまいそうになる。理性の壁とか……。

しかし、キスを止めても、キスをした結果は残っているわけで。愛紗の、ぬれた唇とか。焦点がどこか遠くにいつてしまった瞳とか。少し乱れた寝間着の胸元とか。というか、今の愛紗の体全てが俺の理性を破壊する材料になっている気すらする。

生唾のみ、このまま押し倒して良いかどうかを考える。この早朝に。いかがわしいことをしていいかどうか。

本能はG Oサインを出し続けている。理性陣営敗勢濃厚。これを止められるのは、本気を出して愛紗が拒否した場合のみ！

愛紗の腰を支えた手を離し、おなかの方へ回す。その手を徐々に上へ。

「ご主人さま……」

胸に触れようとする手に、愛紗は自身の手を重ねるが、抵抗は弱い。しかも、徐々にそんなかな抵抗も曖昧に……むしろ招き入れるがごとく……。

最終的に、俺が押し倒すように、愛紗がしなだれかかるようにベッドに雪崩れ込み

「愛紗ちゃん！ ご主人様知らない？」

桃香が扉を開けて入ってくる。

そして、突然の事態に固まる俺たちの、絡まり合った姿を見て、

「ご、ご主人様っ!!? そ、それに、愛紗ちゃんっ!!?」

「あ、と、桃香さま、えっと、これは、あの、そのっ!!」

愛紗は慌てるが、体勢が悪く、自分の力ではすぐに体裁を取り繕えない。

「あらら房事中……取り込み中のようね」

なんと桃香の後ろには曹操、華琳がいた。

「お、おおお……!?!?」

ついでに夏侯惇、春蘭もいた。

「お二人ともこんな朝から……うらやま、じゃなくて、なにやってるんですかっ!?!?」

最後に入ってきた孔明、朱里が、頬を赤らめたうえ、ふくらませる。

「えーっと、これはだな……その」

俺は愛紗を支え起して、乱れ姿の彼女を背後に隠し、言い訳を考えるが……どうにもならず、とにかく寝間着姿の愛紗を残して、部屋を出ることにした。

「なにをなさっているんですかっ、まったく!」

曹操達からちよつと離れて、孔明がぶりぶりと憤る。

「そうだよー。いくらご主人様でも、お手つきが早すぎるよ! ……

…私のところには夜にしか来ないのに」

桃香もまたぶくーつと頬をふくらませ、口を尖らせる。

「面目ないです……」

小さくなる。

遠くからの曹操と夏侯惇のじとーつとした目線も感じ、ますます俺は萎縮する。

そこに、愛紗が着替えて部屋から出てきた。

「こほん」

キリッ、とした表情で、咳払い。

「それで、こんな朝早くに、どういたしましたか?」

「……ぶっ」

痴態をさらしたあとの精一杯の威厳に、思わず夏侯惇が吹き出した。

「……っ！」

曹操もぶるぶると肩をふるわせ、口元を手で覆い隠した。

関羽の顔が羞恥で真っ赤になる。

「えーっと、これからの方針について、でしたっけ……？」

劉備が笑いをこらえている曹操をちらりと見て、孔明に視線を移した。

孔明はこくりと頷き、

「ともかく、ここで立ち話もなんですから、軍議の間につつりましよう」

失笑の余韻をひきずりながら曹魏の主従は、劉備に案内され、軍議の間に入った。

軍議の間には、周囲一帯の地勢図を置いた円卓を中心に、各種軍事情報を記した竹簡が山と積まれている。

「こほん……さてと、私たちの用件だけ……」

円卓の東側の椅子に座った華琳が、口を開く。

「さつき劉備がいったとおり、これからの私たちと、あなたたちの方針についての確認よ」

「これからの方針っていうと、洛陽近くの復興と、防衛についてでしようか」

円卓の西側、劉備と俺を真ん中に左右に孔明と関羽が座る劉備陣営、孔明が応じる。

「短期的にはそれね。中長期的には、洛陽を守るための周辺地の確保ね」

「周辺地……エン州、豫州、冀州、荊州北部などですか」

「そう。このまま根拠地無しに兵を雇ってはられないわ。かといって、幽州や荊州南部、揚州のような遠方に戻るわけにもいかないとなれば、私たちは、どこか近場を占領して、そこを本拠として、洛陽を維持するべきでしょう？」

「……ええと、つまり、一旦洛陽からは離れるんですか？」

桃香が眉を顰める。

「もちろん、ここ周辺には今以上の皆を建設し、董卓軍の再侵攻に備えるわ。洛陽から長安に続く、弘農郡や潼関には呂布たちが居座っているから、油断できないしね」

「すでに袁紹軍や袁術軍は都の復興や董卓の追撃にやる気を見せていませんし、そうになると、私たちだけでは董卓軍追撃は不可能……となると、その中長期目標は妥当であるとも思いますが……」

孔明がちらりと、俺と劉備に視線を送る。

「……」

劉備は考え込むようにあごに手をやり、沈黙している。

俺は、これから考えられることを想定し、言葉を選びながら発言する。

「それに、董卓を罫にはめて悪者にした奴が、これから動き出す可能性が高い。洛陽から董卓を追い落として、自分のやりたいように舵を取るために」

「そうね。いまのところ尻尾を出していないけど、そろそろ影ぐらいは踏めそうね……。その対応のためにも、安定した基盤を築く必要がある」

「曹操さんは、どこを拠点にするつもりなんですか？」

「私は、エン州の陳留をひとまずの本拠とする予定よ」

エン州は洛陽のある司州の東にある州で、陳留はエン州の西端に位置する。洛陽までの距離は近隣の州の中でもかなり近いほうだ。

「私たちは今動けないけど、鮑信がエン州に入って周辺の郡を調査して、迎え入れる準備をしてくれているわ」

「鮑信さんが？」

鮑信は、董卓包囲網に参加した将の一人だ。立場的には曹操や劉備と同格のはずだが……。

「鮑信は、いずれ私にエン州全てを統治させるつもりだそうよ。まあ、私や劉備、孫策の功績を考えれば、一州の長なんて当たり前だ

と思うけどね」

「……そうですね」

孔明が何か含意のありそうな面持ちで肯定した。

（すでに曹操さんは、中立の將を取り込みはじめている。孫策さんは一応袁術さんの配下だし、私たちは弱小……一番天下に近いのは、曹操さんか。でも、今曹操さんを敵視する理由はない……今は……）

「劉備軍はまだ、本拠を定めてはいないわよね？」

「はい。一応、旗揚げは幽州ですが」

「となると、私たちと同じように、洛陽の近くに拠点を得た方が良いわね。冀州と荊州北部は袁紹と袁術が握っているから、豫州あたりがいいかしら」

「ええと……」

劉備は答えに窮したようにこちらを見た。

「桃香はどうしたい……？」

曹操達に聞こえないよう、小声で俺は桃香に尋ねる。

「……あのね……」

耳元に言葉と共に吐息がかかる。くすぐったさを感じながら、俺は驚いた。しかし、桃香らしいとも思った。

「いいんじゃないか？ 朱里」

隣に座る朱里に桃香の意を伝える。朱里は、曹操の前だから表情を変えないが、声を少し硬くし、しかし、了解した。

そして、それを確認した劉備が決然とした表情で、

「私は、この都を含む、河南と、その北に位置する河内を本拠にしたいと思います」

「……っ！？」

曹操が目を見開き、とがめるように俺たちを睨む。

「それは……わかってるんでしょうね？ 私は今さっき、洛陽を守るために近辺をかためるといったのだから、ここ一帯が最前線になるということなのよ？ 董卓軍の第一目標は洛陽の奪還でしょうし、今回の戦いの黒幕や、他の群雄たちの目標にもなり得る」

「わかっています。でも、いま洛陽から諸将が散っていなくなれば、都から逃げた民も、将や軍師も、帰ってくることはないと思います。逆に、ここでとどまれば、名をあげようと集まってくる人たちが出てくるんじゃないでしょうか」

「……厳しい賭けね。第二の董卓になりかねないわよ」

「そうですね……あのー、それじゃあ、曹操さんも一緒に洛陽に住みませんか？」

「なに？」

ぎよつとして、曹操は口をぽかんとあけた。

孔明も、夏侯惇も、関羽も、俺も、一様に似た表情で桃香の方を見た。

「駄目ですか？」

桃香はすごく無邪気な笑顔で華琳の顔を真正面から見た。

「……………いやよ」

華琳はちよつと気圧されたように、軽く顔を背けた。

「そうですね……」

さも残念そうに桃香は肩を落とした。

「まあ……………定期的に、顔を見に来てあげるわ」

シヨボーンとした桃香の姿に、あきれたような慰めるような声色で、華琳は言った。

「本当ですかっ？」

「ええ……………都には曹家の邸宅も一応残っているし。都を空っぽにして、横から黒幕にさらわれるのも癪に障る。矢面には立たないけど、援護ぐらいなら、まあ、いいでしょう」

「ありがとうございますっ！ 曹操さん！」

桃香は立ち上がり、満面の笑みで、曹操に頭を下げ、感謝した。互いの座っている場所がもうちよつと近かったら、曹操の手をとり握手するか、ひよつとしたら抱きしめるぐらいの勢いだった。

「……………調子が狂うわね」

戸惑いながら、しかし、まんざらでもない様子で、華琳は頬を搔

く。

「こほん。まあ河内、河南となると、こちらとあなたたちの連携はやりやすいわね。陳留は都への出入り口と言ってもいい位置にあるし。……早速、具体的な調整に入りたいところだけど」

「あ、はい。ええと、私たちは大丈夫かな？」

と、劉備が朱里を見る。

「はい。雛里ちゃんがいませんが、邸内にいますので、すぐに来られますから大丈夫です」

「そう……ただ、こちらは準備がまだ整っていないのよね。あなたたちが豫州を本拠にするなら、私一人でも事情がわかるから、そのつもりだったのよ。豫州は私の故郷だしね。河内・河南となると軍師が必要なだけけれど……来るのが遅れているのよね」

「荀？さんですか？」

「いいえ。荀？はエン州の内政統括。あなたたちとの連絡連携は、楽進・李典・于禁と、新しく入った軍師をつけるつもり」

新しい軍師？ 曹操軍にはただでさえ、荀？・郭嘉・程？という3人に加えて曹操自身が軍略政略に通じているというのに？ と、俺たちが首をかしげていると、

「あ、あの……あわわ」

雛里が軍議の間に入り、皆の視線が集まる中、おずおずと、

「曹操さんの軍師と名のる方がお見えになっていますが……お通ししてよろしいですか？」

「ようやく来たわね」

「それじゃ、こっちに通してくれる？ あ、あと雛里も一応ここにいてくれる？」

「は、はい！」

許可を出し、少し待つ。

どんな軍師なんだろう。

俺はまだ見ぬ軍師の顔を思い描いた。史実の方の三国志に出てくる軍師なのだろうが、曹操軍の軍師・参謀といえば荀？というイメ

ージがあるので、なかなか出てこない。

「失礼。遅れました」

緑の三つ編み髪を揺らし、眼鏡をきらりと光らせて、その少女は登場した。

鋭い瞳をその場の全ての人間に向けて、手を前方で重ね、拱手する。

「曹操軍、軍師。荀攸、字を公達と申します」

「紹介するわ。荀？の姪の荀攸よ」

と、曹操は立ち上がって、荀攸を手で示し、一同に引き合わせた。

「荀？さんの姪!？」

「そうよ。姪といっても、荀？より少し年上だけどね」

「あ、あんまり、荀？さんと似てないような……?」

「そう? 頭の方は似ているのよ。軍才ではこの子の方が上かもね。私も象棋で何度か荀攸に負かされたし」

「曹操さんがですか!？」

「す、すごいんですね」

「いえ……別に、たいしたことは」

荀攸は、涼しい顔で、賞賛を受け流した。

劉備や関羽、孔明や鳳統はひとしきり驚きの声を上げ、軍議の席はかしましい女の子たちの雑談の場と化した。

その中で、俺は、かたまっていた。

あの子………詠、だよな………?

董卓軍軍師、賈馱。字を文和。

深い緑色の髪を三つ編みにして垂らし、眼鏡の奥の眼光は鋭く。

月 董卓を守る、一番の部下にして一番の親友である少女。

賈馱。その真名を、詠という。

その少女が、今、目の前にいる。賈馱ではなく、荀攸として。

(まさか、この世界では、荀？の姪なのか？ い、いや、そんな馬鹿な。だって、今まで再会した仲間たちは、小さな違いこそあっても、所属が違つとか名前が違つとか、そんなことはなかった。それがなんで賈馱だけ……？)

俺は混乱する頭を片手でおさえ、荀攸の顔をじつと見つめた。

彼女の表情は、薄く笑みを浮かべてはいるが、どこか暗い色を見え隠れさせていた。それは、かつて自分のメイドとしてつかえさせた記憶からかろうじてわかる程度で、他の者がそれに気づいた様子はない。

その苦しげなまなざしは、緊張のためか、それとも、この場にいる誰かのためか

「なに私の可愛い部下に色目を使っているのかしら？」

曹操が、俺の熱っぽい視線に気づいたのか、冷たい目で、俺を睨んだ。

「え？ い、いや、色目ってわけじゃ……」

慌てて賈馱 荀攸から視線をそらす。

「……ご主人様？」

様子のおかしさに皆が首を傾げるが、まさか今この場で荀攸の正体について詰問するわけにもいかず、俺は沈黙を守った。

「……………？ まあいいわ。それじゃ、荀攸、あなたの意見を示して。劉備たちの本拠はここで、私たちの予定は変わらず。さて、どうする？」

華琳は簡潔に、地図を指さして、荀攸に尋ねた。

荀攸は、少し黙考し、やがて口を開いた。

「董卓軍、袁紹軍の動きを考えるに、河内と河南の確保は必要。ただ、劉備軍と曹操軍が狭い範囲で固まると、包囲される可能性がある。袁紹が北の冀州、袁術が南の荊州を本拠としているため、すでに半分は包囲されているとみるべき。打開の手としては、他の勢力

を利用しつつ、エン州の南の豫州、東の徐州、東北の青州に手を伸ばすべきかと」

荀攸の弁を静かに聞いていた孔明が、こくり、と小さく頷く。

「確かに、董卓軍、袁紹軍、袁術軍によって都は緩やかに囲まれていますね。この三軍は連携こそしていないものの、私たちが隙を見れば、領土を削りに来るでしょう」

「えっと、各個撃破はできないの？」

と、桃香。最近、かつこげきは、という言葉覚えてほしい。

「それは難しい」

荀攸は首を横に振った。

「董卓軍は長安を占拠している。あの辺は旧都だっただけあって、生産力、防衛力に富んでいるわ。やろうとおもえば何年でも戦える。その上、董卓軍は長安の南、漢中と蜀の地と手を結んでいるという情報もある。突っ込んだら泥沼にはまりかねないわ」

「漢中と蜀……！？ あそこは皇族の劉璋殿が治めていたはずでは？」

関羽が目を見開いた。

「賊に殺されたという噂もあったけど、董卓軍に取り込まれたのか…… それとも、前々から結託していたのか…… とにかく、董卓の追討は困難ということね」

「では、袁紹や袁術はどうなのだ？」

荀攸はうーん、と唸った。

「袁紹と袁術は、攻撃する大義名分がないのもあるけど…… どちらかを攻撃するとどちらかに背後を討たれ、さらに董卓軍に側面を突かれるっていう、筋書きが予想されるわ」

「あわわ…… ただ、袁紹さんには冀州の北、幽州の公孫賛さんが对阵できますし、袁術さんには孫策軍が、董卓軍には馬騰軍が対手になるかと」

「そうだけど、今はまだ無理よ。公孫賛は袁紹を封じる決定打に欠けるし、孫策は袁術から独立を勝ち得るだけの領土がない。そして

馬騰は董卓を本気で討つ気がない」

「私たちの領土の周りに袁紹さんたちがいて、袁紹さんたちの周りに孫策さんや白蓮ちゃんたちがいる。ってことは、互いに手を出せない状況だから、荀攸さんが言った通り、周辺の州をおさめていくのが一番なのかな？」

「それに足して、公孫贄や馬超と協力、孫策の独立を裏から支援する、ってところか？」

荀攸に対する疑問をとりあえず横に置いて、俺は議論に参加する。「それが最善手」

荀攸は頷き、

「そうね……まだまだ、雌伏の時、というところね。中原での大戦は、もう少し情勢がかたまらなければ敵も私たちも不可能」

曹操も同意した。

「あの……できれば戦わない方向で……なんて、無理ですか？」

桃香がちよこんと挙手して意見するが、

「無・理」

と、華琳は黒い微笑を浮かべて答えた。

「ふえええ……」

桃香は涙目になった。

「厭戦は乱世を長引かせるだけよ。あなただって、一刻も早くこの戦乱を終わらせたいと思って居るんでしょ？」

「……はい」

こくこくと、桃香は首肯する。

「それなら、やらなければならぬ戦があるということを知っているんじゃないか？ 劉玄德？」

「……」

今度は首を縦に振らず、しかし否定もせず、桃香は押し黙った。

両者の緊張が高まる。微かな動き、呼吸すらできないぐらい、空気が重い。

「……ともかく、戦の準備だけは怠らないようにしましょう。お互

「いのために」

「……はい」

ようやく、桃香も肯定する。

その応答によって雰囲気も弛緩して、場のほぼ全員が、息をついた。

基本的な方針が定まり、実務を仕切る鳳統と荀攸によるすり合わせも終わり、ひとまず今日は解散することになった。

俺は曹操達を送ると申し出て、特に異論なく許可され、俺、俺の護衛の関羽、曹操、夏侯惇、荀攸の5人は、数名の警備兵とともに劉備軍本営を出た。

「わざわざ悪いわね」

と、華琳。別に本心から悪いとは思っていないが。

「いや、ついでに街の様子も見ておきたいから」

これも、半ば嘘で、半ば本当だ。火をようやく消しきった街を見たいというのもあるが、荀攸……賈馱の様子を見たいというのが第一だ。

俺は、荀攸に出会ってから数時間の間に、一つの推測をだしていた。

それは、荀攸は、やはり賈馱本人だろう、ということだ。

俺が董卓軍の華雄を生け捕り、葉雄と名前を変えさせて仲間に入れたのと同様に、曹操も、賈馱を軍師とするにあたり、偽名を与えたのではないか。

この推測は、自分の中ですごくしっくりくるのだが、しかし、確証はない。

なんとか、詠だつていう手がかりだけでもあればいいんだが……数歩前をいく荀攸の後ろ姿を見る。

見慣れない服を着た、見慣れた少女の背中。

昔見た覚えのある董卓軍の軍師衣装でもなく、ましてメイド服で

もない、曹操軍特有の青を基調とした軍服に身を包んだ姿は、中々に似合っていて、月の友達としての彼女というより、軍師としての彼女という感じがした。

（曹操軍の軍師になったのは、捕虜になって仕方なく、なのか。それとも自分の意志で、なのか。どちらかによって、俺も取るべき対応を決めなきゃな……もし、彼女が、賈馱だったとしたらけど）
まだ荀？さんちの荀攸ちゃんという可能性がないわけではない。
外見的にはともかく、性格的には似たところがあるしな、あの二人俺に対する罵詈雑言とか。

「そういえば、劉備の意向は聞いたけど、あなたがどうしたいかは聞いていなかったわね」

隣に並んだ曹操が、横目で俺を見る。

「へ？俺がどうしたいかって？」

「劉備は河内と河南を治めるんでしょう？あなたはどつするの？」

「ええつと……？」

華琳の聞きたいことがよくわからない。

「あなたは、どこか治める気はないの？」

「え……俺が、治める？」

「そうよ。今回の戦い、劉備の活躍と並ぶかそれ以上にあなたの名前も轟いた。天の御遣いなんて噂と一緒にね。劉備のようにいずれ一つの州の長になれるかはわからないけれど、一郡の統治なら誰も文句は言わないでしょう」

「一郡……曹操の陳留郡とかみたいにか？」

「ええ」

華琳は笑顔で応える。

「劉備の近くがいいでしょうし、豫州の潁川郡なんかいいんじゃない？」

「潁川ってたしか、豫州の一番北だっけ。北西に接するのが河南で……」

「北東に接するのが陳留ね。私たちの領域と、袁術の本拠、南陽の

間にある土地よ。袁紹と対陣するエン州東郡には夏侯惇を配置して備えるつもりなのだけれど、袁術の方には候補がないの。これから人材は集まってくるでしょうけど、できれば政治と軍事に通じた即戦力が欲しいところだから」

「……………それは、俺でもいいのか？」

「買いかぶられている気がする。」

「一時とはいえ公孫贇と幽州を治めていたんでしょ？ それでなにも学んでいないならただの馬鹿よ」

「白蓮が意外と万能だったからなあ……………うーん」

と、後ろからクイツ、クイツ、と服の裾を引っ張られた。

愛紗が不満げな顔をして、

「……………ご主人様、お受けになるおつもりですか!？」

華琳に届かないぐらいの小声で問う。

「いや、考え中だよ。桃香とあわせて三つの郡だろ？ 手に余るかもしれないし、でも、万が一洛陽から逃げることになったら、有用そうだし……………」

俺と関羽がひそひそ話し合っている姿を見て、曹操が声を掛ける。「なんなら、こっちから人員をまわしてもいいわよ。私としても、エン州を制圧しているとき、隣の州にあなた……………友軍がいてくれるのは、ありがたいしね」

「え、そこまでしてくれるのか？」

曹操軍は人材が豊富とはいえ、他軍に貸与するなんてよほどのことだ。まして曹操は人材コレクター。気に入った人間には惜しみなく愛情を注ぐタイプなのに。

「曹操殿にお尋ねしたいのだが……………なぜ、そのような話を道中で？ 我が主、劉備のいる所でご提案いただければよろしかったのでは？」

「今思いついたからよ」

「……………他意があるのでは？」

「あら。関雲長は何を疑っているのかしら？」

電流が走るように、一閃、鋭い視線を二人は交わした。

「愛紗！ 曹操ともめるのはマズイって！」

「わかつておりますっ……ですが、これはご主人様と桃香様に関わる大事っ　！」

「何が言いたいの？」

「天の御遣いたるご主人様を取り込み、利用なさるおつもりではないのか！？」

関羽が叫ぶように問い詰めると、曹操は黙り込み、不気味な静寂が満ちた。

曹操に何の反応もないのを見て、そこにいた者たちが居心地の悪さを覚えたあたりで

「っな、なにをぬかすか、関羽！！」

夏侯惇が切れた。

「なぜ、華琳様がわざわざこのような男をつ！！」

「曹操殿は私を劉備軍から引き抜こうとしたではないかっ！ それと同じ事をしないとなぜ言える！」

口舌激しく、夏侯惇と関羽がやりあっているのをよそに、華琳は、流し目で俺を一瞥して、

「……別に、天の御遣いだからじゃないわよ」

「え？」

華琳らしくない小声で、聞き取れなかった。華琳は改めて言うつもりはないようで、関羽の方を向き、

「こほん。関羽、あなたの不信はわかった。別に今結論を出せとは言わないわ。帰って劉備と相談して決めればいい。豫州に関して必要な資料は、荀攸に届けさせるから」

「ぐ……ぐむ……その、曹操殿を信頼していないわけでは」

「はいはい。ご主人様のことになると嫉妬しちゃうのよね？」

「な……！？」

愛紗は赤面を抑えられず、否定の言葉もうまくいえず口ごもった。「と、ここらへんでいいわ。人通りも多くなってきたし、敵の監視

があつても察知しにくくなる。私たちが通じていることを広く知らしめることもないでしょう」

「ん。そうだな。それじゃあ、ここで……ええっと、荀攸」

「はい？」

突然俺に名前を呼ばれ、一拍遅れて、荀攸は返事をした。

「これから、よろしく」

手を差し出す。

「……」

荀攸は一瞬、どうするか迷ったように手を閉じたり開いたりして、そして、俺の手をとった。

俺は、荀攸の柔らかかな手を、優しく握り、ほほえむ。

「……っ、こちらこそ、よろしく」

口元を少しだけゆるめて、荀攸は挨拶した。

二人の握手が終わると、俺たちは別れた。

(目は笑ってなかったな。俺にまだ気をゆるしてないってのもあるだろうけど……やっぱり、別の理由がありそうだな)

帰路、柔らかさの中に緊張した硬さをもった荀攸の手を思い、俺もまた複雑な思いを抱いて足取りを重くさせた。

劉備の元へ帰還し、曹操の提案を打ち明けると、

「いいと思うよっ」

あっさりと劉備は前向きな考えを示した。

「私も賛成です」

孔明も頷いた。

「河南と河内は黄河で隔てられているため逃げにくいですし、潁川郡は、退路の確保という意味で重要な土地です」

「ただ……誰が潁川を守るかが問題になるかと」

「ああ。そうだな……。洛陽は桃香が守るとなると、河内は俺か。

で、それぞれに関羽か張飛、孔明か鳳統を付けちゃうと、もう潁川

郡には将も軍師もない」

「愛紗さんになら一郡の施政を任せられそうですが、どうしても陣容が薄くなつてしまいます」

うーん、と俺たちは頭を抱えた。

そこに、

「私と馬超が手を貸そうか？」

煎餅をかじる、ぼり、つという音と共に、誰かが言う。

「白蓮!？」

軍議の間の端っこで、お茶を飲み飲み傍聴していたらしい。

「いたのか、とか言わないでくれよ？ 影が薄いのは承知してるんだから」

「な、なにも自分でそれを言わなくても」

桃香が苦笑する。

「手を貸すつて、どういう事なんだ？」

「言葉の通りだ。私と馬超が、一郡を受け持つ。私は桃香と方針が同じだし、馬超は反董卓連合側に残るつもりらしいから」

「馬超が？ でも、母親の馬騰は涼州にいるんだろ？ 帰らなくていいのか？」

「馬騰の指示らしい。中原を監視しろ、だそうだ。多分、西涼の後継ぎである馬超に、経験を積ませるつもりなんだろう。けど、馬超には中原に頼れる場所がない。私の幽州に招こうかと思っていたが、遠いからな」

「なるほどお……ん？ でもでも、白蓮ちゃんは帰らなくても大丈夫なの？」

「ああ。定期的に連絡を取っているが、今のところ異民族の動きも無いし、黄巾残党も大人しく耕作や防衛に従事してくれている。念のため、私の従妹の公孫越を戻すつもりだから、しばらくはそれで問題ないだろう」

「公孫越……あの時の副官さんか」

? 水関で華雄と戦ったとき、俺の副官として補佐してくれた人だ。

「だから、一郡の管理なら遣り果せるさ。公孫贛軍一万、馬超軍七千もそれで維持できる」

「……うん。いいんじゃないかな。俺はそう思うけど？」

俺は桃香をみる。

「私も。白蓮ちゃんと馬超さんなら、信頼できるよ」

で、桃香は朱里を見る。つられて全員が朱里の顔を見る。

「はわわ……えっと、基本的に同意見です。ただ、どこに誰を配置するかは、これから視察をしてからの方が……」

「そうだな。それに、今は、都の復興が最優先だからな」

こくり、と全員が頷いた。

「それじゃまずは、皆で頑張つて都を元の姿に戻そうかつ！」

桃香が腕を振り上げると、全員が、応っ、と声をそろえた。

それから数日、都の復興のため、俺たちは東奔西走した。

都城の内側、民家や商家の建直しを手伝い、避難していた人々を元の場所へ帰した。

都城の外側、城壁を補修し、城牆を増やし、守城兵器を生産した。人夫を雇うと同時に、予備軍としての軍兵を増やし、屯田を行った。

さらには、西の函谷関の補強や、東の虎牢関の復旧による防衛力強化。

軍事や政治には関係ない、しかし重要な、荒らされた陵、墓地の修復。

1ヶ月に満たない間に、劉備軍が都の復興を行っていることが広く伝わり、たくさんの人が、董卓軍の再侵攻の危険性を知りながら、劉備の元へと駆けつけてきた。

そしてその中に

「蔽顔と申す。かつては蜀の劉璋殿に仕えておりました」

蔽顔 桔梗がいた。

「蜀　！　すつごく遠くから来たんですねえ！」

「はは、愛馬は多少疲労しておりますが、わし自身はたいしたことありません。劉備殿、北郷殿、どうか、この身を使ってくださいね」

「はいっ！　そりやもう……ねっ、ご主人様！」

「ああ。心強いよ！」

こうして、敵顔が仲間に加わった。

俺は、こんな時期に敵顔が劉備の元へ来るなんて、やはり異常だと思いつつも、他に考えることが多すぎたので、それを棚上げにした。

「ふう……」

俺は、自室で政務……書類の処理におわっていた。

劉備や孔明が手伝ってくれるとはいえ、洛陽には大量の案件が集まってくる。皇帝はいなくても、やっぱり、洛陽は都だからだ。

「えっと治水の工事の確認……で、印を押して……あれ？」

印がない。さっき席を外したとき仕舞ったっけ？

棚を開けて印を取り出して

「あ

そこで、敵重に鍵を付けて保管した、あれが目にとまった。

皇帝の印、玉璽だ。

洛陽へ入った当日、井戸の中で見つけた。

そのあと、誰にも見せなかつたし、誰にも言わなかつた。

混乱を招くだけだと思つたからだ。

「どうしたもんかな……」

俺は、肩をすくめる。

処分するわけにもいかないしさあ……。

「でもこれで、袁術が暴走することもないかな」

小さな体に無邪気な心。袁紹とはまた違った御嬢様。ふわふわくるくるの長い金色の髪。その髪と同じ、無垢な顔。ワガママで、子

供のままの、小さな雄。

袁術。演義では、玉璽を得て皇帝を名のり曹操を攻撃、敗れて斃死している。

玉璽をこうして俺が持っていれば、そんなバッドエンドも多分無い。

これでも一応、袁紹や袁術も、生きていて欲しいとは思っているのだ。問題は、彼女たちがいろいろ勝手に動き回り暴れ回っちゃうから、仲間にしづらいつていう事だけで。

「……」

俺は玉璽ではない、自分の印をとって、棚の引き出しを閉める。

そして書類に印を押し、一息。

食事やトイレ以外今日は、閉じこもりっきりだ。

「ん〜！ 目が疲れたな」

眉間を揉みほぐし、身体を伸ばす。

「ええっと……書類は、大体終わりかな？ うん、終わりだ。終わりにってことにしよう」

まだ机に残ってる書簡は見なかったことにする。一応全部目を通して優先順位を決めてあるから、残りは小さな事案だけだ。

だから。

「外に出るか！ 視察、視察！」

視察ということにしたいだけだ。

「刀は……あんまり持って行きたくないけど、愛紗がうるさいからなあ。持っていくか。と、服は お！？」

衣裳箆笥を開けると、見慣れたものが目に飛び込んできた。

フランチエスカの制服だ。

正確に言うと、そのレプリカ。

俺が制服を無くしたことを知り、朱里と雛里が、その正確な記憶を元に、再現させたらしい。なんでもそういうことに強い職人が都には居るんだとか。この前桃香たちが着ていた、剣道着とか体操服ブルマとかもその職人の作品なんだそうだ。

「ははっ、すごいな、ほとんど同じだ！ 素材は違うんだらうけど」
ポリエステルはさすがに再現できないだろう。

「よっと」
制服を着込む。普段着とは違う、ちよっと硬い着心地。身が引き締まる気がする。

なにせこれは天の御遣いの象徴だ。元の世界ではただの制服でも、この世界では特別な意味を持つ。

「よーしっ、行くぞっ」

部屋を出て、中庭へ。中庭を横切って外に出るのが一番早い。

「あれー！ お兄ちゃん！ どこへ行くのさ？」

中庭で丈八蛇矛を振り回していた鈴々が飛んできた。

「うん、ちよっと街を視察してこようと思って」

「街に！？ じゃあ、鈴々も行くのだ！」

別に遊びに行くわけじゃない、なんて言い訳をする間もなく、張飛は蛇矛を置きに行き、飛ぶように戻ってきた。

「じゃあ行こうか」

敷地を出て、洛陽の路地に入る。細い道を抜けて、主要道、メインストリートへ。

「ようやく、都も賑わってきたな」

「たくさんお店が開いてるのだっ！」

俺たちが洛陽へ入ったときには閑散としていた道が、人で溢れている。まだ戦の爪痕が残っていて、所々焼け跡や瓦礫、臨時の救護所があったりするが、それを除けば、平和な町並みに戻ってきているようだ。

「さて、まずはどこへ行こうか？」

「とりあえず腹ごしらえなのだ！」

「だと思っただよ」

微笑して、手近な食事処を探す。

「ええと、ここは あれ？」

食欲を誘う匂いのする所の暖簾をくぐると、見覚えのある姿があ

った。青紫の着物と髪、はなやかな色の簪。大胆に開いた着物の裾から伸びる、あでやかな長い足。

「蔵顔……こんなところで何してるんだ？」

蔵顔は、透明な液体で満ちた杯を飲み干し、こちらを向いた。

「ぶはあ　　おや、北郷殿。鈴々も一緒か。なに、仕事の合間に三水なぞを」

「それ、言い換えてるだけで酒だろっ！」

肩当てに書かれた「酔」という大字の通り、桔梗は大の酒好きだ。「おっと、ばれましたか。ううむ、まいりましたな」

桔梗は椅子の上で足を組み替える。つい、その足の動きや、その隙というか隙間というか裾の間に目がいつてしまい、慌てて視線を戻す。

が、桔梗は俺が何を見ていたか感付いていたらしく、

「ふふつ、関羽殿や孔明殿に告げられないためには、夜にお邪魔すればよろしいですか？」

と、妖艶な笑みを見せる。

「い、いや。言わない、別に言わないから……」

思わず股間がむずつきそうで、身じろぎする。

「ふつ、委細承知……つと、それはともかく、北郷殿は如何なる用件ですか？　ここには酒と酒と酒しか置いておりませぬが」

「あー、やっぱり？　食事でもと思ったんだけど」

「お腹空いたのだー！」

「ああ、なるほど。残念ながら、酒の肴はありますが、鈴々の腹は満たせないでしょうな」

桔梗は着物の袂から金を出して卓の上に置き、

「では、一緒にどこか食べられる所を探すとしましょうか」

桔梗と共に店から出て、また街の大通りを巡る。数軒、料理の質や量を理由に却下したところで

「ここなんかどうですか？　量が多いですし、料理の種類も豊富で」

「ここにするのだ！」

桔梗の解説をさえぎり、空腹が限界らしい鈴々が、店の中に入った。

結構広い店内は、かなりの賑わいを見せていて、座れるところがなさそうだった。

「うわー、こりゃ、駄目かな？」

少し待てば空きそうだが鈴々がもつかどうか

「あれ……あそこ空いてる？」

店の一番奥で数人が卓を囲んでいる所の、手前のテーブルが空いているように見える。

「えっと、店員さんは……」

「い、いらっしやいませえ！ ごめんなさい、混んでいて……こちらにどうぞー！」

慌ただしく店員さんが駆けてきて、俺たちを案内する。

鈴々の手を取り桔梗を連れて、店の最奥へ。やはり、空いていたようだ。

「良かった、これで食べられる」

「待て」

冷たい響きを持つ低い声が、俺たちの動きを制止した。店員さんの目の前に誰かがいるらしい。背丈の関係で、どんな人かは見られない。

「警護上、ここから内側へは入れられない。先にそう言っていたはずだが」

「す、すみませんっ！ 店が混んでまいりましたので」

店員さんが、頭を下げ、そして俺の目の前に、ひとりの少女の顔があらわれた。

「む？」

「あ」

それは、呉の武将、甘寧だった。

「北郷か」

「あ、ああ。甘寧、ってことは、向こうにいるのは孫権？」

「お前に教える必要はない」

「ええつと……」

ちよつと背伸びをして、甘寧の向こうの様子を見る。

奥には、孫権と、陸遜がいて、和気藹々と食事をしてた。

「思春？ 何やってるんだ？」

と、孫権がこちらを見て

「ほ、北郷っ！」

蓮華はガタツと椅子を揺らして立ち上がった。

「あらー、北郷さん」

陸遜もこつちに気づいて手を振ってくる。

「や、久しぶり、かな？」

孫権も同じ洛陽にいたらしいが、虎牢関の戦い以来、顔を合わせ
ることはなかった。

「あ、ああ。久しぶりだな。えつと、食事か？」

「うん。その卓子、使っていいかな？」

「ああ。いいだろう？ 思春」

「……………蓮華様がそうおっしゃるのであれば」

甘寧がひいてくれた。

ほつとして、俺たちは席に着く。

「よーっし、食べるのだあ！ お姉さん、これとこれとこれ持って
きて欲しいのだ！」

鈴々は席に着くなり注文する。

「ふむ、わしはこれとこれを頼む」

この店をよく知っているらしい桔梗は、お品書きを一目見て注文
する。

「ええつと俺は……………ここは何が美味しいのかな？」

と、後ろの席にいる孫権に聞いてみる。

「わ、私に訊いているのか？ そうだな……………売りにしてる水餃子が
美味しかったかな」

「そうか。よし、じゃあ、とりあえずそれで。あと、ここらへんを一通り」

鈴々や桔梗が好きそうなのもついでに頼む。

少しして、料理が運ばれてきた。

テーブルいっぱい料理料理。

「すごいな！ そんなに食べるのか？」

蓮華が目を丸くする。

「いや、俺じゃなくて……」

「いただきます！ はむ、はむ、はふっ！」

「ね」

「……なるほど」

超健康家である張飛は、小さな体で俺の数倍は食べる。しかもすごい勢いで。

「俺も食べなきゃ無くなっちゃうな。と、これが水餃子が……」

ちよっと厚めの皮に肉や野菜を閉じ込めて茹でた餃子。箸で掴むとつるりと滑りそうだ。

「はぐ……おっと、肉汁が……と、はふ」

噛むと具が熱い肉汁と一緒に飛び出して来る。

「おお、美味しいなこれっ！」

「そうかつ、よかった」

すすめた孫権が、嬉しそうに破顔一笑した。花開くような微笑みに、俺は、ちよっとどきまぎした。

そうして、飲み食いしながらの談笑が始まった。

「え？ じゃあ、長沙に一旦戻るの？」

「ああ。大軍をこのまま無為に疲弊させるわけにはいかないからな。私と周瑜、甘寧、あと呂蒙あたりを連れて、兵の一部を荊州に戻すつもりだ」

孫策軍の旗揚げは、孫呉の先主である孫堅の領地、長沙だ。荊州のかなり南に位置するため、中原からは遠い。

「じゃあ、しばらく会えなくなるのか……」

「そうだな……だが、荊州の情勢が安定しているようなら、すぐに戻ってくる予定だ。中原は放置しておける状況じゃないし」

「そっか。それならよかったよ。会えないと寂しいもんな」

「うん……うん……そうかもな」

と、俺たちが食事をつまみながら話している隣では、

「ほう。孫呉の将にも酒豪がおられるのか」

「はい。そりゃもう、底抜けというか、なんというか」

「ふむ。わしの友人も酒に強くてな。それほどなら、一度3人で競つてみたいところだな」

「うわ、それは私も見てみたいですね……できればちょっと遠いところから」

と、巖顔と陸遜が酒を酌み交わし、そして、

「甘寧のお姉ちゃんは何で下になにもはいていないのだ？」

「……別ににもはいていないわけではない……動きやすくなるためだ」

「動きやすいか。じゃあ鈴々も、下、脱いだほうがいいかな？」

「……それはやめろ」

意外な組み合わせの張飛と甘寧が、妙な話で盛り上がっていた。

「そういえば、この前会ったときと服が違うな」

「ああ。孔明と鳳統が作ってくれた服なんだけど……」

「ほう。あの二人は服飾の製作までやるのか？」

「ああいや、えーっと、前に俺が着ていた服の復元なんだ。元着ていた服は無くしちゃってな」

「ふうん。確かに、奇抜な意匠だし、天の遣いとかいう噂に合っているかもな」

「あはは、そんなに变かな」

向こうの世界では数百人が同じ恰好をしているのだが。

「いや……変ではない。その、似合っていると思うぞ」

「そ、そうか。ありがとう、孫権」

なんとなく照れ臭くて頬を掻いた。

「初々しいのう」

「見ているこっちが微笑ましくなりますねえ」

蔵顔と陸遜がそれをみてニヤニヤする。それをツマミに酒を飲む。

「ぱくぱく、むぐむぐ、もぐもぐ……うっ！ うっうっ！」

「……………！？ 水ッ！」

「ごくごく、ぷはっ、……………はあ、助かったのだ！ ありがとうなのだ！」

「……………いや。……………落ち着いて食べる」

「わかったのだ！ ぱくぱく、はくはく！」

「……………」

張飛と甘寧はマイペース。

そんな3組のやりとりは、食事の終わりと共に一段落した。店が混んでいるので食後に居座るのも憚られ、店を出た。

「あつ！ 御遣い様だ！」

往来に足を踏み入れると、俺は子供に取り囲まれた。

「おおっ！ なんだなんだ」

「お兄ちゃんっ、遊ぼうよ！ 向こうに、劉備お姉ちゃんもいるよっ！」

「へ？ 桃香が？」

「ほう、子供に人気なんだな」

孫権が感心して、笑った。

「巡回の度に一緒に遊んでるからな」

「……………それは巡回の意味がないんじゃない」

「お兄ちゃん、早く早くっ！」

と、子供たちは俺の手を取って、駆け出した。

俺もそれにつられて、駆け足になる。

「お姉ちゃんも行くよ！！」

「わっ、ちよ、ちよっと待って！」

突然引つ張られてつんのめりそうになりながら蓮華が連れられていく。害意はないと判断したのか、甘寧は警戒しつつも止めはしな

かった。

「劉備お姉ちゃん！」

街の広場に着くと、子供たちが手を挙げて桃香の名を呼んだ。

桃香は広場の真ん中で子供たちに囲まれ、なにやら一緒に遊んでいるようだった。

「はぁーい！ なになにに、どうしたの？ ……あれ？ ご主人様！

鈴々ちゃんに敵顔さん！ それに、孫権さんたちまで！」

「あはは、や、桃香。さっきまで一緒に食事してたんだけどね、この子たちが遊ぼうって」

「そっだったんだ！」

「う、うむ。だが、私たちは」

と、孫権が遠慮するような素振りを見せるが、

「ちよっとだけ遊んでいこうよ！」

俺は、一歩退こうとする彼女の手を取った。

「ね！」

「……う、うん」

蓮華が頷くと、

「わーい！ 何して遊ぶ？」

子供たちが飛び上がって喜んだ。ついでに桃香も飛び上がった。

俺たちは陽が暮れるまで、皆で遊んだ。

鬼ごっこや隠れんぼに始まり、男の子たちと相撲、女の子たちとおままごとなど、思い付く限りのことをやった。

暇なときに李典と作った竹トンボや剣玉、鞠で遊んでみたりして、疲れて眠っちゃう子がでるくらいだった。

「こんなに遊んだのは久しぶりだ……」

と、蓮華が肩で息をしながら、楽しそうに言う。

「孫尚香とは遊んだりしないの？」

「ん？ ああ、もうすこし小さい頃はな……今は、やることも多いし、たまにだな」

「そっか。今度は、孫尚香も誘って皆で遊びたいね」

「……うん、そうだな……」

「孫策とか周瑜も」

「それは嫌だ」

孫権はすごく嫌そうな顔をした。

「な、なんで？」

「姉様は暴れ回るし、周瑜は泣かすまで勝ち続けるし……ろくな思
い出がない」

「ぷ……つくく、そうなんだ」

小さな蓮華をからかうように遊ぶ2人の姿を想像して、思わず吹
き出した。

「でも今なら、勝てるかもしれないんじゃない？」

「む……確かに、今なら私も……いや……しかし……」

蓮華はぶつぶつと考え込む。

「ご主人様〜！ 寝てる子、敵顔さんと一緒に送ってくね〜！」

と、桃香が小さな子をおんぶして、こっちに向かって叫んだ。

「ああ！ じゃあ、俺は、残りの子を送ってくから！」

「は〜い！」

桃香は手を振って了解を示し、歩み去っていった。

「劉備は元気だな」

「何事にも一生懸命だから……多分、帰ったら、ちっちゃな子みた
いに眠っちゃうよ」

「そうか……ふふ」

愉しげな蓮華の元に、甘寧が寄ってきた。ちなみに、甘寧もさっ
きまで一緒に遊んでいて、鬼ごっこで猛威をふるっていた。

「蓮華様。そろそろ、時間です」

「そうか。では、私たちも帰るとするか。北郷、私たちの屋敷の方
向に帰る子は連れて行こう」

「うん。それじゃ、よろしく頼むよ」

子供たちを集め、蓮華に預ける。

「では、またな、北郷」

「ああ。おやすみ、孫権」

別れの言葉を交わし、孫呉の3人を見送る。

黄昏の中、鮮やかに赤い孫呉の服は輪郭をぼやけさせて、最後にちらりと振り返った蓮華の瞳の蒼色を余韻に、道の向こうへと消えていった。

残ったのは、俺と、鈴々と、数人の子供たちだけだ。

「さーて、俺たちも帰ろうか。鈴々！」

ちよつと離れてまだ子供たちと遊んでいる鈴々を呼ぶ。

「えー！！ まだ遊ぶのだ！！」

「そうだそうだ！」

「だーめ。もう暗くなっちゃうからな」

子供たちと声を揃えて反対する鈴々を押し、家路を急ぐ。

夕日を背に、遊びの終わりを惜しむ声をあげながら、てくてくと帰る。

「じゃーねっ！ 鈴々お姉ちゃん！ 御遣いのお兄ちゃん！」

「おうっ！ 気をつけて帰れよ！」

「また一緒に遊ぼうなのだっ！！」

最後の1人まで家に送って、そして、ついにただ2人になった。

「今日は楽しかったのだ！」

「うん。そうだな」

「なんだか、いつも戦ってばっかりなのが、嘘みたいなのだ……」

鈴々は、遠く夕焼け空を見る。

「ん……きつと、乱世が終わって、平和になれば、こんな毎日になるよ」

「……平和になる頃には、鈴々も大きくなって、おっばいとかばいんばいんになってるのだ！」

「あははっ、そうかもな」

「ぶーっ、お兄ちゃん信じていないのだ！」

俺は笑いながら、茜色の空を眺めた。

まだまだ、平和への道筋は見えない。

蒼天の先がどこへ繋がっているのか、誰にもわからないのだ。

平和になるのが、十年先か二十年先か、それもわからない。

もしかしたら、俺や、鈴々が死ぬまで、戦乱の世は続いているかも知れない。

だから。

柄にもなく、俺は祈った。

願わくは、蒼天の先、暗路の出口が、あの悪夢のような血の黄昏ではなく。

今日の夕焼け空のような、皆が笑って別れられる黄昏でありますように、と。

さて、そんな俺の願いが通じたのかなんなのか、しばらくは平和な日々が続いた。

もちろん、平和と言っても小さな争いは結構あって、その処理のために俺や桃香たち、華琳や雪蓮たちも中原を駆け回った。

相手は董卓軍だったり黄巾党だったり、ただの賊だったりした。中原の三強といえる、劉備軍、曹操軍、孫策軍が睨みを利かせているだけあって、そのどれもが、たいした成果も上げぬままひきあげていった。

規模が小さいだけに、それらの戦いにたいしたエピソードはない。精々、劉備軍の将としてデビューした葉雄（華雄）と嚴顔の初陣があっただくらいだ。

董卓軍との大戦を経験したみんなにとっては、ゴミの掃除みたいな日常レベルの仕事だったようで、平穩すぎて退屈しているやつまて出る始末だ。

とはいえ、状況は確実に変化していた。

一つは、孫策軍の孫権率いる部隊の荊州帰還。これには周瑜、甘寧、呂蒙が同行し、孫策軍の半分近い七千の兵が、荊州・長沙へと

向かった。

俺は、孫権が洛陽を出発する日に別れの挨拶を交わし、見送った。孫策に尋ねたところ、兵を選びすぎり、1ヶ月かそこらで再び中原に戻ってくる予定らしい。今頃、長沙についた頃だろうか？

二つ目は、袁紹の冀州侵攻。冀州の南部を本拠とする袁紹は、賊の平定を理由に北上し、冀州の三分の一を制圧した。

大した正統性もないが、やっていることは俺たちも同じだし、撃つことができる兵力もないため、これは見逃された。唯一、冀州に接している幽州公孫贇軍だけが、これを看過せずに南進して、袁紹に対抗した。

三つ目は、劉備・曹操連合による、エン州・豫州侵攻。

これもまた、袁紹と似た理由付けによって両軍は東征し、それぞれ州の半分近くを獲得した。

軍の力だけで考えれば、完全に制圧することもできたのだが、早すぎると人材確保が追いつかないうえ、防衛ラインが伸びるということ、控えめかつ着実にその勢力を伸ばした。

これらは、まだ、他軍と正面衝突する事態には至ってはいない。

だが、確実に、その時は近付いている。

劉備軍領、豫州潁川郡、許昌

「一番先にぶつかりそうなのは、袁紹と公孫贇かしらね。どちらも冀州を狙っていて、侵攻中だし、袁紹の性格的に、境を接したらその瞬間攻撃を始めるわよ」

許昌城内の執務室、執務机の上に座って曹操は言う。

「そうかもな……………ところで、なんでここにいるんだ、曹操？」

潁川郡の太守として執務室の椅子に座る俺は、首を傾げた。

「なによ。居ちや悪いっていうの」

「いや……まあ、たまにくるぐらいならわかるんだが。結構頻繁に
来てないか？」

「許昌は洛陽より近いし、危険にもさらされていないわ。一番、逢
瀬にふさわしいと思わない？」

と、曹操が顔を近付ける。

「逢瀬つて……その、深い意味はないよな」

「さあね……」

ぴょん、と曹操は机から降りる。髪がふわりと躍動し、鼻に触れ
てはいないが、その香りが鼻をくすぐる。

俺に背を向け、何かの資料に目を通してはじめる曹操。

（なんだか最近、思わせぶりなんだよな……）

魔王・華琳の細い背中の中のラインを見つめながら、熟思する。

（だからって、劉備軍の皆と同じように手は出せないし……もどか
しい。前の世界の記憶には、ちゃんと、あるんだけどな……）

彼女の、生まれたままの姿の記憶が。

その、情欲を誘う肢体と、色と、香りと、吐息と、体温が。

（しかし、曹操軍に属しているわけでもない俺が、どうやって華琳
を……ごによごによできる？ 下手したらその場で殺されるし、上
手くいつても春蘭とか桂花とかに殺されそうだ）

小さくため息をつく。

別に、性欲がたまっているわけじゃない。

けれど、前いた三国志世界では、華琳と心を通わせ、体も重ねた
のだ。その熱い想いがうずいて、2人きりになると、俺一人燃え上
がりたくなってしまふ。

（ただの片思いよりきついなこれ……）

まるで、記憶喪失した恋人と、友達として接しているような、そ
んな気分。

執務の途中だが、どうにも手がつかなくなり、思わず、華琳を目
で追ってしまう。

その背中を、後ろから抱きしめたくなる。

どす黒い衝動を持って余してついに立ち上がるうとしたその瞬間
「一刀く！ いるく？」

雪蓮 孫策が執務室に顔を出した。

「そ、孫策？」

「ああ、いたわね。あらら？ 曹操も一緒か」

「不都合だったかしら？」

突然の来訪に驚きもせず、華琳は孫策の方を向く。

「いいえ。むしろ好都合」

「？」

曹操が眉を顰めるのをよそに、孫策は俺を見る。

「何か緊急事態か？」

孫策軍本隊は現在、荊州北部、新野に駐屯している。袁術が本拠とする荊州南陽郡に新野はある。

「うづーん、黄巾党の流入とか賊の暴動とかはあるけど、別にたいしたことはないわ……それに、そこらへんは私が招いた事でもあるし」

「え？」

最後の方が聞き取りづらくて、俺は聞き返した。しかし、そこは孫策にとって重要ではなかったらしく、繰り返しはしなかった。

「今日はねー、酒盛りのお誘い」

「酒盛り？」

「そう。お目付役の周瑜もいないし、今よ！ 今しかないのよ！

羽目を外せる機会は！」

「……ああ、なるほど」

周瑜……冥琳は、天才にしてじゃじゃ馬な孫策の監視役なのだ。

それが、今、孫権と一緒に長沙に向かっている、いない。

ということ……。

「新野でやつてもいいんだけどね、どうせならやつぱり華やかなところでやりたいじゃない？ なら、一番栄えている都がいいと思っ
てね」

「都つて……洛陽か？ 確かにあそこは栄えてるけど、まだ戦いの余波で荒れてるぞ。やるなら曹操の陳留とか」

「ああ、違う違う。私が言っているのは、ここのことよ」

「……？ ここつて、許昌か？ まあ、皆のおかげでだんだん人も増えてきたけど、都とはいわないんじゃない……」

「あら。当人は噂を知らないわけね」

「噂？」

「そう。董卓と天子のいる長安、劉備のいる洛陽、そして 天の御遣いがある許昌。今、民の間で都といわれているのはこの三つよ」

「それは……なんとというか、都のバーゲンセールだな」

「ばーげん？」

「あ、いや、なんでもない。でも、天の御遣いなんてほとんど嘘だし、実態のない風評だよ」

「まあね。でも、民はそれを信じているわ。信じて、ここに集まってきている。劉備の洛陽もそうだけど、風評は広く広がって、民を動かす求心力になっている。実態がないなんて言わせないわ」

「……」

俺は黙り込む。確かに、慕ってきてくれる人はどんどん増えている。だが、それは劉備 桃香の力もあるのだ。正直、実感がない。「中には、あなたが、皇帝が洛陽に隠した玉璽を拾っていて、じきに新しい皇帝になる、なんてとてつもない噂まであるわ」

「！？」

心臓が跳ね、背筋に、寒気が走った。

誰かに知られていた ！？

俺が、玉璽を手に入れたことを ！？

誰に ！？

「都かどうかは置いておいても、今勢いがある、賑わっているのは、洛陽、陳留、許昌で決まりでしょうね。まあ、洛陽でも陳留でもないんだけど、距離的に許昌がよさそうだし、というわけで、酒盛りはここでやることに大決定ー！！……一刀？ 聞いてる？」

「あ、ああ。ここでな……うん、わかった。やるっ」

震えそうになる体と声をおさえて、頷く。

「やったー！！　じゃあじゃあ、参加したい人は、明日の夜にここの大広間で、つてことでいいかな？」

「おう。飲物とか食べ物、ある程度の用意はしておくよ」

「やったー！　それじゃ、私一度戻って用意してくるから！　じゃねー！」

雪蓮は軽やかなステップで退出していった。

「……酒盛りね」

「曹操も参加するのか？」

「そうね……今日中に明日の公務を終わらせれば……行けるかしらね」

「ええと、無理しなくても……」

「行くから」

「わ、わかった」

「うちの部下は……そうね、何人行けるかわからないけど、多くなるようならこちらも色々持って行くわ。ちょうど、新しいやり方で作ったお酒が完成したところだし」

「そっか。楽しみにしてるよ」

「そうとなれば、急がなくてはね。今日はこれで帰るわ」

と、華琳も軽快な足取りで帰って行った。

台風一過、静寂が戻って、俺は椅子に座り。

片手で頭を抱えた。

「……………」

孫策から致命的な情報を得てしまった気がする。

俺が、北郷一刀が、玉璽を得たことを知っている人物がいる……。

誰だ？　誰が見ていた？

あの場にいたのは、北郷・公孫贄・馬超軍の兵士ぐらいだ。玉璽を見つけてから誰かの目に触れさせてなんかいないし、まして、玉璽を得たことを言った覚えは無い……。

いや、そもそも、なんであんなところに玉璽があったのかが謎だ。虎牢関突破から洛陽陥落まで、時間は十分にあった。なにはなくとも、玉璽ぐらい持って行ける余裕はあったはずだ。

それが、なぜか井戸の底に捨て……いや、あれは捨てたって感じじゃなかった。

置いたんだ。あそこに。意図的に。

そして……俺に拾わせて……噂を流した？

なんのために？

ぐるぐると、巡る思考。考えはまとまらず、ますます、謎が深まるばかり。

「1人で考えるの……限界なのかもな」

元々俺は孔明や鳳統のような頭脳の持ち主じゃない。かといって関羽や張飛のような武闘派でもないが。

仲間に頼って、戦ってきたんだ。

「……でも、こんなこと相談できるか？」

ただでさえ天の御遣い云々で、わけのわからない事情を抱えているんだ。

それが、前の三国志世界がどうか、その記憶がどうか、悪夢がどうか、余計わけがわからないじゃないか。

「……」

鍵付きの棚の鍵を開け、中の玉璽を取り出す。

玉璽を手の平におさめ、握る。あの日のように。

この……意図不明の仕掛けをしたやつは……もしかして、董卓を嵌めた、黒幕なのだろうか。

董卓を悪役化して諸將を釣り上げ、混乱させ、洛陽を荒廃させた、黒幕。

洛陽陥落のあと、今まで、その姿どころか、影も見せていない。

「誰なんだよ……、せめて、顔を見せてくれよ」

玉璽を痛いぐらいに握り締める。

「あの夢の子、なのか？」

俺が悪夢の中で殺してしまった、顔の見えない、誰か。きつと俺の敵になってしまっ、誰か。

「何でこんな事……するんだよ。わけがわかんねえよ」

実際、この混乱で黒幕は何の得をしたというのだろう。それすらもわからない。

董卓との戦いは史実通りだが、その後の展開は今のところ大きく異なる。黒幕の存在がちらついたせいで、後の魏呉蜀の主たちが団結するという異常事態となったのだ。

「この状況、ある意味理想的だよ……三国が争わず、共闘しているっていうのは……敵なんて、いないんじゃないか？」

そう。敵はいない。少なくとも、三国を敵に回せるやつなんていない。

「……うーん、なら、こんなに心配する必要……ないような……うむ」

しかし、喉に魚の骨がひっかかっている気分だ。

「でも、魏呉蜀だけじゃなく、董卓軍とかの子たちにも、生きていて欲しいし……董卓……月……」

未だに、董卓の生死はわからない。

董卓軍の動きに大きな変化は見られないし、生きていると思うのだが……。

詠に、賈馱に事情を訊きたい。

生きているんだよな、つて。月は、生きているんだよなつて訊きたい。

「あー、でも、詠、正体隠してるんだよな。苟攸だっけ。あああ、事情が込み入りすぎて、頭が爆発しそうだ!」

まるで、からまってほどけない糸のよう。

「はあ……」

こんがらがらる頭を振り、立ち上がる。

ふと、視界の隅で、何かが光った。

「……ん？ あ」

それは、一振りの刀だった。

俺がこの三国志世界に戻ってくる切っ掛けになった日本刀だ。刀は太陽の光を反射し、まるで俺を呼んでいるみたいに強く輝いている。

俺は、刀を手に取り、鞘から抜きはなつた。

無銘の刀は、俺の動きに応えるように、しつくりと手の中におさまり、何かを訴えるように、ずしりと重さを俺の腕に伝えた。

「斬れつて？ 何をだよ……この三国志世界をか？」
快刀乱麻。

そのために生まれてきた刀。

「ははっ、頼もしいな。そんなことができるなら」
でも、できるような気がする。

だって、この世界に俺を呼び寄せた刀なのだから。

この、もつれ、みだれ、からまり、かたまってしまった乱世を。

ヒュオンツッ！！

俺は、刀を、大上段から、一気に振り下ろした。

空気が割れ、風が鳴る

斬ることが、できるのかも知れない。

「さて！ 皆さん、杯は行き渡りましたか〜！」

劉備が大広間の一段高いところから音頭を取る。

眼下には曹孫劉各軍の将と軍師の多くが揃っている。

「ではではでは！ ええー、日頃の色々な色々に感謝して！

乾杯っ！！」

「かんぱーい！！」

「かんぱい」

「かんぺー」

「色々な色々って何よ」

不揃いの唱和を開始の合図に、酒宴が始まる。

俺は手元の酒を一口呷り、ぐるりと皆の顔を見た。

参加している人数は十人を軽く超える。

劉備連合軍からは、俺、劉備、孔明、嚴顔、趙雲、馬超、馬岱。

曹操軍からは、曹操、程？、許緒、楽進、李典、于禁、そして荀

攸（賈馮）

孫策軍からは、孫策、黄蓋。

「孫策軍は少ないなあ」

俺は大広間の中央で、大甕から酒をじゃぶじゃぶ酌んでいる孫策に話し掛けた。

「だって、半分長沙にいつちゃったし……新野の居残りも、陸遜と周泰しかいないわよ」

「そりやまた……」

「陸遜も周泰も来たがったんだけどね……とくに周泰は。あなたに挨拶したがつてたわよ」

「ああ、そうだよな。あの戦いのあとろくに話できてないし。俺もちゃんとお礼言いたいんだけどな」

と残念がる俺に、

「はっはっは、孺子……お主、うちの将を誘惑してなにをするつもりじゃ？」

ぐいつ、と肩に手を回し、黄蓋が俺に絡んできた。

「いや、誘惑なんて……って、黄蓋さん？ なんでもう酒の匂いがぶんぶんさせてるんですか？」

「あー、こつちに来る前から飲んでいたからな。ごくつ、ごくつ、ぶはあ。くつくつく、冥琳がおらぬとなればこつちのものよっ！」

「……すっかりできあがってるよ」

「よっほど鬱憤がたまってたのねえ。ま、それは私もだけど。ふふふ」

「ぐくぐく、と孫策は杯の中の酒を飲み干す。

(ここに留まると泥酔コースだな……逃げよう)

俺はそろりそろりと、脱け出そうとするが、

「どこへいくつもりだ北郷？ 儂の酒が飲めんというのか？」

「うふふふ、一刀。一杯の酒も飲み干さず立ち去るうなんて、酒宴の主人としてゆるされないわよ」

「はわわ！」

つい朱里のような声が出てしまった。

結局、一杯分の酒につきあう事になった。

「……あ、あれ？ あの子、袁術じゃ……？」

酔いこそまわっていないが熱くなつた体を柱にもたれさせ、会場をなにげなく一望していると、ひとりの少女を見つけた。

「ああ。私が誘つたのよ。あつちに張勳も来ているわ」

と、孫策。

「……袁術軍つて袁術と張勳しかいないんじゃないか？……大丈夫なのか？」

「さあね」

「ちよつと挨拶してくるよ」

その場を離れ、袁術と張勳の所へ行く。

「こんばんわ。袁術」

「ん？ ああ、あ……なんだつたかのう七乃？」

「変態豚野郎……じゃなかった、北郷さんですよ、お嬢様っ」

「……どうも」

不本意ながら軽く頭を下げる。

「おお。そうであった。北郷。こたびの宴へのまねき、感謝するのじゃっ」

「ああ。楽しんでいってくれたら嬉しいよ。あ、あそこにハチミツとか甘い物あるからね」

「おおお！ 気が利いておるのっ、北郷！ では早速……」

ぴよこぴよこぴよこ、と金色の子供が会場を駆ける。それを張勳が追いかける。

ちよつと微笑ましい光景に、俺は和やかな気分になった。

(やつぱり、普通の女の子なんだよな……いや、普通というにはお嬢様すぎるか)

ちなみに、前世界の俺の記憶として、袁術……美羽を抱いた記憶もあつたりする。どれだけ無節操なんだ前世の俺エ……。

袁術たちから目を転じると、劉備たちが視界に入った。

今回、関羽や張飛、鳳統、華雄、公孫贄は留守番だ。董卓軍には呂布という最強武将がいるため、武官を多く残さねばならなかった。「や、敵顔。良い飲みっぷりだね」

豪快な大きい盃に酒をくみ、景気づけに一気に飲み干した桔梗に声を掛ける。

「おお、北郷殿。宴の席ですからな。いつもはここまでの酒振りはしませんぞ?」

「あはは、本当かなあ?」

敵顔の酒仙っぷりをよく知っているから、つい、笑ってしまう。

「ところで、劉備軍に入つて少し時間たったけど、どうかな? 劉備軍は?」

「どつとは?」

さすが、酒をあれだけ飲んでも、重要な問いはきちんと聞いている。

「雰囲気というか……居心地、かな?」

「うつむ……一言で言い表すのは難しいですが……悪いところを探すのが難しい、と、言つたら答えになりますかな?」

「それは……うん。大分良い評価だね」

「左様。劉備軍の將兵たちもそうですが、なにより、主たる劉備殿、北郷殿が優しく強い意志を持っているのが良い。これは世の評判通り、と膝を打つた次第」

「ごくり、と小さな杯に持ち替えて一杯。

「そして……子供に親しみを持たれるのも良い。未来を、感じさせまする」

「子供か……」

俺は、桔梗の友人である黄忠、その娘である璃々のことを思い浮かべた。

「できるなら、我が身が尽き果てるまでに、劉備殿の世が来てほしいものですな」

「……ああ。そうだな」

敵顔に酒を注ぎ、俺も敵顔に酒を注がれ、飲み干す。

「敵顔さん、あ、ご主人様も。楽しんでますかあ？」

劉備がちよつとだけ危うい足取りで寄ってきた。かたわらには少し赤い顔の孔明がいる。

「ああ。2人も、楽しんでるみたいだね」

「はい。曹操さんにもらったお酒が美味しくて。ご主人様ももらってくると思いますよ」

「……桃香様、あの、重いです」

ふらふらしている桃香は、時折、朱里に寄りかかってしまっている。

「ええ……私そんな体重増えたかな……」

と、服の上からお腹をつまむ。

「……おっぱいが重いんです」

朱里は羨ましそうに、己の肩に乗せられた、双玉を見る。

「はっはっは」

敵顔が笑い、劉備たちに酒をすすめる。

多分、桔梗なら自分の酒量を調整して、劉備たちの面倒を見てくれるだろう。そう判断して、俺は一度離席することにした。

「さて……次は誰の所に行くかな。ん？ 馬超と趙雲に……曹操と程?? 見ない組み合わせだな」

めちやくちや盛り上がっているわけではないが、それなりに会話が弾んでいる様子 of 4人の所へ向かう。

「まあ、その他に繋がりがあるわけじゃないんだけどね。顔も遠くから一度見たことがあるだけで……あら、北郷」

何事か話していた華琳が、俺に気付き、少しスペースを空けてくれた。

「なんだか楽しそうだけど、何の話をしてたんだ？」

「涼州の馬超が顔を見せているから、母親の馬騰の話をしていたのよ」

「馬騰……？俺はよく知らないけど、西涼の領主、だっけ？」

と、馬超の顔を見る。

「ああ。私の母親で、馬岱の叔母だ。それより、曹操の話を聞いたんだが、すごいんだぞ！」

「なにが？」

「私と馬騰が同じ世代だっという話よ」

「……………はい？え、いや、馬騰って馬超の母親で、それと同世代って！？」

実は華琳はおば

「朝廷への出仕、仕官が同じ年だったのよ。馬騰は出仕がかなり遅かったから」

「……………な、なんだ。そういうことか」

ほっとした。

「一瞬、曹操さまがとてつもないおばさんなんじゃないかと思いましたがね、お兄さん」

程？が目ざとく俺の様子を見て取り、つぶやいた。

びきつ、っと華琳の顔に怒りのマークが浮いた。

「あなたは私のことをなんだと思っているのかしら？」

「い、いや、同世代って言われたら、みんなそう思うって、な？」

そうだよな？」

救いの手を求めるが、趙雲も程？も目をそらした。

馬超に至っては顔までそらした。

翠いいいいっ！！お前絶対俺と同じ事思ってただろおおおお

お！！

「あ、あの、あれだよ。大人びて見えるからさ、本当は何歳なのか

わからないっていうか……が、外見かなり若くみえるしさ」

「……そうね。外見だけじゃなく、中身も若いと評してもらいたいところだけど」

「ぷっ、くく……我が主の前では、曹操殿もかわいげのあることよ」

趙雲は肩を揺らして笑いをこらえた。

「そりゃそうだよな……袁紹と同年だっけ？」

と、馬超。

「……」

曹操は沈黙し、ゆらりと馬超の方を向く。

俺は曹操の追及の手から逃れ、華琳の後ろに回った。

……馬鹿馬超め。華琳は麗羽より年下だ。

「ぎゃ、ぎゃああああああ!!」

翠は女の子らしくない悲鳴をあげた。何が起きているか、見る勇氣はない。

「がくがくぶるぶる……お、おお!? ちょ、ちよつと曹操!」

震えていた俺は、ありえないものを見つけて、慌てて華琳の肩を掴んだ。

「な、なによ?」

華琳は突然触れられて不快なのか驚いたのか体を硬直させた。

「あれ! え、袁紹じゃないか!？」

俺が示した指の先には、黄金の巻き髪に深紅の盛服。見紛う事なきド派手な姿は、明らかに袁紹だった。

「ああ……来たのね。一応、私が呼んでおいたのよ」

「マジでか!？」

袁紹は、名目上はともかく、俺たちと敵対している勢力と云っていい。反董卓連合の盟主だったとはいえ、それをいつのまにか放棄して冀州に帰ったうえ、領地外で好き勝手なことをやりはじめたのだから、少なくとも味方とはいえない。

「文醜も来ているわね……ふうん。招きに応じず、この機にエン州に入ってくるなら、夏侯惇と夏侯淵、典韋、それに荀?、郭嘉で逆

撃させようと思ったんだけど……」

「ああ、なるほど。だから来てないのか」

華琳の隣にいつもいるはずの少女がいなかったから、不思議だったのだが、それなら納得がいく。

「ふん。宴に来て欲しい、麗羽がいれば盛り上がる、とお世辞を書いてやったらこのざまか。今生け捕れば、天下は安定しそうね」

「……でも、いくらか兵も連れてきてるだろ。文醜も……あ、顔良はいないのか」

「あの子は袁紹軍の中でも常識的だから、領内で待機しているんでしょう。同情するわ」

「そうだよなあ……で、どうする？」

「止めときましよう。ここで暴れられて、取り逃したら面倒だわ」

「おう。厄介なことにならないよう、警戒しておくよ」

「ええ……。はあ、それじゃあ、見え見えの腹でも探ってくるわ」

と、曹操は、手を振って麗羽の方へ歩いていった。

ああ見えて、別に袁紹のこと嫌いじゃないんだろうな……本人は認めないだろうけど。

「じゃあ俺も、別の所につと」

曹操と逆の方向に歩を進めると、銀髪の少女がかがんで、余興の準備をするための天幕の中を覗いていた。

「お、楽進。なにやってるんだ？」

「あ、隊長！」

咎められると思ったのか、楽進はびくつ、と震えて、慌てて立ち上がる。

？水関で協力してくれた楽進・李典・于禁の3人は、まだ俺のことを隊長と呼んでいる。曹操が俺に貸してくれる部隊は大体この3人と荀攸が率っていて、今でも、よく顔を合わせるから、違和感はなくなってきたが。

「実は、この中に李典と于禁が入ってしまった……」

「へえ。誰かなかにいるのか？ 余興のために楽師とかが来ると

は聞いたけど。

「ええと……なんでも、あいどる、とかいうのが」

「あ、あいどる？」

もろ英語なんだが……。

「はい。たしか、数え役萬 姉妹、というらしいです」

「ああ……聞いたことある」

というか知っているし会ったこともある。黄巾の乱の首謀者、張角・張宝・張梁の3人で結成されたアイドルユニット……だ。

「それで、そのアイドルを探しにいつちやったわけか」

「はい……止めたんですが」

「いいよいいよ。凧は気にしないで」

凧の肩に手を置き、慰める。

「ちよつと中はいつてみようか」

「いいんですか？」

「大丈夫だよ。一応主催者だし。ほら、いこう」

凧の手を握り、テントの中に入る。テントといってもかなり大きく、入っても中が全て見えるわけじゃない。

「沙和、真桜？」

名前を呼び、2人を探す。

「ん……隊長？」

「あ、いた」

声のする方へ足を運ぶとすぐに、2人の姿を発見できた。

それだけでなく

「お？ 馬岱と許緒も一緒か」

「北郷さん！」

「え、兄ちゃん？」

蒲公英と季衣が肩を並べて、沙和や真桜と何かを見ていたようだった。

「何してるんだ？」

「おしかったな。今さっき、数え役萬 姉妹がここにいて、色々

準備してたんやで？」

「へ〜。4人ともそれを見に来たわけか」

「うん！ もう、すごかったんだから！ 舞台衣装とか、化粧とか、歌の練習とか！！」

蒲公英が興奮して飛び上がらんばかりの勢いで喋る。

「そっか……準備が終わったって事はそろそろライブ……舞台をはじめるって事かな？」

「あ、そうなの！ 見に行かないと！！」

沙和たちは焦ってばたばたとテントを飛び出していった。

残された俺と凧は、顔を見合って苦笑した。

「それでは、私は沙和たちと合流いたします」

「あ、うん」

テントを出ると、凧はつい繋いだままにしていた手を離れた。

「あの……よければ、苟攸さまのところへ」

「え？」

「それでは！」

凧はぱつと踵を返し、大広間の一角にある舞台の観客席の方へ消えた。

「苟攸……」

俺は、三つ編み眼鏡の少女を搜索する。

たぶん……凧の言い方だと……彼女は今、一人なんだ。

左右を眺め、パーティーのざわめきから遠いところに視線を走らせる。

いた。

宴の中心からは死角になる位置。柱の一本に背中をくっつけて、何を見るでもなく、何をするでもない少女一人。片手に杯をもっていることだけが、この場に参加している、ということを示している。

「や、苟攸」

少し離れた位置から、彼女の名を呼ぶ。

「……どうも」

荀攸はちよこつと杯をあげて、こたえる。

「この前は世話になったな。おかげで助かったよ」

俺率いる、劉備軍旗下、豫州北郷軍はたびたび賈馱率いる援軍に助けられている。もちろん俺が曹操軍を援護することもあるが、どちらかといえば助けられる事の方が多い。

「いえ。命令に従ったままでです」

「そっか」

荀攸は最小限の言葉で俺との会話を終わらせたがっているようだった。

(よく考えたら、月を介さずに詠と接触することなんて、ほとんど無かったな)

月がいて、俺がいて、詠がいる。それが基本だった。

「色々大変なこともあるけど、董卓軍と戦うことを考えれば、こっちのほうが良いよな」

劉備の洛陽方面軍は、毎日とは言わないまでも、一週間に数回は董卓軍と接触している。どれも本格的交戦に至るものではないが、神経をすり減らす状況が続いている。

「そう、ね」

董卓軍の名前が出て、荀攸の声が、少しつまる。

(荀攸……この反応、やっぱりこれは賈馱だよな)

荀攸が、前の三国志世界の賈馱とは別人である可能性もあったが、もう、それは無いと思えた。

(あとは……どうにか、月のことを聞き出さないと)

「……俺、守りたい……助けたい子がいるんだ」

「？」

何を言い出すのかと、荀攸は首を小さく傾げる。

「それが一人なのか、複数なのかはちよつとわかんないんだけどさ」

「一人か複数かわからないって……それは……国とか、民衆とか？」

「うーん。それもあるけど……もう少し限定すると、劉備とか、関羽とか」

「わ……………私はっつ！ あんたのようにっ！ 誰も彼もに生きていて欲しいなんて思わないっ！！ そんなの……………そんなの……………無理、なんだから。私がいま、生きていて欲しいと思っっているのは、一人だけ……………ひとりだけなんだからっ！！」

そう叫んで、彼女は、俺の目の前から走り去った。

俺は、彼女の背が小さくなっていくのを、ただ、見ているしかなかった。

「やっちまった……………」

罪悪感で、胸が痛く、苦しい。

（あの子が、詠だっっていうのはもう、確定だ。詠以外が、董卓のとであんな反応するもんか！ でも……………）

頭をがりがり掻く。

（結局、月が生きているのか死んでいるのかわからなかった！ しかも、詠を泣かせて！ 月が生きているならまだいい。だが死んでいたら、俺は、詠にひどいことを……………！）

後悔で潰れてしまいそうだ。

（月が死んでいたら……………全力で、一生かけてでも詠に償おう。生きていたら、今度こそ、絶対を守るんだ ……！）

俺は、拳を握りしめ、決意した。

そしてそんな俺の背中を

「なに私の愛しい部下を泣かせてくれちゃってるのかしらっ！！」

ドガッツ！！ ……っという音をあげて、強烈な一蹴りが背中にぶちこまれた。

「そ、曹操！？」

曹操は凄みのある笑顔で、俺の襟首をつかむ。

こ、恐い！ 恐いっつて！

「ふふふ、なあに？ 手を出そうとしたの？ 私の軍師に？ それ
は私への宣戦布告とみなしているのかしら？」

「ま、待て！ 違う、落ち着けてっつて！ うわああああああ！！」
大広間に俺の断末魔の叫びがこだました。

幸いというか天和たち数え役萬 姉妹のライブ中だったので、たいした注目も集まらなかったが……。

俺の寿命、多分、年単位で縮まった気がする。

(これが……天罰か……ごめん、詠……)

俺は薄れ行く意識の中で、詠に何度も何度も謝罪するのだった……。

宴から数日後

荊州、新野。孫策居城。

「はぁーあ。退屈ねえ……」

孫策が、城の大広間、首座にすわって肘をつき、拳に頬をのせて、だらけていた。

「雪蓮さま……いくらなんでも、お城の一番いい席でだらけないでくださいよ」

陸遜が、主をなよなよとたしなめる。冥琳と違って、たしなめ役としての迫力はない。

「なによう。何かあればちゃんとするわよ。でも、やることないし。賊も出ないし」

「蓮華さまや冥琳さまは、今頃長沙に到着して頑張っているでしょうから、雪蓮さまも頑張って下さいよー」

「蓮華たちねえ……この前襄陽の劉表のところを無事に通過したらしいし、あとは大した問題ないじゃない。あそこらへん何もなければ何も起きないし」

「うわぁ……孫堅さま縁の地になんてことを言っんですか……」

「ま、そうね。穏が面白いことやってくれれば、やる気出すわよ」

「うわ、無茶振り……上司の無茶振りだ……」

陸遜は困り切った顔をし、そして何かを閃いたように、顔を明る

くさせた。

「それでは、この前北郷さんに教えてもらった一芸を披露させてもらいます〜」

「へえ。一刀に？ それは面白そうね」

孫策は興味を示し、椅子に座り直した。

「じゃあいきますよ〜」

と、陸遜は右手の手の平と左手の手の平を、まずは孫策の前に示した。

そして片方の手の親指を手の平の内側に隠し、もう片方の手の親指の根元を、同じ手の人差し指で隠した。

最後に、その根元の隠れた親指を、逆の手の人差し指の隣に重ねて……

「さあ、親指に注目ですよ……、すうっつう、しゅぽん！ っと

！ 親指取れちゃいました！ どうですか雪蓮さま！ 宴会芸ならぬ天界芸ですよ〜！ あ、あれ？ 雪蓮さま？ 面白くないですか〜？」

「……………」

孫策は死んだ魚のような目でそれを見た。そして、

「…………… 陸遜。偶然だけど、私も同じような芸ができるわよ。題して首が取れちゃう芸。まあ、これは協力者が必要なんだけど」

「ひっ、ひいい〜！ 雪蓮さま！ 目が恐いですっ！」
穏は泣き顔になって震えた。

そこに、ひとりの少女が黒い影となって登場した。

「孫策様ー！！」

「明命？」

明命。周泰だ。

周泰は、背中にとひとりの少女を背負っていた。少女は体をぐつたりと周泰に預け、疲労していることが見て取れる。

「…………… はあ…………… はあ…………… 孫、策様……………」

「その娘…………… し、思春！？ 思春なの！？」

孫策は慌てて周泰と、背負われた甘寧の元に駆け寄った。陸遜も、即座に視線を四方に飛ばし、人払いができているかを確認した。

「なにが、何があつたの思春？ 怪我をしているの？」

甘寧は孫権と一緒に長沙へと赴いていた。思春に何かあつたのなら、孫権たちにも何かがあつたに違いない。

孫策は焦燥を感じながらも、甘寧を揺さ振ったりはせず、様子を窺った。

周泰の背から下ろされ、絨毯の上に寝かされた甘寧は、肩で息をしつつも、口を開けた。

「い……いえ……どこもやられてはおりません。ただ……ほぼ無休で、ここまで……駆けてきて……」

「な……！」

長沙から新野まで数百？。馬と船もあるが、この疲れ方は、尋常じゃない方法でここまでの距離を踏破したことをうかがわせる。

「それで！ なにがあつたの！」

「長沙が……蓮華さまのいる長沙が……！！！」

差し出された水を含み、甘寧は、血を吐くように叫ぶ。

「劉表率いる大軍に……！ 包囲されました……！！！」

同日、甘寧が新野に到着する少し前

「洛陽が見えてきましたよ」

一台の豪華な馬車が、都への道に行く。

格子付きの窓から外を見る少女は、豪華な馬車に似付かわしい、尊貴な身分を思わせる宮廷衣装を身に纏っている。

けれど。

少女の表情は深い愁いを帯びていて、まるで、この馬車が、棺か牢獄であるかのようだった。

「どうか、そんな顔をしないで」

馬車に乗っている、もう一人の女が、悲しげな瞳の少女に声を掛ける。

彼女の方も、やはり高貴さを想起させる礼服。だが、こちらはどちらかというと、官僚か軍師といった様子の堅苦しさがある。

「大丈夫ですよ。あなたの身の安全は、私が保証いたします」
それでも、少女の憂色は消えない。

「きつとあなたのご友人にも会えますよ」
びく、と、少女の体が震えた。少女の目に初めて希望の光が、かすかに、きらめいた。

「ふふ。さあ……まいりましょう。乱れ世の大渦、その中心、わが都へ。さあ、お手をどうぞ 董卓殿」
ふふふ、と女は笑い、月の手を取る。

この日 洛陽に、皇帝の使者を名のる一団があらわれた。

そして、この日を境に、乱世は新たなる混沌の姿を見せることになるのである。

第6話 無銘伝四下蒼天暗路（後書き）

第6話、いかがだったでしょうか。

拠点フェイズのつもりで書いたので、そんなに長くなることは無いだろう……と、気楽に、プロット通り書いたのですが、まさかの三万五千字超。どうしてこうなった……。

内容について

・偽名が増えて、ややこしくなってきました。

念のため、

葉雄 華雄

荀攸 賈馱

です。

・作者は、白蓮を除くと、愛紗・華琳・蓮華が好きなので、作中でやたらひいきされています……。

できるだけ全員だそうとは思っていますが。

セリフも出番も全然無いキャラとかいますね。魏延とか呂蒙とか。これからも、出すの忘れてるキャラとかでそうなので、掲示板でも気軽にツッコミ入れてやって下さい。

それでは、ごらん頂きありがとうございます！

第7話はさすがにこんなに時間はかからないと思います。た、多分。

ではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7569r/>

恋姫十無双 外史『無銘伝』

2011年10月8日18時15分発行